

学長賞

「Absolute/Fragile」 詞創

附属図書館長賞

「青 海」

池田結理愛

「ネパールランドの黎明」

坂田悠美香

「ロストティーン」

吉野 美羽

第16回熊本大学

東光原文学賞作品集



2024年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十六回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十六回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

大学長のことば

熊本大学長 小川久雄 / 4

発刊のことば

館長のことば

熊本大学附属図書館長 宮崎 誓 / 6

第十六回東光原文学賞作品集の公刊によせて

学長賞

Absolute/Fragile

詞 創 / 9

(文学部文学科三年)

附属図書館長賞

青海

池田 結理愛 / 52
(文学部文学科二年)

附属図書館長賞

ネバーランドの黎明

坂田 悠美香 / 87
(文学部総合人間学科三年)

附属図書館長賞

ロストティーン

吉野 美羽 / 138
(文学部文学科二年)

選考を終えて

濱田 明 「東光原文学賞総評」 / 184

畑 亜弥子 「バラバラの破片から立ち上がる物語」 / 189

農 孝生 「変化への不安」 / 193

発刊のことば

熊本大学長 小川久雄

「熊本大学東光文学賞」は、熊大生の言語力向上と創造力豊かな学生の育成、さらには地域社会における文学・文化活動の中核となる人材の輩出を目的として平成二十年度に創設され、長きにわたり創作という能動的な知的活動の機会を提供してまいりました。

第十六回目を迎えた今年度は、学生・大学院生から十五篇の応募があり、文系に留まらず様々な学部・大学院からの応募がありました。留学生からの応募もありました。分野を超え、創作活動に励まれたことは、教えられるのではなく自ら学び作り出す、すなわち単に知識を受けるだけでなく、目的意識を持って自ら学ぶという、重要な姿勢であります。

熊本大学は、「創造する森 挑戦する炎」というコミュニケーションワードを定めています。応募者の皆様がこれまで生きて、学んで、習得された様々な知識と経験をもとに創造し、それを文章として具現化するその姿勢は、まさに「創造する森 挑戦する炎」を行動で示しているものと考えます。

表彰式において、学生の皆様に直接触れあえる機会を設けることができ、嬉しく思います。

学長賞、附属図書館長賞を受賞された四名の方をはじめ、惜しくも受賞とならなかった応募者の皆様も、これをバネに大きく飛躍するための糧と捉え、引き続き創作活動に勤しむことを期待します。

最後に、受賞者の皆様をはじめ、文学賞に応募したすべての皆様、審査の労を取って下さった委員の方々および本事業実現に尽力された方々にこの場をお借りして謝意を申し上げます。また、本書を手にとってくださった皆様が熊大生の文学に触れ、創作に、読書に親しみを持ってくださいることを祈念して、発刊のことばとさせていただきます。

令和六年一月十二日

第十六回東光原文学賞作品集の公刊によせて

附属図書館長 宮崎 誓

東光原文学賞受賞、おめでとうございます。

さてさて、私も筆が進まないジレンマに陥りました。数日前から、附属図書館長の挨拶文を考えています。原稿用紙四枚程度かな、と小中学校に戻った気分です。研究計画書などは、比較的スラスラ書けますが、「洒落た挨拶文」を書くべく壮大な構想を描くと、途端に筆がストップ、はっと気づきました。東光原文学賞応募者は、どうやって筆を進めたのか、今の私と同じなのか、モーツアルトのように溢れ出るようなアイデアで、書くことが止まらなかったのか、と。

東光原文学賞は、熊大生に小説を書く機会を提供する附属図書館の誇れるイベントです。この企画は、二〇〇八年度に始まり、今回で第十六回目です。熊大生であれば、学部生・大学院生・留学生を問わず応募できます。従来の大賞・優秀賞の名称を、昨年度より、学長賞・附属図書館長賞に変更し、全学的企画と位置付けました。二〇二三年度は、六月より募集を開始し、十一月七日に締め切りました。応募は計十五篇、内訳は、文学部八篇、教育学部一篇、理学部二篇、医学部一篇、社会文化科学教育部二篇、自然科学教育部一篇です。留学生の作品にも、審査員から注目が集まりました。

第一次選考を経た八篇について、十二月十四日に選考委員会を開催し、本学人文社会科学研究部教授の濱田明先生（委員長）・同准教授の畑亜弥子先生に加えて、熊本日日新聞社論説委員会副委員長の農孝生先生の三名による第二次選考で、学長賞、附属図書館長を選出しました。

私は陪席しながら、コメントを挟むだけです。「応募してくれてありがとう」と思いながら、「どうも表現がイマイチ」「作品のプロットはもっと改良できる」「この話題は、自分の好みでないな」など、厳しい目でつぶやくつつ、遠慮がちに順位をつける。温かい目で何度も読み返し、作品を迫体験し、「なるほど」と膝を打つことはたびたびです。選考委員会では、ストーリーの面白さ・意外性とともに、文章表現の的確さも吟味します。選者の嗜好もありますが、議論が煮詰まり、作品の優れた点を共有します。そして、今年度も受賞に相応しい作品が選出されました。読み応えがある選外の作品も少なくありません。「よくやった」と応募者に無口で語りかけ、書いた動機を聞きたいと思ったのは、その場にいた私の気持ちです。

今年度の入選作を読みました。大学・バイト・帰省での会話が今の学生の零囲気を伝えます。自分の成長を意識しながら、実感がないフワフワした気分の学生たちを読ませてくれます。「私に共感して」と主張するのではなく、自分の考え・気持ちを朴訥と語る、これが現代の学生気質かな、と勝手に妄想してしまいました。想像力をフルに働かせた実話に基づいた作品にも、控えめに自分を語る学生の姿が目につかびます。普段から使用している言葉が飛び交い、学生のコンパに「レトランジェ（異邦人）」の私が、ポツンと座っている感じです。学生の目の動きにつられて、私の目も動く、こういう読書会でした。文学賞の主催者という楽しい経験をしました。学生の筆を執る姿を想像し、自分自身をさらけ出そうとしている作品から、いろいろな想いを巡らせ

ることができました。

創作活動は言うは易く、実際の執筆となると、困難に突き当たります。楽しいけれど苦しい。

ノートや手記の延長でスラスラ進んでも、頂上に到達する最後の一步が難しい。プロの作家とは、継続的に小説を書くことです。小説を楽しむアマでもいいです。是非、自分の人生を見つけて下さい。期待しています。

東光原とは、第五高等学校の運動場名です。

この地に、附属図書館が建てられ、文学賞の名前に冠しています。連綿と続く大学の歴史を感じて、文学賞が発展することを祈念します。大学附属図書館は、知の貯蔵庫です。本の貸出だけでなく、貴重資料の保存・公開、市民講演会、研究支援など多岐に亘り、大学の教育・研究・地域貢献を支えています。東光原文学賞の企画・選出も図書館の方々に骨を折っていただいています。栄えある文学賞の表彰式に立ち会えたことは、附属図書館長としての喜びです。



上段：農・濱田・宇佐川・畑

下段：坂田・篠原・小川・宮崎・池田・吉野

Absolute/Fragile

詞 創

木製のグリップと同化した指先から、ラケットに血液が流れこんでいる。鮮やかに赤いラバーが脈打って、放散する体温と同じ熱を宿す。

右手にそっと包んだ白球の、つるりとした表面。その微細な傷のありようさえ、目視で確認するまでもなく知っている。

もちろん、すべては錯覚だ。そういう感じがする、というだけの話——それでも、最小限に抑えられた空調の気流を、汗ばんだ皮膚が理解する、そんなとき。

観客席から浴びせられる声援が、水底にいるようにくぐもっている、そんなとき。

この両手には、絶対が握られているのだと。
あの日の私は、そう信じていた。

耳障りなアラーム音に重い瞼を上げる。眠い目でスマホの画面を見れば、ちょうど正午を回ったところだった。

朝練は七時から、つまりは五時間の遅刻——なんて、とっくに絶えて久しい習慣で冷や汗をかく。それが過去の話だと気づいて胸を撫で下ろしたあと、ひとり口の端を歪める——馬鹿みたいだ。大学生なんて、およそこの世で一番自由で、墮落を許された身分なのに。

すっかり豆が薄れて柔らかくなった左手の平で、ぱちんと頬を叩いて眠気を覚ます。大学まで自転車で五分程度。三限には余裕で間に合うとはいえ、身支度の時間くらいはきっちり取るべきだろう。

なおも誘惑する毛布を剥ぎ取って、私は洗面所へと歩きだす。

三、四限に講義を受けて、今日の時間割は終わり。大学での一日の、高校までと比べれば拍子抜けしてしまうくらいの呆気なさにも慣れてしまった。

一年生の前期も終盤に入り、いまだにいずれのサークルにも入っていない私は、暇を持て余して自転車を漕いでいる——買い出しのため、最寄りのスーパーまで大学からさらに五分。私の行動領域は、高校時代と比べて随分ミニマルに収まっている。

途中、古びた四角い建物の前を通り過ぎようとして、ついブレーキをかけてしまった。コンビニを気持ち大きくしたくらいの、スポーツジムとしては手狭なその場所。小学校時代の

クラブで使っていた市民卓球場の方が、まだいくらか広かった気がする。

擦れたガラス張りの向こうで、半袖短パン姿の細身の少年が軽快に縄跳びをしていた。こちらに気づくと、跳躍を中断してひらひらと手を振ってくる。片側だけ吊り上がった赤い唇の間から、その肌と同じくらい白い歯が溢れた。

よう、ミヒロちゃん——聞こえなくてもわかる、そんな馴れ馴れしい呼びかけに応えて、私は仏頂面で小さく手を上げる。

正直なところ、自分でもよくわからない。未来永劫入会予定なんてない格闘ジムに、どうしてこういつもふらりと立ち寄ってしまうのか。

肩から掛けたお気に入りのトートバッグに、どうして『キックボクシング入門』基本から応用までわかりやすく』なんて本が入っているのか。

どうして、このシドウという少年から目が離せないでいるのか、どうにも。

シドウとの出会いは、六月の頭、市役所地下駐輪場に遡る。

『車室番号を入力して下さい』

耳慣れた機械音声に従う前に、百円玉を取り出す。この料金システムは、六時間ごとに百円、はじめの二時間は無料だけれど、あいにくとその時は駐輪から三時間が経過していた。

記憶を辿って番号を打ち込み、精算ボタンを押す。
かちゃん、という解錠音が響いた。

「え？」

液晶にはゼロ円と表示されていた。記憶違いか打ち間違いを疑ったけれど、三六番室に停めた自分の自転車のロックは解除されていた。首を捻りながらも、回収しようと後ろの荷台に手をかける。

「よっ、そこのおねーさん」

突然、背後から声をかけられたのはその時だった。びくりと振り返れば、黒いパーカー姿の影が佇んでいた——同色のスキニーパンツ、スニーカーと合わせて、本当に影のようだった。

「あの、えっと……どちら様、ですか？」

黒ずくめの不審者に声をかけられるという状況においても、思ったより私は落ち着いていた。それはきっと、彼が男と呼ぶにはいささか幼く思えたことが大きい。背丈は一七〇センチ台前半、黒ずくめの衣服に肌の白さが映えている。まだ骨格の未完成な線の細い身体つきに、合唱ではソプラノパートをこなせそうな声音からして、どう年嵩に見積もっても成人しているとは思えにくかった。

「おねーさん、百円貸しな」

やはり少年らしい声色の、そんな言葉足らずな言葉の意味を、たっぷり十数秒かけて噛み砕く。

「……ああ、きみ、もしかして三六番に」

「三十分待ったよ」

どうやら、私の分の駐輪代を誤って払っていたのは彼だったらしい。

——たかだか百円のために三十分も張ってるなんて、なかなか現金なやつだな。

「はいどうぞ、百円ね」

「え？」

「え？」

果たしてそんな私の見立ては間違っていて、投入口に入れる予定だった硬貨をそのまま彼に渡して終わり、とはいかなかった。

心の底から意外だとも言うような顔で。

「いや、利息分が含まれてないじゃん」

現金どころではない、とんでもない業突く張りだった。

「ふいー、食った食った。さんきゅな、おねーさん。あの店、前から行ってみたかったんだよ。当たりだったな、あんたもそう思うだろう？」

一足先にラーメン屋を出た少年——シドウと名乗った彼が、上機嫌そうに爪先でアスファルトを叩いた。

チャーシュー麺煮卵トッピングに替玉、さらに半炒飯セット、しめて一五八〇円。元本百円の利息が三十分で十五倍に膨れ上がる暴利など、今後の人生でお目にかかることはまずないだろう。

「……きみ、もしかして始めからそのつもりだったの？」

切れ長の瞳が、大きく拡がって四白眼気味になる。その仕草にわざとらしさは感じられなかった。

「そのつもり……って、奢らせるつもりで目をつけてたって意味？」

「うん」

「ははっ、まさか！ たまたま間違えて駐輪料払った自転車の持ち主が、たまたま奢ってくれそうなおねーさんだったってだけだっ」

「……そう」

それはそれでどうなのだろう、と思う。

押しに弱いとか、頼まれたら断りづらいとか、特別そんな性格はしていないつもりだ。にもかかわらず、出会い頭に『上手く頼めば奢ってくれそう』と値踏みされて、しかもまったくその通りに動かされたというのは、なんとというか、業腹だ。『自分は詐欺に遭わない』と思っている人間こそ詐欺に遭いやすい、というセオリーの亜種になってしまったようで——別にシドウを詐欺師扱いするわけではないけれど——納得がいかない。

「……未紘」

その結果として口をついたのは、私の名前だった。

「え？」

「倉科未紘。今日、きみにチャーシュー麵味玉トッピング替え玉及び炒飯セット、しめて一五八

○円分をご馳走したひとの名前」

『奢ってくれた親切なお姉さん』か、『まんまと乗せられた鴨葱女』か、どんな形容にせよ、その役回りに固有名詞を与えておきたかった。今夜のラーメンの味に紐付けて、私の名前くらいは覚えておくべきだ。

そんな一方的な思惑を突然ぶつけられたシドウは、薄くて鮮やかな唇をしばらく半開きにしていたけれど、やがて小さく動かし始めた。

「クラシナミヒロ。クラシナミヒロ。……おう、覚えた。改めてありがとな、ミヒロちゃん」

「一応歳上だと思っただけど、私。大学一年」

「俺高二。あー、じゃあミヒロ姉さん？」

「それはそれで違和感すごいけど……まあ、なんでもいいよ」

どうせもう、会うこともないんだし——そんな含みを知ってか知らずか、シドウは「なら、俺も知ってもらっとかないとな」と謎めいたことを口にした。

何を、と聞く私の手を引いて、彼が足を踏み入れたのは人通りのない開けた路地裏だった。

「ちょっと、こんなところで何を……」

「覚えとけよ」質問には答えず、シドウはふらふらと手足を揺らす。「今晚、自分が誰に飯奢ったのか」

とーんとーんとーん、とスニーカーが地に弾む。その動きは兎のように軽やかで、次の踏み切りで月まで飛び跳ねて行ってしまおうのではないか、なんて突飛な空想が脳裏をよぎった。

「すごい、ボクシング」

だから、思わず漏れたそんな言葉は、素人ながらに限りなく純粹な賞賛だったけれど。放たれようとした左拳が宙で静止して、不服げな流し目が私を捉えた。

「違えよ」

ぎゃり、とスニーカーが石畳を抉って、シドウは体ごとこちらに向き直っていた。

左肘が持ち上がる。左膝が体の脇で抱え込まれる。その瞳には凧だ確信が宿っている。

その瞬間、私は放り上げた白球を思い出す。指先と溶けあったグリップを思い出す。ラケットが届く半径約一メートル圏内の、すべての事象を掌握しているような、あの一瞬の静寂を、思い出す。

ああ、これは——彼にとっての絶対だ。

刹那、天上と私を繋ぐ糸を断ち切るように、黒い足先が頭上の虚空を切り裂いた。

私は、目を瞑ることもしなかった——反応できなかったわけではない。

ただ、見惚れてしまっていた。

そのまま慣性に任せてくるりと一回転したシドウは、片頬を吊り上げて宣った。

「俺のはキックボクシングだ。覚えとけよミヒロちゃん、十年後には世界のベルト巻いてるから」

紫藤シドクが実際は苗字であり、下の名前は夏生流カオルだったという事実が判明したのは、その翌日、初めて間もない学習塾のチューターバイトの最中だった。

「うちの高校じゃちょっとした有名人だよ。なんか将来はけーわん？選手になるんだって。倉科シナ先生知り合いなの？」

教えてくれたのは、高等部二年の藤森佳奈カナちゃんだった。ファンシーなあだ名は恐るべきことに初対面のときからで、どちらかといえば口下手な方の私が、彼女を前にするといつになく饒舌になってしまうような聞き上手の一面を併せ持つ。今までの友人関係にはおよそいなかったタイプのコミュ力強者だ。

現役女子高生恐るべし……なんて、つい半年前までは私もその区分に違いなかったのだけれど。どこでこうも差がついたんだろうか。

「いや、まあ、知り合いつてほどでもないんだけど、ちょっとね。あいつ、学校じゃどんな感じなの？」

「んー、別にフツーにしてるっばいよ。クラス違うしあんま知らないけど。ああでも、女子の間じゃけっこう人気かも。色白いし細いし、鼻筋とかちょっとハーフっばいし、なんか遠巻きに見てたい感じだよねー。まあアタシの好みとは違うけど……え、なに、まさかシナモンああいう系がタイプ？」

「そういうんじゃないって」

「いないと思うけど、一応彼女いるかどうか探っとこっか？シナモン美人さんだし、全然イケると思うよ」

「いや、本当そういうんじゃないから」

「大学生と高校生ってギリ犯罪じゃないんだっけ？」

「……」

恋愛話となると目の色を変えてのめり込むのは、流石華のJKといったところか。

「あーでも、彼氏にはいいかもだけど結婚するってなったらねー」

「え？」

その書き文字同様丸っこいショートボブをくるんと揺らして、つぶらな瞳をぱちぱちさせながら、カナちゃんは細い指をぴんと立てた。

「ほら、格闘技のヒトって全然稼げないらしいじゃん。ボクシング？とか全然知らないけどさ、大体はバイトとか、他に仕事してなんとか生計立ててるって。子供の教育費とか、住宅ローンとか、そういうこと考えると結婚は流石にねー」

「……」

華のJKの結婚観、世知辛すぎやしないだろうか。新大学生の分際で、不景気な現代日本の先行きを憂いたくなる。

カナちゃんの、つまりシドウの通う高校は地元では評判の公立校だった。“地元では”というところがミソで、言ってしまうほどにでもある典型的な自称進学校ではあるけれど、自称とは

いえ進学校は進学校だ。正直、プロ格闘家を目指そうという人間が選ぶ進学先としては意外だった。もっと緩い私立のスポーツコースとか、通信制高校とか、そういうところでよかったんじゃないだろうか、なんて思いながら塾を後にした。

「いや、馬鹿と思われんの嫌じゃん。俺、勉強だってふつーにできんのにさ」

再会したときのシドウ曰く、そういうことだった——出会った日の別れ際、彼は所属しているジムの名前を覚えてきたのだ。

平日は夕方四時半、土曜は朝九時から練習してるなどと言われても一体どうしろというんだ、なんて思っているながら、暇を持て余した私は後日なんとなくその場所に足を運んでしまった。初対面であんなにイキって見せつけてくれたんならまあ面白い物ついでに見るだけ見たらうやないか、的な気まぐれだった気がする。

しかし惰性とは恐ろしいもので、結局それ以来、私は週に何度かジムを訪れて、何をするでもなく練習風景を眺めたり、本を読んだり、休憩中のシドウや他の会員さんと喋ったりするようになっていく。

まあ、重ね重ね暇だったからだ。週に二、三回しかない塾バイトのシフトの他に、時間を潰す手段が必要だった。小人閑居して不善を為すとはいうけれど、大の男どもが汗水垂らして鍛錬する様をただ眺めるのは、果たして善不善どちらだろうか。

「うちは大きなジムじゃないし、男所帯だからね。倉科ちゃんみたいな若い娘が居ってくれるだけ

で紅一点……なんて、今の時代じゃちょっとまずいか」

ははは、と巖のような顔に温和な笑みを浮かべ、五分に刈り上げた頭を掻く会長の日馬ハルマさんは非常に寛大だ。なにせ会員になる気があるわけでもない、ただジムの隅に居座っているだけの私を、快く受け入れてくれるのだから。

今年で四十路に差し掛かるらしいその大きな肉体は、しかしわずかな贅肉もなく鍛え上げられていた。壁際に飾られた現役時代の写真と比べても、肌の張り艶に全く遜色はない。

「ヤバいぜ、あの人。十年前はミドル……七五キロ以下のバケモンみたいな外人連中とも真っ向から渡り合ってた本物だよ。靱帯やっちゃまって引退したけど、膝の調子良いときなら今でも全然トップ戦線で通用するよ、あれは」

どこか自慢げなシドウの言葉通り、ハルマさんは名実ともに相当な実力者だったらしい。会員自体は少ないにもかかわらず、プロ練習に多くの人が出入りするのには、そんな彼が会長を務めているからなのかもしれない。

幸いというべきか、読書を苦にする方ではなかったので、『キックボクシング入門』——ハルマさんが厚意で貸してくれた——を読破した頃には、この競技の上澄み程度は理解できるようになった。と、思いたい。それまでは見向きもなかったキックの試合動画なんかも、暇な時間に観てみるようになった。

教本を読んで、動画を観て、練習を眺めて——そうした日々を一ヶ月ほど過ごして、なんとなくわかってきたことがある。

「シドウって、強いですよね？」

街路樹の油蟬が鳴き喚く七月のある日。聞かれたハルマさんは、少し驚いたように古傷で途切れた眉を上げた。

「……どうして、そう思ったのかい？」

「なんとというか、その、とても……正しい、感じがして」

正しい。

こなれてはいないし、もっと適当な表現があるのかもしれないけれど。

正確とか、テクニカルとか、そういう形容からこぼれ落ちてしまうものを掬いとれる言葉を、私は他に知らなかった。

「構えとか、重心とか、フォームとか、毎回、全部、寸分違わず同じ……そういう人って、例外なく強いんですよ。あ、いや、素人が何言ってるんだって話かもですけど……少なくとも、卓球ではそうでした」

「ほう、倉科ちゃんは卓球やってたんだ」

「ええ、まあ、小五の頃から……高二の冬で辞めちゃったんですけどね。最後の試合、選抜の県予選で当たった相手が、まさにそんな感じだったんです」

一学年下のその選手は。

「なんとというか、『卓球そのもの』みたいな感じでした」

実際に試合をしたのはあの一回きりだけれど、それだけで十分だった。言葉もおぼつかないような幼少期から卓球にその身を浸して、指の先まで卓球で満たして、五体を卓球に置き換えて、しまいにはテセウスの船みたいになった全身卓球人間——そんなふうに想像が及ぶくらいには、私も本気だったから。

「で、そのまま選抜シングルスで優勝して、国際大会でも表彰台に上がってました。ハルマさんも名前くらいは知ってるんじゃないですかね。高校生にして次の五輪代表最有力候補だって、ちよくちよくニュースとかにも取り上げられてますから。九月の世界卓球にも出るそうですよ」

「それで、対戦してみようだった？」

「……それはもう、ポッコポコでしたよ。キックでいうなら、ボブサップでも相手にしてるみたいでした。根本的に階級レベルが違ってるって感じ」

「……今でも、昨日のこのように思い出すことができる。」

——一方的に捲れていくスコアボード。大して長いラリーが続くわけでもないのに、自分ばかりがふくらはぎにまで気持ちの悪い汗をかいている。何万回と練習した、小学生の頃から私の生命線だったナックルサーブは、チキータで打ち返されることこそなかったけれど、必勝を期した三球目のドライブ返球は嘘のような反応で拾われ続けた。ネットインやエッジを除いて、まともな得点できたのは一ゲーム目の五、六点がせいぜいだったように思う。二ゲーム目が十一対三で終わる頃には、私はすっかり水底から引き上げられて、諦め混じりの応援の声が鮮明になって

いた。ラケットもボールも、一刻も早くこの手から離れたがっていて、私はその意を汲むようにストリートで敗退した。

「……私、絶好調だったんですよ。三回戦まで、全部ストリートで勝ち上がってきてたんです。ラケットが身体の一部みたいに馴染んで、からだの感覚が引き延ばされて……あの状態になったときは、負けたためしがなかったのに。絶対に勝てると思ってたのに」

その上で、なす術もなく叩き潰された。言い訳のしようもないくらい、真正面から徹底的に。

「絶対なんてなかったんです。少なくとも、私の手の中にはなかった。あの子にとっては単なる前提に過ぎなかったものを、私は後生大事に握りしめてたんだって、なんかもう、馬鹿馬鹿しくなっちゃって。それで、受験を言い訳にして年内に辞めちゃいました」

私の決断とも呼べない決断を、それなりの進学校だった母校の教師たちは喜んでいた。部活に打ち込みながらも学年上位の成績をキープしていたこともあって、早いうちから勉強一本に絞ることを期待されていたらしい。

お前の部活成績になどハナから期待していない、と言わんばかりのその態度も、特に腹立たしくは思わなかった。そもそも弱小の部類の卓球部で、私だけが妙に張り切っていたのは自覚していたし——何より私自身が、卓球選手としての私にひとかけらの期待も残していなかったからだ。

「でも、そのおかげで受かったんだろう？ しかも、高卒の俺でも知ってるあの——」
ハルマさんが私の通う国立大学名を口にする。自分でいうのもなんだけど、世間一般的には十

分に魅力的な肩書きだと思う。少なくとも、どうせ見込みのない残り数ヶ月の部活人生と引き換えにしてありあまる程度には。

「……まあ、一種の自己暗示です。自分は卓球から逃げたんじゃなくて、受験に専念するために“勇退”したんだ、って……めっちゃくちゃダサイですけど、そのおかげで脇目も振らずに勉強できましたかとは思いません。それでなんとか受かったから、最低限の体裁は保てたのかな、なんて……すみません、つまらない私の話ばかりして」

「いや、そんなことはないよ。……しかし、そうか。君は、カオルをそんなふうに見ているんだな」

奥二重の瞳が、一心不乱にサンドバッグを叩くシドウの姿を見つめている。それはどこか、息子を見つめる父親のような眼差しだった——まあ、顔立ちは似ても似つかないけれど。強面が過ぎる。

「その相手選手のように、あいつが“キックボクシングそのもの”かといえ……まあ、まだまだ程遠いね。小五の頃にうちのジムに来てから、まあちっとはモノになってきてるとは思うが、トップを目指すなら改善点は山ほどある」

冗談めかした口調でそんなことを言われて、自分の顔がみるみる熱くなっていくのを感じる——元トッププロ相手に何を宣っていたんだ私は。

「……すみません、ド素人が知ったふうな口を……」

「ああいや、倉科ちゃんの言ってることもわかるし、全然的外れじゃないよ。どんな競技だって

基本のしっかりしてる奴は強いし、あいつだって打撃フォームに関して言えば申し分ない……が、じゃあ現時点でカオルが同階級プロの上位勢に勝てるかといえ、そんなわけはない」

その断言は、歴戦のキックボクサーとしての説得力に満ちていて、私はますます小さくなる。いっそのその分厚い胸筋の下に隠れて見えないサイズになってしまったかった。

「フィジカルはもちろん、技術も経験も全く足りていない。まあ、アマの試合じゃ高校に上がったからは負けなしだから、同年代の中じゃ強い」だろうけど——」

ずばあんっ。

打撃音や息遣いで埋め尽くされるジム内に、ひとときわ鋭く破裂するような音が響き渡る。

大きく揺れ動くサンドバッグの巨大質量。その細い肉体で、どのようにしてそれほどのインパクトを生み出しているのか——そう思わせる色白の少年は、高々と振り上げた蹴り足を、能楽めいて静かに引き戻した。その重心には、微塵のブレもない。

「……ただ、まあ」

意図せずも意趣返しを受けたような形になり、苦笑いしながら——それでも嬉しそうに、ハルマさんは言った。

「あの左ハイキックだけは……多少『正しい』に近い位置にある、くらいは言ってやってもいいか」

そんな彼の顔を見て、やっぱり父親みたいだな、なんてことを思う。

「なあーにニヤニヤ話してんだよエロオヤジ」

休憩に入るらしいシドウが、私とハルマさんが一緒にいるのを見て話しかけてくる。その顔にはいつものシニカルな笑みが浮かんでいた。

「鼻の下伸ばしやがって、現役女子大生とおしゃべりするのがそんなに楽しいかよ。ミヒロちゃん、変なことされてないよな？ 一応嫁さんと娘さんいるから、訴えりゃ一発で人生終わるぜこのゴリラ」

「馬鹿野郎、お前のヘナチョコ具合について一から十まで教えてやってたんだよ。特に入会したての頃の話は大ウケだったな、初めてのマススパーでビビって目え瞑ったままコーナーポストに殴りかかった話とかな」

「なっ、いやっ、それは言わない約束だろ!? ミヒロちゃん、違うから！ 嘘、こいつの言うこと全部嘘！」

出会ったときから小憎たらしくて可愛げのないシドウが、こうも慌てふためく様を見るのは、どうにも痛快で。

「ふふ、あはははっ！」

いつぶりのかゆいのない笑い声が、喉のつかえを押し流すような気がした。

スマホの画面の中で、ヘッドギアを着けたシドウがリング上でステップを踏んでいる。

シドウより背が低くリーチで劣る相手選手は、懐に潜り込んで乱打戦に持ち込もうとするも、シドウの巧みなジャブで機先を制され、前蹴りで距離を取られて思うように近づけない。

ジャブ、ジャブ、ストレート、ロー。上下を打ち分ける的確な打撃で着実にポイントを稼ぐシドウに、業を煮やした相手が被弾覚悟で大振りのフックを当てに行く――

「――あ、終わった」

思わず漏れた呟きと同時に、シドウの左ハイキックが相手の首筋に吸い込まれていた。渾身の左フックは虚しく空を切り、目が飛んだ相手選手は糸が切れたように崩れ落ちた――試合終了。

塾のシフトが終わった後、本格化し始めた日差しの元に出るのも億劫なので、そのままチューター室で暇潰しがてら YouTube に上がっているシドウの試合動画を観ていた。

往年の名選手や最新の若手同士の試合をそれなりに観戦して、自惚れでなければ多少とも見る目が育ってきたと思う。特に、決定的な瞬間を感知できる機会が増えた。今の試合だって初見だったけれど、突進に合わせた左ハイは読んでいた。

それと同時に、試合におけるシドウの勝ちパターンのようなものもなんとなく掴めてきた気がする。

今のように、自分よりもリーチで劣る相手に対しては手足の長さを生かしたポイントアウト、無理に突っ込んできたらカウンターの左ハイか左クロス。同等あるいは自分以上の体格の相手に

は、上下に打撃を散らしつつ左ミドルを執拗に蹴って、防御が偏重したところを同じ軌道から変化させた左ハイで仕留める。左ハイの殺傷能力が図抜けているだけで、どんな種類の打撃でも満遍なくこなせるのがシドウの強みだ——それに。

「……サウスポー」

多くのスポーツにおいて、少数派の左利きは常に例外的な対応を強いる側に回ることができる。他ならぬ私も左利きで、現役時代はその恩恵を受けてきたのだ。

ふと、シャーペンで左のシェイクハンドで握ってみる。

案の定、全く馴染んではくれない。ラケットのグリップとは似ても似つかない細さのせいだとはわかっていても、胸の奥がきゅっと疼いて寂しくなる。乾かして放置していた傷痕に血が通って、じくじくと滲みだす。もうあの頃の、この手に宿る絶対を信じていた私には戻れないのだと、思い知らされているようで。

対照的なふたり。

止まってしまった私と、進み続けるシドウ。

終わってしまった平庸な競技人生と、まだ始まってすらいらない未知のキャリア。

この左手を通してほのかに覚えた親近感すらも、おこがましくて、分不相応なものに思えてしまう。初対面の相手に口八丁でラーメンを奢らせる凶太さが、今となっては少しだけ羨ましい。

「……ナモン、ねえシナモンってば！」

コード付きのイヤホンを貫通して、私を呼ぶ声が聞こえた。隣を見れば、いつもの可愛い女子

高生が頬を膨れさせていた。

「もー、何回も呼んだんだよ？」

「ごめんごめん、動画見せて」

「動画って、また試合の？」

「まあ、そうだけど」

「シナモン、ここ最近ずっとそうだよ。格闘技とか、アタシにはさっぱりわかんないや。やっぱりシドウくん関係？ 坊主憎けりゃ、の逆バージョン？ あ、そういえばシドウくん彼女いないらしいよ。よかったね！」

「どーでもいい情報どうも」

右から左に受け流したどーでもいい情報に触れたように、左手のシャーペンはいつのまにか回転していた。カナちゃんと話しているときはいつもこうしている気がする。

「ていうか、それくらい見てたらわかるよ、あいつ練習の虫だから。学校終わりはしょっちゅうジムいるし、女子と乳繰りあってる暇なんかないって」

「後方彼女面お疲れ様でーす」

これ見よがしに無言で握り拳を振り上げてみせると、きゃーこわーい、とカナちゃんはこれまで可愛らしく悲鳴をあげた。きゅるっきゅる丸文字フォントの、選ばれし人種にしか許されないタイプの発声だった。

「……ほんと、なんでもかんでも恋愛に結びつけるのやめてよね。私はただ、あいつのキックボ

クシングに興味があるってだけだから」

「へー、それってファンってこと？」

ファン。

何気なく発されたその言葉に、一瞬、縫い止められる。弄んでいたシャーペンが音を立てて机の上に転がった。

「……ファン、か」

「え、どしたの？」

こてんと首を傾げるカナちゃん。そんな仕草が、いかにも様になっている。

「別に、そんなじゃないよ」

ファン。

fanaticを略してfan。すなわち、熱狂的な支持者。

格闘技界でいえば、鼻肩の選手がKOしたら絶叫して、KOされたら絶叫する誰か。

——自分事でもないのに。

どこかに、そんなふうには白けた自分がある。

サッカーW杯の日の丸ペインターも、高校球児に野次を飛ばすおじさんも、我が子にスパルタ指導を施す親も、卓球を辞めてからはみんなくだらないものと思えてしまう。

——それは無意味な熱狂です。

彼らの青春は彼らのものです。

あなたの分はもうとっくの昔に終わりました。

彼ら彼女らの耳元で、何度だって囁いてあげたい——そんな性格の悪い欲求なんて、誰にも理解されなくていい。

ゆえに私は、シドウが勝ったところで叫んだりはしない。ただ、多少気心の知れた高校生の勝利を祝福するだけ。あいつの栄光は、あいつだけのものだから。

逆もまた然りだ。仮にシドウがこっぴどく負けたところで、私はさして悲しみもしないで、せいぜいが軽く肩を叩いてやるくらいだろう。

私が殺した私の青春を、今さら未練たらしく誰かに重ね合わせたりはしない。尻尾を巻いた負け犬なりの、ちっぽけで独りよがりな矜持も、そこには含まれていた。

期末テストとレポート課題を早々に片付けると、いよいよもって人生で一番暇な夏休みに突入する。

ジム、塾、市の図書館。エアコン代節約のため、日中の私の居場所は大抵この辺りに限定された。ジムと塾があつらえたように図書館までの道のりにあるから、というのも大きかったかもしれない。

ジムに足を運べば、シドウは必ずと言っていいほど出席して汗を流していた。毎日飽きもせずよくやるな、と思ってから、そういえば私も部活時代はこんなもんだったなと思いつす。ほんの二年もしないのに、そんな無軌道な熱量が自分の中にあつたことさえ靡げになってしまっていた。八月、盆休み前のこと。午後練が一段落した時間帯を見計らって、私は差し入れの入ったコンビニ袋を提げてジムを訪れた。

「はい、お疲れさ、まっ」

包装の上からガリガリ君の棒をつまみ、ドライブの要領で白い左頬を叩こうと試みる。

「うおっと、さんきゅ」

難なくスウェーで躲されて取り上げられたのは、悔しいけれど流石というほかない。

「……あつっ」

額に滲む汗が引かない。故障気味な空調は弱々しくて、到底ジム全体をカバーし切れはしないのだ。今年の夏の記録的猛暑も相まって、会員からすれば快適な練習環境とはお世辞にも言えないだろう。

しゃくしゃくと水色の長方形を齧るシドウの、ほっそりした顎の先からしたり落ちるしずくをぼんやり見ていると、甘く締めた蛇口みたいで、ちょうどそんなふうに緩く使った頭から間の抜けた質問が漏れ落ちた。

「なんでこんなことしてるの？」

「んー、最強なりてーから」

間抜けな問いに相応しい、馬鹿みたいな答えが返ってきた。今しばらく、上滑りする会話に身を任せる。

「じゃあ、なんでこんなこと始めたの？」

「ぶちのめしたかったから」

「……えーと」

暑さと疲労のせいか目的語が欠落していることに気づいたらしく、「……あー」と視線を宙に彷徨させたあと、シドウはぼつぼつと語りだした。

「小五に上がった辺りから、ちょっと図体がデカイボス猿的な奴に目えつけられたんだ」

細くて、生っちょろくて、女みてえだな、ってさ——その部分だけ、ことさら撫然とした口調だった。ありがちな動機だよな、とシドウはいつものように笑った。心なしか、片牙を剥き出すみたいに見えた。

「で、ぶちのめしたの？」

「当然。同じクラスでいるうちにきっちりシメてやったよ」

そう言って、シドウはちょっと得意げに左の太ももを叩く。ぽんぽん。手塩にかけた忠実な猟犬を可愛がるみたいな、そんな仕草。

だぶついた練習着の袖や裾から覗く手足は、高校生の今だって決して遅しくはない。薄い皮膚の下、しなやかな筋肉の存在を知ってなお、行使しうる苛烈な暴力の匂いを気取らせはしない。

ああ、そういうわけかと思ひ至ることがあって、何度目かの素直な感想を伝えてみる。

「……ほんとほっそいよね、きみ。卓球部って言われたら信じちゃうよ。格闘技やってるなんて、わかんないよ」

「へへっ、だろ？」

やっぱり——このひねくれ屋が目を細めて両の口角を上げるのは、決まってこういうときだ。

思春期の男の子のくせにどうして、なんて時代錯誤気味に訝しんでいたけれど、なんとなくその理由がわかった気がした。

二度と踏みにはじられないように、五体に宿した確かな暴力。細いまま、色白なまま、中性的なまま——理不尽にも嘲られた自分を、ひとつとして曲げないままに得たからこそ、その力には値千金の価値があるのだろう。

生まれもったかたちそのままに、彼は強さを手に入れた——だから。

「格闘技のことは、まだまだ全然わかってないけどさ」

変えようのない絶対的な骨格フレームに基づき、階級という定められた領域の中で凌ぎ合う競技——キックボクシングを、そう定義するのならば。

「きみは、きつと天性のキックボクサーなんだろうね」

何当たり前のこと言ってるんだよ、とはにかむ彼がまぶしくて、ふいと目を背けた。

突き抜けるようだった青空を塗り潰すように、うず高い灰色が私たちの頭上を覆っていた。街を掠めた台風が、八月の残滓を根こそぎ拭い去ってしまったような、そんな気がしたある日のこと。

私たちの夏を締め括るように、あるいはとどめを刺すように、彼はこの街へやってきた。

「空手のチャンピオンって、実は割と眉唾な肩書きだね。いろんな団体が乱立してるし、大会の規模もまちまちで、マイナーな国際大会でも一回優勝すれば『世界王者』だから、名乗ったもん勝ちみたいなところがある。柔道なら全国優勝どころか選手権に出場した時点で相当の猛者で間違いないけど、空手じゃそうとも限らないってわけだ……それを踏まえたうえで」

ハルさんの口の端は、ひりつくように歪んでいる。

「あれは本物だ」

わざわざ言われるまでもなかった。彼が顎をしゃくった先、浅黒い肌の少年は、おそらく私を打ち砕いたあの子と同類だ。

一瞥してわかった——化物。

荒縄めいた腕の筋肉。水牛じみた両の脚。筋繊維の一本一本にまで、培ってきただろう技術が染みついていて。ウォームアップのサンドバッグ打ちを見ているだけで、いやでも思い知らされた。

フルコンタクト空手でも最大の団体の、二年連続軽量級高校生王者。高校卒業を機にキックへ

転向するという、今日このジムに出稽古に来た彼の肩書きは疑いようもない。

リングの上で、互いにヘッドギアを着けたシドウと彼が向き合う。

対峙するキックボクサーと空手家——という以前に、まず体格の違いが際立っている。生白い瘦躯に、隆々たる褐色の肉体。身長、骨格自体はシドウが若干優っているはずなのに、同階級であることが疑わしくなるほどの筋量差がそこにはあった。

——だけど、きっとシドウは負けない。

祈りではなかった。応援の気持ちすらなかった。シドウは勝つ。根拠などない、必要とさえしない、そんな確信。

あのしなやかな肢体に宿る力を、私は知っているのだから。

開始のブザーが鳴り響く——

月を目指して跳ねた兎が、叩き伏せられて地に墜ちた。
そんなイメージが、私の脳裏を離れない。

「よっ」

背後から声をかけられたのは、ちょうどスーパーで買い物を買わせて、駐輪場まで歩いていたときだった。

フェミニンなソプラノ声——やにわに胸の内がざわついて、反射的に振り返ってみれば順当に女の子だった。しかもよく見知った相手。

「……なんだ、カナちゃんか」

「なんだとはなんだ！」

むくれる彼女をまじまじと見つめる……うん、全く似ていない。いかにあいつが中性的といっても、顔の系統は全然違うし、まず身長の時点で二十センチくらい差がある。声質だっておよそ似ているとは言い難いのに、どうして一瞬でも思い違いをしてしまったのか。

……それほどまでに私の頭のメモリを占めていた人間のことを、首を振ってかき消す。

「いったい誰だと思ったのかなー？」

「……わかっててそういうこと聞いてくるような子、私嫌い」

「ま、深くは聞かないけどさ。学校でのカレ見てると、大体想像はつくよ。テニスやってる弟も、時々あんな感じなことあるし……こっぴどく負けた時とか、特にね」

その言葉で、心の底に沈めていたつもりの記憶が浮上して、肺を押し上げられたように息を吐く。

あの日、シドウは負けた。

試合でもないスパーで勝ち負けに一喜一憂することは無意味だなんて、そんな使い古された正論をひとまず無視できる程度には、痛い敗戦だった。

流石というべきか、空手チャンプは鬼のように強かった。フルコンならではの「倒す」前蹴りとか、顔面攻撃が禁止されている故の、首から下への打撃に対する異様なタフネスとか、組み手で微動だにしない体幹とか、様々な尺度で表せる強さを持っていた——けれど、正直そんなことはどうだっていい。特定の分野、能力値において、相手が自分より優れているのは当たり前だ。

どんな対人競技であれ、いかに相手の得意を避けて自分の得意を押し付けるかが肝であることに変わりはない。前蹴りが強いなら当然警戒するし、腹が効かないなら慣れない顔面にジャブを突けばいい。実際、シドウはそうやって上手く自分の間合いを作りながら、少なくとも第二ラウンドまではどうにか戦っていた。

第三ラウンド開始一分。それまで辛うじて保たれていた均衡を、そしておそらくはシドウの心をも打ち砕く一瞬はやってきた。

シドウの、右ジャブ二連発から左ストレート。このスパ―で何度も見せた、オーソドックスなワンツーコンビネーション——に見せかけた、ジャブからの左ハイキック。強敵と対峙し、あえてここまで温存してきた必殺は、まさに会心のタイミングで炸裂する——そう、シドウも私も信じて疑わなかった。

脈打つ首元を刈る軌道で走った白い脛が、筋肉で張り詰めた浅黒い——顔を守っているはずの右腕にめり込み、鈍い音を立てて止まっていた。

あり得ない、という驚愕がガラ空きの顔に浮かぶよりも先に、渾身の右ストレートが強かに打ち抜き、細い体軀はなすすべもなく撥ね飛ばされた。

以来、シドウは一週間もジムに来ていない。あのシドウが、だ。

「……別に、心配とかしてないよ。たかだかスパ……あー、練習試合で一回負けたくらいのことだし。よくあることだって。ショックを受ける必要なんてない」

嘘だった。一言一句、余すところなく偽りで満たされた台詞。笑ってしまいそうなほどの戯言だ。

負け方にも色々あるなかで、今回のそれはあまりにも手痛い。

自身が抛って立つ一番強い部分で勝負して、その上でまったく通用せずに叩き潰されたとき――

―悔しさや自分への怒りよりも先に、足元が抜けたように平衡感覚を失う。重力の存在を忘れながら、實際のない奈落へ沈んでいくあの感じを、私はいまだに覚えている。

「あは。嘘が下手なんだね、シナモン」

「……そうかな」

「そーだよ。普段はあんなにすまして、アタシのダル絡みにだって塩対応なくせにさ」
ダル絡みの自覚あったんだ、と意外に思う私をよそに、細い指先は彼女自身の目元を指した。

「そんなに悔しそうな目してるんだもん」

――呼吸が、とまる。

実際に貰ったこともないボディブローが、鳩尾に埋まっている、錯覚。

悔しがっている。誰が？ 私が？ 何故。シドウが負けたから？

あり得ない――あ・っ・て・は・な・ら・な・い。

「……うそ」

「マジだって。こんなことで嘘ついてどーなるのさ。しんどいんでしょ、そっちこそ正直になりなよ」

「つらくなんか無い。だって、私は何もしてない。勝ってもないし負けてもない。何もしてないからどこも痛くないし、苦しきなんてあるわけない」

私の左手は今、無印のマイバッグを提げている。中には今入れた挽き肉に、特売の長葱と絹豆腐、豆板醤と甜麵醬。家に帰ったら YouTube のレシピで辛めの麻婆豆腐を作って、録画したドラマを観ながらのんびり食べようなんて考えている。ラケットを握る予定は当然ない。

だから痛みなんて、感じる理由がない。慢性的だった手首や肘の痛みも、膝も、いつか部分断裂したアキレス腱だって、とっくのとうに癒えている。

「私、何も知らない。顔にパンチを貰ったときの衝撃も、爪先が脇腹に刺さったときの苦痛も、ローキックの重さだって。戦ってるのはいつだってあいつで、私はリングや画面の外から傍観してるだけ」

「そりゃそうでしょ、フ・ア・ンってそういうもんだって」

「……っ！」

ラケットを置いたあの日から、その言葉を憎んで、戒め続けてきた。

短かった私の競技人生の総括は、結局のところ挫折でしかなかった。当然の結末だ。小学五年生——卓球という競技の最前線で戦うには、私のスタートはあまりにも遅きに失していた。

それでも、この痛みだけは、この傷だけは私のものだった。けどそんなけなしの証さえも、観客席に腰を下ろして、自らは何も犠牲にすることなく、命を削って戦う誰かの背中に声を張り上げていけば、きっとその心地良さで紛れていく。紛れてしまう。ぼやけて、薄れて、いつかは消えてしまう——それが、怖くてたまらなかった。

それなのに。

「……左の、ハイキック。初めて会った日、ラーメン屋帰りの路地裏で、あいつが見せてくれたの……信じられないくらい、綺麗だった」

脈絡もなく、そんな言葉がこぼれた。実際に見ていないカナちゃんにしてみれば、いったい何を言っているのかさっぱりだろうけれど。

「私と同じで、左利きだった。私と同じで、小学五年から始めてた。私と同じで、バカみたいに練習してた……あいつをそばで見てるうちに、あの頃の……卓球に打ち込んだ頃の私と」

声が、震える。

「心のどこかで、重ねてたんだと、思う」

口にするのが、認めてしまうのが恐ろしかった。

赤の他人の積み重ねた努力、その果ての栄光や挫折に自分を投射して、借り物の感動を掠め盗る青春のフリーライダー。

よく出来た誰かのドラマチックな物語に仮託することでしか成り立たない、ハリボテの人生。

見下して、蔑んで、あれよりはまだマシだと安心させていたものたちに、いまや自分が成り果てつつあるだなんて。

「……だから、無意識に思い込もうとした。あいつが勝とうが負けようがどうでもいいんだって」

卵を破って生まれ落ちた雛が、最初に見たものを親鳥と信じ込むように。私はシドウに身勝手な幻想を押し付けた。

「あいつの強さに甘えて、実際に負けたときのことなんか考えもしないで……私、わたし……」
言葉が、止まらなかつた。無関係のカナちゃんに、まるで懺悔でもするみたいに。とめどなく溢れる水のように——今、私の頬を伝う涙のように。

鮮やかな血で塗り込めたような夕焼けが、濡れそぼった視界に滲む。滴り落ちた液体もまた、鮮血じゃないかと思えるほどに。

「あいつがリングから降りるとき、目も合わせられなかった……!」

あまりにも、あまりにも私は脆弱だった。どこまでいっても自家中毒の痛みにも悶えるばかりで、現実のリングで打ちのめされたシドウには言葉ひとつかけられなかった。肩を叩くなんて、考えつきもしなかった。

「私、最低だよ。あいつと過ごす毎日に、安らいでたくせに。あいつのそばにいる自分に、満足してたくせに……一番大事なところで、結局自分のことしか考えてなかったんだ」

幻想が打ち砕かれたあの瞬間、シドウから目を背けてしまった私に。その痛みに寄り添うことすらしないで逃げ出した私に。

彼の敗北を自分ごとのように悔しがれる道理なんて、あるはずがないのに。

「……私、もう、あいつと一緒にいる資格、ないよね」

そう、ぼつりと口にした時。

それまで黙って私の話を聞いていたカナちゃんの右肩がおもむろに持ち上がるのが、妙にゆっくりと見えた。まなじりに力がこもり、唇の幅が狭まって、頬袋に小さく空気を溜めている。

——来る。

何が、かはわからない。そんな曖昧な直感が、私の体を勝手に動かしていた。

上体を後ろに傾けつつ、後ろ足を引いて頭の位置を後方にずらす——いわゆる、スウェーバック。他ならぬシドウの得意とする防衛技術のひとつだった。

直後、前髪をそよ風が揺らす。綺麗に爪を整えた指先が鼻の頭を掠める。動作を終えて初めて、私はカナちゃんが平手打ちを試みたらしいことを理解した。

「……いや、普通こういう場面で避けるのはナシだって」

やや決まり悪そうに唇を尖らせて、それでもカナちゃんは私から目を背けないまま、すうと息を吸い込んだ。

仲が良い——と少なくともアタシはそう思っている——塾のチューターのお姉さんと話してたら、なんかいきなり語りだして泣きだした。どうやらウチの学校の有名人君シドウとなんかあったらしいけど、何やら妙な方向に決意がまとまりそうな感じがしたので、とりあえずほっぺにでもぺちんと一発入れて正気に戻してやろうとしたらあっさり避けられてめっちゃ気まずいし恥ずかしい。いや完全に不意打ちだったじゃん。何この空振りポーズどうしたらいいの。

「あー……事情はよく知らないけどさ、そんな簡単にお別れするのは気が早いんじゃない？」

「……なんで、関係ないカナちゃんにそんなこと……っ」

赤く腫らした目がアタシを一瞬睨んで、でもすぐにはっとして伏せられる。多分八つ当たり気味になったことを申し訳なく思ってるんだろう。

こういうところ、やっぱりシナモンはよく気がつくし優しいし、短い付き合いだけどそんなところもアタシは好きで、でももう少し自分勝手にいられたなら、そもそもこのヒトは今こんなに苦しんでないんだろうなあ難しいなあとよく知らないなりに思う。

「えー、だってさあ」

シドウ君本人にはちょっと申し訳ないけど……今のシナモンは、知っておくべきだと思うから。このヒトの知らない君のこと、全部全部話しちゃうね。

「こないだ話したんだけど。シドウ君ね、シナモンのこと——」

——え、なんで知ってるの。まさか藤森、ミヒロちゃんと知り合い？　へえ、塾のバイトしてるんだ。確かに、あそこの大学ならアタマ良いから向いてるよな。

どう思ってる、って……いや、そりゃ、その……ありがたい、かな。

なんつーかさ、俺、ずっとひとりやってきたんだよ。うちのジム、元々ジュニアクラスとかなくてさ。会長のハルマさんが、小五なのに無理やり頼み込んだ俺を特別に入会させてくれたん

だ。もちろん練習相手はいつも大人で、出稽古に行ったとき、迎え入れたときくらいしか同年代と話す機会もないし、部活やってる奴らがちょっと羨ましかった。

……ミヒロちゃんをジムに誘ったの、半分冗談のつもりだったんだ。初対面の俺にマジでラーメン奢ってくれて、ああこの姉ちゃんめちゃくちゃお人好しだと思ったから、思いつきで……あーもう、そうだよ、可愛かったのもあるって。実際藤森もそう思うだろ。

でも、凄えんだよあの人。キックなんてまったく知らないくせに、ずっと俺らの地味な練習見てるどころか、本読んだり動画見たりして勉強して、あっという間に格闘技オタクになってんの。もう入会すればいいのって思ったよ、あははっ！

……だから、さ。嬉しいんだ。ミヒロちゃんは、いつも俺のを見てってくれるから。週四回だった練習も、ジム開いてる日は全部行くようにした。ミヒロちゃんがいつ来るかわからないし……それに、あの人が見てる前で負けたくないんだ。

照れ臭くて、本人には絶対言えないんだけどさ。

俺――

いつか話してくれたシドウ君の本音を、覚えてる限りそっくりそのまま伝えきって、やっぱりカレにはちょっと悪いことしたかなと少しだけ反省して、でも後悔は全然してない。

きつとアタシは、シナモンの悩んでる理由の半分もわかってないんだろう。ふたりの出会いの

ことも、過ごしてきた日々のことも、シナモンが卓球やってた頃のこと、いつか雑談程度に聞いただけだし。

高校では帰宅部エースだし、部活強制だった中学時代だって弱小ソフトテニス部のエンジョイ勢。シドウ君やシナモンみたいに、ガチでやってる人たちの苦労なんてさっぱりわかんないし、知りたいとも思わないけど。

「……ごめんね。本当なら、アタシなんかが首突っ込むような話じゃないかもだけど」

他でもないアタシが、泣いてるシナモンを見てられなかったから。
百パーセントアタシの勝手で、ひたすらアタシのわがままで——

「それでも、アタシが、そうしたかったんだ」

過去、未来、プライド、劣等感、罪悪感——それらすべてが絡み合っただけの自家撞着のかたまりが、ゆるゆるとほどけていく。

シドウのなかに、私がいる。そう思うだけで、胸が熱いもので満たされて、そのまま両目から溢れ出してしまう。

私は、どうしたらいいんだろう。

私は、どうしたいんだろう。

ほろほろに煮崩れた麻婆豆腐を掬いつつ、テレビを点ける。

すぐに録画予約リストを開こうとして、思わず指が止まった。

液晶には、卓球世界大会の中継映像が映し出されていた。今日が開催日程であることなど、知りもしなかった。

画面右上に、無機質な文字列が並ぶ。泣きはらした目が見開かれていく。

“日本代表女子 グループリーグ突破ならず”

膝について泣き崩れている選手の顔を、私は誰よりもよく知っていた。

午前八時に目を覚ます土曜日なんて久々だった。不思議と毛布への執着もなく、さっさと身支度を済ませてしまう。ロールパン一個だけをもそもそと押し込んで、玄関のドアを開ける。冷えて湿った外気は朝の匂いがして、毎日のようにそれを感じていた日々を、少しだけ懐かしく思う。踏み込んだ自転車のペダルは軽くて、フルオートで私を目的地にまで連れて行ってくれるような気がした。浮いた思考のキャパシティには、あのひねくれた笑顔が我が物顔で居座っている。

「……ずるい奴だよ、ほんとに、きみは」

私が絶対と信じたものは、ことごとく打ち砕かれてしまった。

水底の感覚。シドウの左ハイ。私なんかからすれば異次元としか思えなかったあの子の強さですら、たどり着けなかった領域がいまだ存在する。

だけど、その不完全さを知ったうえで、私はあいつに惹かれてしまう。決して絶対なんかじゃない、あまりに脆弱な男の子だからこそ、手に汗を握って見てしまう。まるで自分ごとのように、声を張り上げずにはいられない。

脆くてはかない幻想を、打ち砕かれるたび何度だって抱きしめて。祈りと信仰を縋い交ぜにした瞳で、リングに立つ雄姿を見つめていたい——そんな風に思ってしまうほどに、私はどうしようもなくシドウのファンだった。

……痛みを忘れてしまうのは、今でも怖い。あの白い背中を追いかける自分に満足して、傷だらけで戦い抜いた末の、私自身の敗北をなかつたことにするなんて、考えたくもないけれど。

この左手はきっと忘れないと、今日の私は信じている。

——俺、ミヒロちゃんがいてくれて、本当によかったって思うんだ。

カナちゃんが教えてくれた、あいつの本音。次に会ったときは、存分にからかってやろう。

大丈夫、あいつはきっと戻ってくる。自惚れでなければ、私がジムに来る限り、必ず。

午前八時五十五分。並木通りを抜けて、古びた四角い建物が姿を現す。自転車を停めて、開錠を待つ私の背後から。

「……よっ」

少し躊躇いがちに響いた、今度こそ間違いのないその声に、私はそっと目を閉じて。月まで跳ねる兎きみの姿を、腫れた瞼の裏に描いた。

(文学部文学科三年)

青海

池田 結理愛

わたくしは、イギリスのイングランドにあるペンザンスという地域に暮らしております。

この地域は所謂港街、というものでございまして、時には風が潮の香りをわたくしが住むお屋敷まで運んできてくださるのでございます。お屋敷はとても大きくて、イングランドに限らず、様々な国から老若男女が集まって沢山の方々が暮らしているのですけれど、このお屋敷を訪れるお客様からはそれはそれは美しいと評判なのでございます。

このお屋敷には、特筆すべきことがございまして、それはお屋敷の敷地内に小さくて可愛らしい喫茶店があるということです。大変珍しいでしょうか？ お客様は大半の方が其処でお茶や珈琲、それから小さな洋菓子を頂きながらほっと一息おつきになるのです。なにせ、お屋敷はとても大きいのです。そのように小休憩を挟まねば、くたびれてしまうのです。

さて、お屋敷には沢山の国からいらした方が住んでおられるのですが、大抵は彼らの出身ごと……例えば亜細亜、阿弗利加、欧州といった具合にまとめられまして、同郷の人々で一緒に大きい部

屋に住んでいるのでございます。

わたくしもわたくしの他に四十九名の方と一緒に暮らしておりましたのよ。何故、おりました、と申し上げましたかという、実は今ではこの部屋に住まう人々はわたくしを含めて三十数人になってしまったからでございます。この話は後でゆっくりとすることにいたしましょう。

実は、わたくし、イングランドの出身ではございませんの。そもそも、欧州出身ではございませんわ。わたくしの祖国はここ、イングランドから遠く離れた亜細亜に位置する島国、日本という国でございます。わたくしが此方に連れてこられた時には日本はあまり欧州の方は仔細にはご存じなかったようで、やれ神秘的だ、やれ奇跡だなどと、大変な騒ぎようでございました。「極東の島国」などと呼ばれていた祖国は、長年鎖国、と申しまして世界から身を隠していたこともございます、皆様祖国に対しても興味があられたのだとか。けれど、それはそれ。決して見世物などにはなりたくはないと思っていたわたくしが何故、このお屋敷で飾り立てられてお客様にお褒めの言葉を頂くようなお役目についているのかと言いますと、それは偏にあの方、「柳緑の瞳のお父様」に絆されたからでございます。

忘れも致しません。我が国に無粋な黒い船がやって来たことを。

そう、江戸時代後期にわたくしはこの世に生をうけました。坂本元蔵という男がわたくしの祖先となる霧島様を生み出されて、其の後、わたくしは生まれたのでございます。わたくしの故郷

は筑後の国、久留米藩でございました。わたくしは其処で家族と、その他沢山の方々と幸せに暮らしておりました。

鎖国、と申ししましても、阿蘭陀というお国と近くの清、そして朝鮮とは貿易という形でお付き合いをしておりましたけれど、その他は一切の関りを持ってはいなかったと記憶しております。

けれど、わたくしたちは……少なくともわたくしはとても幸せでございました。何故困ることがありませんか。素敵な住まいに美味しいお食事、わたくしは恵まれた環境におりましたから仕方ありませんまい。

わたくしは、あの国を、日本を、とても好ましく思っております。長くから続く独自の伝統と、島国ならではの閉鎖的であり、それで窮屈でない環境。わびさびを心得た優しく趣深い人々。其処は確かに賑やかでしたけれど、決して慌ただしい様子はなく、穏やかで、活気にあふれていて……。

けれど、変わってしまった。全ては、あの日。いえ、その前から兆候はあったのです。とはいえ、わたくしの国が大きく転換することの原因となったのは、あの日、黒くて大きな、恐ろしい、無粋な船がやって来たことその他にはありませんまい。

お役人様の話をこっそりと聞いたところ、その黒いお船で来た人々は亜米利加という国からやって来たのだということが分かりました。その亜米利加というお国は、阿蘭陀さんとは違って北米大陸という、欧州ではない大陸にあるのだそうです。

それからは、変に慌ただしくなってしまうました。街の人々も、お役人さんも何やら難しそう

なお顔をして、うんうんと唸ることが多くなってきました。わたくしのお父様も、暗い顔をしていらっしやいました。普段はわたくしを見て「今日もお前は可愛らしいね」と微笑んで褒めてくださいますのに、この時ばかりは、はあと大きなため息を吐かれるばかり。わたくしはこれからどうなるのでしょうかと不安が募るばかりでございました。

大きなお船は二度やって来たようでございます。その頃には都から遠く離れた筑後の国でも慌ただしく、お偉方はこれからの国への不安を抱え、その他の民はこれからの生活に不安を覚えておりました。安政元年弥生、まだまだ寒さの残るころ、日本は開国したのだと、お父様からお聞きしたときは、わたくしもこれから待っているであろう出来事に言い知れぬ恐怖を感じたものです。もう二度と、これまでのようには戻れぬと、直感的にそう感じたものですから。女の勘と申しましょうか、結果、その通りになったことは誰もがご存じなことです。

開国すると同時に、様々な問題が出てまいりました。この開国は外の国に対して恐れを抱き衝動のままに行ったようなものでございましたから、国内では批判が高まったのでございます。お役人様の中でも更に偉い方が暗殺され、また、罪なき人々が捕らえられ、処刑されました。わたくしは幸い、そのお話を聞くだけで直接的な関りはなかったのですけれど、相次ぐ混乱に眠れぬ夜を過ごしました。

そうこうしていくうちに、日本では二つの勢力が生まれたと、お父様のご友人が話しておられ

ました。曰く、尊王攘夷派と公武合体派にございます。彼らはどちらもお国のためを思っていたのでしようけれど、お役人でもないわたくしたちからすると、唯々二つの派閥が穏やかにお話し合いをすること、それだけを望んでおりました。

開国と同時に、様々なお国から船に乗って沢山の人々が日本へとやって来られました。彼らのは多くは貿易と、その他日本に不利となる条約、というお約束を結ぶことを目的としていたのだと、後になって分かりました。

文久三年の夏、事件は起こったのでございます。

薩摩の国にて、英吉利という阿蘭陀さんと同じ欧州の島国から来た人々との戦が始まったのです。その前の年に英吉利の方は大名行列の際に礼をわきまえなかったようでした、武士にお手打ちとなったのですけれど、その件に対してお怒りになったという英吉利さんは薩摩の国に攻撃したのでございます。

わたくしは恐ろしくなりませんでした。お父様からは英吉利という国は欧州の島国であり、同じ島国同士、通じることもあるかもしれないと鎖国する前に葡萄牙という欧州から来た人々が話していた、ということを知っていたため、驚きと、それから言い知れぬ不安に苛まれました。外の国は少々強引なところはあれど、分かり合えるのかもしれないと僅かな期待を抱いていたばかりに、その恐怖はひとしお。わたくしはまだ、外の国の人々を見たことがありませんでしたが、

その時、きつと外の国の人は何と言ったら良いのでしょうか、この国の人々とは異なり、とても恐ろしい人々だと、手前勝手にそう思い込んだものです。けれど、無理はありませんまい。筑後の国と薩摩の国はそこまで離れておらぬのですから。

彼方此方からどかん、どかんと大きな音が聞こえて居りました。人々は怯えながら噂話をしたものでございます。薩摩藩は陸地から大筒を、英吉利は軍艦から大筒を打つての殺し合いだそうです。わたくしが生まれたのは江戸期でございます。その頃は天下太平の世でございます、戦なんていうものは全くの無縁、絵空事のようなものでありましたから、より一層恐ろしくて恐ろしくてたまらなかつたのでございます。

後になって聞いたところによると薩摩藩と英吉利には双方の言い分があり、こちらの常識が彼方とは違うというごく当たり前のことが引き起こした出来事でございます、一概に片方が悪、とは言い切れぬ状況だったということが分かったのですけれど、当時はそのようなことは知りも致しませぬ。この一件で、わたくしは外の国に対して畏怖の念を抱くと共に、決して、外の国の人々と仲を深めることなど出来ぬと、そう思ったのでございます。

それから先は、まあ、いろいろとございました。京の方では新選組と名乗る方々が何やら血氣盛んな御様子。開国して以来、日本は平和から遠ざかってしまったのです。江戸という穏やかな時代は、戦乱によって終わりを告げようとしておりました。暫くすると、長州と薩摩とで何やら同盟というものが結ばれたようでございます。この頃には彼方此方で空気は張りつめ、民草は怯え、お役人さんや武士たちは忙しく何やら準備をしておりました。江戸幕府を倒さんとする勢

力が表立ってきたのも、この頃でございました。將軍様は慶応三年に大政奉還というものをなさったと、お父様からお聞きしました。黒いお船がやって来て十年と少しの間に、世の中は変わってしまったのです。わたくしはこの変化に嘆いておりましたが、後に更にこの国が様変わりするのは夢にも思っておりませんでしたのよ。將軍様が、大政奉還というものを成されたから、わたくしはお恥ずかしいことに、漸くまた、平穩が戻って来るのではないかと考えておりました。無知とは恐ろしいものです。けれど、生まれてから一度も家の外へ出たことはなかったのですから、仕方がないことであると今では諦めております。言うまでもなく、これより後、我が祖国は内戦が起きましてございます。鳥羽・伏見の戦、戊辰戦争……沢山の血が、流れました。そうそう、わたくしの故郷である久留米藩は新政府の軍として参戦致しましたの。とはいえ、良いことばかりではなかったのです。新政府軍の考えに不満を持つ攘夷派と呼ばれる方々も久留米藩の中には沢山おられました、明治政府の転覆をねらい、熊本藩にお城を占拠されてしまったこともありま

すの。
その後、都を京から東京へと遷都致しまして、明治と申し上げる新しい時代が生まれたのでございます。

明治。それは、今までにない時代の始まりでございました。けれど、新しいものについていけない者も多くございました。勿論、納得のいかぬ者たちも。徳川將軍家とそれに仕える者は新政府との間に大きな亀裂がございました。江戸では、將軍様のためにと戦い、もてはやされた新選

組の局長様は、斬首と相成りました。その首級は、京に晒されたと耳にしました。時代によって正義は悪となり、悪は正義と成り得るのだと痛感した時は、驚きのあまりに暫く平静を装うことが出来なかったのですけれど、わたくしは、わたくし。どうあがこうとも何も出来ぬ無力な存在であります故、時代に身を任せる事しか、できぬのだと悟りました。新しき時代は、美しくとも、恐ろしいものでございました。新しい時代が来たと実感するより先に、人が戦で息絶えていくという知らせが届き続けたのですから。明治二年の春。まだ寒い時でございましたけれど、この阜月に蝦夷地での戦いを以ってして、一度、そう、一度目の内乱は終息を迎えました。

そこからは、また、目まぐるしく時が過ぎ去っていききました。藩が撤廃されて県が置かれたり、お金の単位が円・銭・厘といったように変わったり……まあ、それに並行するようにお役人さんたちはやれ暗殺やら何やらと物騒な事件に巻き込まれておりましたけれど……。

そうそう、久留米藩も明治四年に久留米県となりましたのよ。まあ、四か月後には三藩県に編入され、最終的には明治九年に現在の福岡県の一部となったのですけれど……。

江戸、改め東京では何やらお役人さんたちが大変な様子でしたが、驚いたのは、岩倉具視と仰る御公家様が使節団として欧米へとお行きになるといふことでございます。

岩倉様は髷を結わえておられたのですけれど、帰国なさった時はざんぎり頭になっていらしたので、このままではこの国らしい古き良きものもすぐに消えてしまうのではと、寂しく思いました。欧米は素晴らしい発展を遂げていると、日本も見習わなければならぬ、といった様子になってきたようでして、真新しいものに目移りし、新鮮な気分になる一方で、わたくしは文

明開化という大仰な名称の西歐化に素直に喜ぶことが出来ずにおりました。

細かく当時の出来事を挙げていくとするならば、それはそれは途方もない数になるために、わたくしが印象に残っているものを挙げさせて頂くとするならば、矢張り、西南戦争でございました。うか。薩摩の西郷隆盛殿が何やら新政府の皆様と言ひ争いになったようでした、そこから彼を中心とした最後の内戦が起きたのでございます。この内戦も、虚しく、哀しいものでございました。これで二度目の内乱の終焉と相成ったのでございます。

内乱も終わり、日本という国が新たにまとまり始めていたその頃、祖国は良い意味でも悪い意味でも大きな発展を遂げたのでございます。けれど、欧米諸国と対等とは言えぬ状況でございました。明治十九年。悲痛な事故が起こったのでございます。これは後にノルマントン号事件と名付けられました。横浜港から神戸港に向かったイギリス貨物船ノルマントン号が難波したのです。これはただの沈没事故ではありませんでした。船長や船員の英吉利人らは生き残ったのに対し、日本人はたった一人でさえも避難することが叶わず、亡くなったのでございます。これは大きな話題となりました。新聞では「日本人なるがゆえに助けなかったのではないか」「船長以下二十人余りの水夫が助かり日本人乗客が一人も助からぬはずがない」と騒ぎ立てられ、錦絵新聞でも大きく取り上げられておりました。お父様はその新聞を手になわわなと震えて居られて、とても厳しい顔をしておられたことをよく覚えております。温厚なお父様があれほどまでに怒りをあらわになさったのは、あれが、最初で最後ではないかしら。

兎にも角にも、政府も阿呆ではございませぬ。領事裁判権というものに基づいて海難審判を行うよう要請したのだと言います。けれど、結果は船長及び水夫への無罪判決。これにより、人々の中で不平等条約を撤廃しなければならぬという確固たる意志がより強固になったのでございます。

わたくしは、この一連の話をお父様に教えていただいて、げんなり致しました。またしても英吉利。またしても英吉利にございます。江戸時代にやって来た葡萄牙人は、英吉利は日本と同じ島国であると語ったのだとか。けれど、わたくしは納得がいきませんでした。同じ島国であつてなるものかと思いました。わたくしは、英吉利というお国を、勿論、今はそうではないのですけれど、好ましくは思えませんでしたの。身勝手なお国だと、そう思いました。

我が祖国は、大きく発展いたしました。忌まわしき領事裁判権の撤廃に成功したのでございませぬ。漸く平和になった、そうほっとしていたところ、思わぬ事態が……いえ、他の方々は感づいていらしたのかもしれないけれど、わたくしにとっては寝耳に水。日清戦争が起こったのでございませぬ。けれど、「日清」とは名ばかり。戦地は朝鮮半島となったのですから、腑に落ちぬことも多くございます。祖国は、日本は、この戦争に勝ちました。勝ってしまったのです。江戸の時世では貿易をして、長いお付き合いのあつた清に。その上、条約にて多額の賠償金を求めました。戦争というのだから、これが正しくはなくとも普通のことだったのでしょうか。今となつてもわたくしは何が正しいのか、何が一般的なのか判別もつきませぬ。

この戦に勝利したことによって、日本は勢いづいて参りました。これが良かったのか、と言われますと、お答えしかねます。しかし、この戦によって日本という亜細亜の小さな島国が世界に知られることになったということは事実でございましょう。

明治三十五年。この年は、日本にとっても、そして私にとっても大きな出来事がございました。その年の睦月。あの日のことを、わたくしは忘れも致しませぬ。一月三十日。この日、英吉利と日本とで日英同盟が結ばれました。周圀はお祭り騒ぎ。あちらこちらに英国の旗と日の丸が揚がっております。街では日英同盟を記念した絵葉書が売られ、話題はこの同盟に持ちきりでございました。わたくしは素直に喜ぶことが出来なかつたのですけれど、それは薩英戦争の時に感じた恐ろしさやら、ノルマントン号事件の際に感じた憤りだけではございませぬ。いえ、確かにそれらに対する感情を根に持っていたことは事実にございしますが、わたくしはそれどころではなかつたのです。日英同盟が結ばれる一日前の、二十九日。お父様が亡くなったのですから。

お父様はその日、いつものように朝、わたくしに挨拶をしにいらしていました。普段と何ら変わらぬ様子でにごにこと微笑んでらっしゃいました。いつものように「ああ、今日も綺麗だねえ」とわたくしに仰って、「また昼に来るよ」と踵を返された時でございました。お父様は胸を右手で押さえられて「うっ」だか「ぐっ」だか唸り声をお上げになって、そのままどうと音を立てて地面に倒れてしまったのです。わたくしはその様子を見ていることしか出来ませんでした。お父様は倒れられた後、少し震えてらして、すぐに動かなくなりました。家の者たちが暫くし

てお父様がお部屋に戻られないことを不審に感じてやって来た時には、もう遅すぎたのでございます。下女の悲鳴が上がり、男たちにお父様は運ばれて行きました。それきり。それきりにございます。わたくしがお父様のお姿を見たのは、それで最後でございました。

その日の晩。一人の青年がわたくしのもとへ訪ねて参りました。彼は沈痛な面持ちでお父様が亡くなったこと、それからわたくしのお世話はお父様の代わりに自分が行うと言った旨を伝えて来ました。その青年は、お父様の一人息子でした。沈痛な面持ちでそう口にした彼に、わたくしは声を掛けることが叶わなかったのです。人間とは、なんと儂いものなのでしょう。お父様と最初にお会いした時はとてもはつらつとしていらしたのに、最期の日は皺がお顔に目立って腰も曲がっておいででした。けれど、どのように姿かたちが変わろうと、お父様のことをわたくしは大切に思っていたのです。

世間様が同盟に関して浮足立っている中、わたくしたちは、お父様の喪に服しておりました。

明治三十七年。日露戦争が起こりました。日本はこの戦争にも勝利を収めたのですけれど、当時は様々な風刺画が出回っておりまして。それは多少の差異があるとはいえ、どれもが日本人を英吉利人が唆して露西亜に挑むように仕向けるといったものでございました。

わたくしは、居もしないお父様に問いかけたものでございます。「ああ、お父様。お父様は国が違えど分かり合う時が来るはずだとおっしゃいました。けれど、わたくしは英吉利という同盟国のことを分かり合う時が来るとは思えぬのです」と。

明治天皇が崩御され、大正という時代がやってまいりました。大正三年には大きな世界大戦が起こりまして、いよいよ平和からは遠ざかって来たのだなとわたくしはひしひしと感じておりました。

お恥ずかしながらわたくしは、大正七年より後のことはよく知らないでございませぬ。何故かと申しますと、わたくしは大正七年に、祖国である日本を離れることになったのですから。

その御方。柳緑の瞳のお父様とわたくしが出会ったのは、大正七年の卯月のことでございませぬ。

お父様の一人息子である青年、わたくしは二代目のお父様とお呼びしておりましたが、其の方が、ある日、慌てた様子でわたくしの所へといらっしやいました。二代目のお父様は、何やら両手を大仰に動かしながら「大変なことになった」と仰います。けれど、そのお顔は、決して悲痛なものではなく喜色に満ちていたため、不思議なこともあるものだと思ひました。二代目のお父様は深呼吸をして落ち着いた後にこう仰いました。

「エゲレスからお越しになった博士がお前を一目見たいと仰っている。いつも通り、美しくあつてくれよ」

その言葉に驚いていると、二代目のお父様はその博士を呼びに行くからと此方にいらした時と同様に駆けていかれました。

暫くして、二代目のお父様は二人の男性を連れて来られました。一人は日本人のようですが、

和服ではなく洋服を身に着けておりました。そしてもう一人は、わたくしが今までに見たことのない色を持つ方でございましたの。黄朽葉の髪に柳緑の瞳。口元に髪と同じお色の髭を蓄えた男性がそこにいらっしました。一目見て分かる日本人とは程遠い容貌、上等な生地だと遠目でも分かる洋服。この時の御洋服はブリティッシュ・スタイルと呼ばれるスーツだったのですけれど、当時のわたくしにはよく分かりませんでしたの。それから、立派なお帽子にまるで黒檀のよう美しい黒のステッキと呼ばれる洋風の杖を突いておられました。

その如何にも絵から飛び出してきたような恰好の英国紳士は、わたくしを目に収めるや否や凄い勢いで洋装の日本人に聞きなれぬ言葉で何やら捲し立てておいででした。その日本人は頷いたのだと知れました。通訳の男を挟んで二代目のお父様と英国紳士は何やらお話をしております、わたくしは唯その様子をぼんやりと眺めておりました。

暫くして、お父様と納得がいくまで話し終えたと見える英国紳士は、わたくしのもとへと歩いて来ました。その紳士の背はわたくしが今まで見た男性の中でも群を抜く程の高さであったために少々恐れを抱いていると、二代目のお父様が私の目の前に屈んでこう仰いました。

「ウエルソン博士はね、お前を気に入ったそうだよ」

そう言って二代目のお父様が微笑まされると、英国紳士……ウエルソン博士という人はニコニコと笑っておりました。硝子玉のような瞳に初めは恐ろしく感じていたのですけれど、その柔らかな笑顔を見て、少し、ほんの少しだけ緊張が解けたような気が致しました。

ウキルソン博士は、わたくしを見つめたまま、もごもご何やら口を動かしておりました。どうしたのだろうかとわたくしが見つめていると、博士はつかえながらこう言ったのでございます。

「セ、イガイ」

と。セイガイ、これはわたくしの名でございます。

「ええ。青海です。どうです、ウキルソン博士。美しいでしょう？」

二代目のお父様はにこりと笑ってそう仰いました。青い海のように美しく透き通っている純粋さ、それから、命を懸けてまで海へ出る人々の情熱という意味を持った名前が、わたくしの青海（セイガイ）という名でございます。

わたくしは、何故だか分かりませんが、この異国人であるウキルソン博士を気に入ってしまいました。それは彼が、親を真似る幼い子供のように片言の日本語で「セイガイ、ウツク、シイ」と繰り返したからかもしれない。純真無垢の子供のように柳緑の瞳が煌めいている様が、年とは不相応に可愛らしく感じたからなのかもしれません。

ウキルソン博士は、通訳の男に身振り手振りでも何やら話をしておりました。通訳の男から話を聞いた二代目のお父様は寂しそうに、それでいて嬉しそうなお顔をなさって、「宜しく御願います」と頭をおさげになりました。わたくしが不思議に思っていますと、二代目のお父様は目に薄っすらと涙を浮かべられて、こう仰いました。

「ウキルソン博士は、青海、お前を気に入られたんだよ。それでね、是非、英吉利、英国に連れて行きたいと仰っている。欧州の人々にお前の美しさを広めたいとお考えらしい」

その言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になりました。わたくしを英国へ？ それは、嫌だと思いましたが。ここを、この家を、日本を、出たくない。しかし、二代目のお父様は続けてこう言われました。

「なにも、お前ひとり行かせるわけではないよ。お前の姉さんや兄さん、兄弟たちも一緒だ。それに、他の仲間たちも。博士はね、お前たち家族の他に四十九の家族も連れて行きたいと仰っているのだよ」

それは、遠い異国で見世物になるということだと、直感的に感じました。そんなことがあったまるものですか、と憤りました。けれど、二代目のお父様は誇らしげなお顔をしていらっしやいます。博士にわたくしたちが英国へと連れていかれることが、二代目のお父様にとって大変な名誉となるということは、わたくしも分かっておりました。

ウエルソン博士をそっと横目で盗み見ると、周りを見渡して、他の方々をキョロキョロと見ておいででした。そして、親戚にあたる新青海を見つめられて、わたくしを指さし、何やら通訳の男を通して二代目のお父様に質問しています。

「ええ。そうです。新青海は、この子の親戚に当たるのですよ」

そうお答えになると、博士はうんうんと頷いて、何やら後方へ振り返りました。するとそこには二三の英国人と家の下男たちが並んでおりました。そして、新青海の家族を抱えて行きます。その後、わたくしの兄弟姉妹たちも下男と博士の部下らしき男に連れていかれました。皆が攫われた。そう思ってしまった。何せ、いきなりのことだったのですから。わたくしが不安に震え

ていると、ウキルソン博士はわたくしの目の前に座りました。上等なお洋服が汚れることも厭わずに片膝をついた状態で。

「Lady、ワタシ、イッシュヨ、キマス」

そう、博士は言いました。「レイデイ」それは、英国語で淑女という意味なのだとか。そっと、白い指が伸ばされ、わたくしの頬を撫でていきました。その手つきは、思いのほか、優しかったのでございます。わたくしは、ちらと二代目のお父様を見ました。お父様は微笑んで小さく頷かれました。

まだ、わたくしは、外国の方が怖く思っておりまして。英国に対しても、良い感情を持っておりませんでした。目の前で、下男たちによって家族が、友人たちが、親戚たちが、無遠慮に運ばれて行きます。その扱いに対しては、思わず眉を顰めてしまいました。「何処の国の者でも、きつと、思いを通わせることが出来ると、そう私は思いたいんだ」一代目のお父様の言葉が聞こえたような気がいたしました。わたくしは、外国の方は、恐ろしく、野蛮だと思っております。この当時、その認識が一等強かったと記憶しております。けれど、わたくしは、決めたのです。二代目のお父様が誇れる娘となるように。そして、一代目のお父様の夢を、国関係なく心を通わせることが出来るというものを、叶えるために。当時のわたくしは、家の外に出たことさえ、ありませんでした。外国の方を見たことも、これが初めてでございました。この国を、その時にはもう江戸の時代とは大きく変わってしまったけれど、一等素敵な祖国を、出たくはありませんでした。けれど、それ以上に惹かれてしまったのでございます。外の世界に。博士に。まだ見ぬ海の

果てにある欧州に。

博士は、わたくしをそっと抱え上げました。二代目のお父様に礼を言っているようでございます。相変わず、聞きなれない言葉でしたので、よくは分からなかったのですけれど。

こうして、わたくしは長年住み慣れた家を、国を、出たのでございます。

他の方々は下男たちに乱雑に大きなお車に乗せられました。お車、と申しまして、馬車のよ
うなものではありませんでした。簡素な、ただ運ぶための道具、といった具合のお車でした。
わたくしは、と申しますと、兄弟たちとは違い、博士と一緒に自動車に乗りましたの。わたく
し、自動車というお車にははじめて乗ったのですけれど、面白いものでしたわ。美しい艶のある
黒にまるで金箔を貼り付けたような金色の部分がございます、大きなタイヤという自動車を動
かすための車輪がついていますのよ。そして、これが一番驚いたのですけれど、馬や牛に引かせ
なくても、自動で動きますの。街を歩く人々よりも高い位置で、わたくしは故郷の街並みを初め
て見たのでございます。これで、最期。もう見ることはないのだと見納めながら。ええ。博士に
抱きかかえられた時点で漠然と分かっております。欧州へ行ってしまう、それで終わり。も
う、帰っては来れないということが。それでも、泣きませんでした。折角の晴れ舞台。云わば、
お嫁に行くようなものなのです。博士に見初められて、行くのです。胸を張っておかねばと自身
を叱咤しました。

自動車に揺られて、着いたのは港町でございました。そこで、わたくしは初めて海を見たので

す。青く透き通った、海。それはとても美しく、その海を冠する名を持つ自身が誇らしくありました。博士は、わたくしを抱えて、海に浮かんでいるお船という大きなものに乗りました。海、というものは当然水でございますから、水の上にどうして大きな鉄の塊であるお船が浮いているのかと不思議に思いましたの。お船は、波によってゆらゆらと揺れておりました。その揺れは少々恐ろしくもありましたけれど、不快ではありませんでしたわ。博士は、船の奥にある大きな一室にわたくしを連れて行きました。そのお部屋には、下男たちに運び出された友人と、家族がおりました。暮の雪様、新青海さん、万代殿、難波鴻様、丹頂様、初被様、以呂波山殿、鳳凰様、酔楊妃さん、高砂様、霞ヶ関殿、美人酔さん、朝霞様、君ヶ代殿、吾妻鏡殿、長楽様、乙女さん、綾の冠殿、新鴉の羽重様、早乙女さん、麒麟様、玉芙蓉様、桐壺様、思寝殿、老の目覚様、桂の花様、新台殿、雲の上様、紅筆殿、菅の糸殿、重簀火殿、蔦紅葉さん、末摘花さん、筆捨山様、今猩々殿、羅生門殿、若楓様、八重飛竜様、位の紐さん、総角さん、日の出霧さん、相生様、桜司様、玉の台殿、御所桜さん、浮む瀬様、日の出の鷹さん、長楽実生殿、花遊様、この方々が、わたくしの他に博士に選ばれたようでございます。「お姉さま、無事でよかったです」そう妹に言われて、ハッと致しました。「ええ。貴女も無事でよかったですわ」そう返していると、博士は再び私を抱き上げました。てっきり妹たちとこの部屋でお船の中では過ごすのだと思い込んでおりましたから、驚いていると、如何やらそうではなかったようでございます。わたくしは博士が宿泊するお部屋へと博士自らの手で運ばれました。

博士と共に豪華な船の中の一室で過ごして一週間ほど。船に乗り込んだ日から家族のいるあのお部屋に行くことはありませんでした。博士は朝起きるとニッコリと笑って「ぐっどもおにんぐ」とわたくしに声を掛けて来ます。そして、わたくしに手ずから食事を与えようとするのです。博士は言葉を覚えたての子供のように「キレイダ」と繰り返していました。きっと、それ以外の日本語をあまり知らなかったのでしょう。わたくしにお食事を食べさせた後は、何やら椅子に座って洋風の机で書類を書いていました。その手に握っているのは、万年筆と言ってインクを付けて書くという不思議な筆でございました。また、博士はお食事はお部屋で取るようにしていました。夕餉では「わいん」という葡萄を発酵させたお酒を嗜まれました。「わいん」には血のように赤いものと、白いものの二種類があるようでした。博士はお酒を嗜まれると陽気になる質のようで、お酒を召し上がっては頬を赤らめて、御歌を歌ったり、上機嫌でわたくしに英国語で語り掛けてきたりしました。

ウエルソン博士は、如何やらとても偉い方のようにございました。船の中で何週間も暮らすうちに、わたくしは次第に少しずつですが、ウエルソン博士の話す英国語の意味が分かるようになってまいりました。博士は、アーネスト・ヘンリー・ウエルソンと仰るそうでございます。何でも、米国の大学に所属してあるようでして、大正三年に来日した際にわたくしの親戚が暮らしている東京幡ヶ谷でわたくしの親戚の姿を見たそうなのでございます。その後、大正六年には横浜でわたくしのお友達を見たそうなのでございます。それから、親戚やお友達が生まれ育った地に行きたいと思われたようでして、こうして大正七年に久留米を訪れたのだと言います。そうしてわた

くしのお家、赤司廣にてわたくしたちを欧州へと連れて行くためにお船に乗せた、ということでございます。確かにわたくしたち一族は日本でも美しいと評判でございました。家族や親戚、友人の中には、見初められて嘗ては大名様やお役人様の元へ嫁いでいった者たちも多くございます。ウエルソン博士も、かつての大名様のようにわたくしたち一族の美しさに虜になったのでございましょう。中でも、わたくしは、雪のように白い肌が美しいと有名でしたもの。このように共に博士が暮らしたいと考えるのは仕方がないと思いましたわ。

お船には五十日程揺られておりました。その頃には、ウエルソン博士のことは、まあ、認めてやらないでもないという心持になっておりました。博士はわたくしのことをずっと気にかけておいででした。お世話も、二代目のお父様程まではいきませんが、他の者たちよりは御上手でしたわ。

長いお船の旅が終わって、降り立ったのは、英国でございました。わたくしと同じく連れて来られた方は博士の部下の方々に一足先に抱えられていきました。わたくしはと申しますと、博士が直々に抱き上げて、様々なものを見せて頂きました。博士は、妹や姉よりもわたくしが一等お気に入りを見せて、それはそれは、嬉しゅうございました。

英国は、連合王国と申しまして当時はグレイトブリテン及びアイルランド連合王国と申しました。この時はまだ、アイルランド分裂前でございました。英国の中でも、わたくしたちはイングランドというところに居りました。イングランドの都は倫敦と申しまして、其処は「雨と霧の国」という名にふさわしく、結構な頻度で雨が降り注いでおりました。とはいえ、故郷のように川が

氾濫するほどの大雨は滅多に降りませんし、地震もほぼ起きません。お天道様をなかなか拝めぬということを除いては、まずまずといったところでした。

英国に船から降り立つや否や、博士は沢山の人に囲まれました。周りのものたちは、老若男女様々だったのですけれど、そのお顔は祖国では見ない造りになっていて、異国に來たのだということをまざまざと思い知らされましたわ。赤毛の方や博士よりも明るい黄金色の髪の方、灰色がかった髪の方、亜麻色の髪の方、青い目の方、灰色の目の方、博士よりも濃い緑の目の方等様々なお色を持つ方がいらっしやいました。身に着けてあるものも「どれず」という女性用の洋服や、大きなお帽子を着けてある方もいらっしやいました。

英国に到着して、一週間後のことでしょうか、それまではわたくしは妹たちと離れて博士のお屋敷に暮らしていたのですけれど、とうとう米国へと「お披露目」に行くことになりましたの。わたくし、博士のお屋敷のことはとても気に入っていたのですけれど、このお披露目はとても重要なことらしく、どうしても行かなければなりませんでしたの。何でも英国へとまず行きつたのは、わたくしたちを落ち着かせるため、だったのです。米国は良くも悪くも様々な人種が入り混じったお国ということ、まず、日本から初めて出たわたくしたちが外国の雰囲気慣れるためにと此方へ連れてきていただいたようでしたわ。さて、こうして再びお船に揺られることとなりましたわ。この時も、妹たちとは一度博士に会わせて頂いたのですけれど、その後は博士と同じお部屋に宿泊しておりました。博士付の使用人たちからはわたくしが寵愛を受けていると噂に

なっております。確かに、わたくしは博士にとても大事に扱われておりましたから、そう思うことも無理がないかもしれません。

さて、米国に着いて、その後自動車に揺られてマサチューセッツという地域に到着いたしました。米国、というところは、よく言えば賑やか、悪く言えば五月蠅い所でございます。英語も、英国とは違って何やら訛が酷くて、聞き取りづらく感じましたわ。それに、彼らは何と言ったら良いのでしょうか、積極的な方々が多かったのです。わたくしのことをチラチラと、ではなくじいっと見つめてくるのですから、とてもきまりが悪く感じましたわ。なんと無礼なこと。そう思いましたが、わたくしは大人ですもの。ぐっと我慢いたしました。わたくし個人の意見といたしました。米国よりも英国の方が、居心地がよく感じたものでございます。

「お披露目」は何とも奇妙なものでございました。本当に見世物、といった具合でございます。わたくしとしては、早く終わらないものかと不満に思っておりました。お披露目の会場はとも広いお部屋で行われました。わたくしたちは、「ウィルソン五十」と呼ばれ、会場の真ん中に座らされたのでございます。博士は、いつも以上に上等なお洋服に身を包んでおられました。お披露目に来ていらっしゃる方は何も米国人や英国人だけではありませんでした。仏蘭西人や阿蘭陀人、西班牙人や葡萄牙人、独逸人、伊太利亜人など、欧州の方々も沢山いらしてました。お披露目では博士がわたくしたちに関する簡単な紹介をいたしまして、その後、お客様たちがわたくしたちを眺める、というわたくしとしては余り気分が良くないものでございました。

男性たちは——そこには女性はほんの一握りしかいなかったのです——写真機でわたくしたち

の写真を断りもなく撮ったり、無遠慮にわたくしたちに触れたりしてくる者もおりました。何やら皆様母国語でわたくしたちをじろと見ては捲し立てております。「とればあん」だの「ぜあ、ぐーと」だの「べりっしま」だのと騒がれても、ちっともいい気は致しませぬ。勿論、それらの言葉がわたくしたちを称賛するものだとは分かっておりましたけれど、それは、当然のこと。わたくしたちの美しさ、素晴らしさはわたくしたちが一番分かっておりますもの。誇らしく思えど、嬉しいとは思いませんでしたわ。何しろ、彼らは敬意というものが足りないのです。わたくしたちは見世物ではありません。それなのにまるで骨董品を眺めるような、価値を見極めるような視線を送られても、不快なことの上ありませんでしたわ。

お客様は、わたくしたちの珍しい容姿に大変興味をお持ちのようでした。何しろ、当時の祖国である日本の印象はと申しますと、極東の島国、或いは小国ながら露西亜と清に戦争で勝った国、といった具合でして、そのような祖国出身のわたくしたちは物珍しかったようでした。彼らは何処か祖国を幻とも思っていたのでしょうか、わたくしたちをやれ奇跡だ、神秘的だと言っては騒ぎ立てておりました。

そうですね、勿論、わたくしは姉妹や友人たちの中で一等人気だったようでございます。欧州の方の審美眼は、評価できると思えましたわ。わたくしの容姿は欧米では珍しいものでしたから、仕方ありませんまい。白い雪のような肌に、欧米の方よりも小さく華奢な体つき。何人かの方々はわたくしを妖精のようだと言ったり、お人形のようにだと言ったりしておりました。そういう訳でわたくしの周りには様々な国の人が囲むようにして群がっておりましたの。博士は、それを見

て満足そうに笑っておりましたわ。

—このお披露目では、ちょっとした事件がございましたの。どこの国の方かは存じ上げませんが、わたくしの体に無遠慮に、力加減もなく触れた男がおりましたの。あまりのことにわたくしが何も言えないでいると、博士は烈火のごとくお怒りになって、わたくしを傷モノにするつもりかと怒鳴りながらその男を会場から力づくで追い出しました。わたくしは怪我一つしていませんのですけれど、愛されているということが分かって面はゆい気持ちになりました。

お披露目は五日間に渡って行われました。最終日には、それまでの四日間に来た人たちよりも明らかにお金持ち、といった具合のお客様が来られました。彼らは、博士に何やら交渉しておりました。交渉が終わったかと思うと、友人や親戚たちをひょいと抱えてどこかへ連れて行きました。余りのことに啞然としてみると、如何やらこのお披露目はわたくしたちを手に入れるためのものであるに違いない、と麒麟様が仰いました。彼は、わたくしたちの中でも長く生きておられた方でしたので、この状況をよく把握することが出来たのでしょう。麒麟様の言葉は、当たっております。わたくしの妹は御髻の生えた気難しそうな老紳士に、姉は長髪をおりボンでまとめた男性のお屋敷へと行くようになったようにございました。一人、また一人と家族が、友人が、親戚が、会場から去っていきました。わたくしも、何やら身振り手振りが大仰な伊太利亜の方に見初められたようでございましたけれど、博士がそれを良しとしました。伊太利亜の方は、身綺麗で少しお声が大きいいことを除けば優しそうで良い方だったのですけれど、博士は頑なにわたくしを手放そうとは致しませんでした。

お披露目が終わるころには、会場にはわたくしと博士、それから数名の友人たちが残っていました。わたくし以外の方々は、お声を掛けられなかった方々で、ですから、わたくしが残っていたことは異例のことでした。わたくしを含め、残った方々はまた博士と同じお船に乗って英国へと戻りましたわ。他の方々は英国のお屋敷に行かれたようですけど、わたくしは、博士のお屋敷に住むようになりました。博士は、わたくしのことを実の娘のように大切にしてくれましたわ。物語に出て来るような古風なお屋敷の中で、わたくしはゆったりとした時間を過ごしました。その頃には当初感じていたような英国人への恐れや憤りは消えておりましたわ。それほど、博士は紳士的で優しくかったです。いつしかわたくしは、祖国のお父様たちと区別して、博士のことを「柳緑の瞳のお父様」とお呼びするようになっておりました。初めてお会いした時にはガラス玉のようで不気味だと思っていたその柳緑の瞳も、まるで暖かな森のようなお色に感じて、いつの間にか目で追うようになっておりました。柳緑の瞳のお父様と共に暮らすようになって、わたくしは外国の方が野蛮であるという先入観を消し去ることが出来ました。柳緑の瞳のお父様だけでなく、そのお屋敷の使用人、そして御家族の方は皆さまとても親切だったのですから。わたくしは柳緑の瞳のお父様のお部屋に暮らしておりました。柳緑の瞳のお父様は、常にわたくしと共にいたいと思つたので、そのような形になったのでございます。

わたくしが柳緑の瞳のお父様のお屋敷に暮らして暫くして、二度目の世界大戦が起こりました。柳緑の瞳のお父様は新聞やラジオで戦局を聞いては、悲しそうな顔をしておられました。彼の一番の懸念はわたくしの祖国である日本と英国が敵対関係になったことでございます。柳緑の瞳の

お父様は御年のこともあってか徴兵と言って兵隊さんになることは免れたようでしたけれど、それでも、人々の血が流れるという状況に心を痛めておいででした。特に柳緑の瞳のお父様は祖国の風景の美しさをご存じでしたから、それがつまらない空襲という人為的な行為で破壊されていくことが我慢ならなかったのです。わたくしも、この戦に嘆いたものでございます。漸く一代目のお父様が仰っていたように国が違っても分かり合えたと、わたくしはそう感じる事が出来ていたのですから。わたくしは、祖国に残してきた家族や、二代目のお父様、いえ、もうその頃には二代目のお父様は御年で亡くなってあるでしょうから、三代目のお父様かしら……のことがとても心残りでございました。わたくしたちの住むイングランドはそれほど空襲に遭わなかったのですけれど、祖国はそうではないようでしたから。戦争。何と残酷な響きでしょう。江戸の時代から長い時を生きて来たわたくしでも、やはりこの恐ろしさとも悲しさ、そして何も出来ぬことに対する悔しさには慣れることが出来ませんでした。

悪いことがあれば良いこともある。そのような無責任なことを言ったのは、どなたでしたでしょうか。その頃、良くないことが立て続けに起こりました。日本の元号で言うところ昭和四年の冬のことでございます。わたくしは、長年暮らした柳緑の瞳のお父様のお屋敷を去ることになりました。彼の不興を買ったわけでは勿論ございません。柳緑の瞳のお父様は、泣く泣く、わたくしを手放すようにしたようでございます。柳緑の瞳のお父様は、その頃には随分な御年で、ベッドに横になられる時間が多くなっております。柳緑の瞳のお父様は、御自身がもうすぐ儂くなられることを悟られたでしょう。自分が生きている間にわたくしを信頼のおける方の元へと、考えられ

たようでございます。

わたくしは、最期までご一緒するつもりでしたけれど、柳緑の瞳のお父様はそれを良しとはされませんでしたの。彼は床に就きながらも、ベッドの上で古い手帳を取り出されては手紙をお書きになったり、電話を掛けたりなさっております。わたくしの引き取り手を真剣なお顔で探しておられたのです。わたくしは、そのようなことはしなくて構わないと思いましたが、柳緑の瞳のお父様の意志は固く、結局昭和四年の冬にお迎えが来たのです。わたくしを引き取るにふさわしいと柳緑の瞳のお父様が判断された方は、なるほど、とても優しく聡明な方でございます。その方の住まわれている場所は、戦火に遭わぬような場所にあるとのこと、わたくしはその方にお父様の瞳のお父様が判断されました。柳緑の瞳のお父様は、引き取られるわたくしを見て、寂しそうなお顔で微笑まれました。そうして、「アリガトウ」と仰ったのです。それは、久しぶりに耳にした母国語でございました。その言葉を聞いてわたくしは涙をこらえきれませんでしたわ。彼は、わたくしが唯一、外国で心を許した方でございます。最期まで、お傍にいたいとお願いした方でございます。その瞳は、初めてお会いした時と変わらずきらきらと輝いていて……。わたくしは、何も出来ぬこの身を歯がゆく思いました。

引き取られた先は、ペンザンスという地域で、穏やかな場所でございます。そして、その地で、わたくしは昭和五年の秋に柳緑の瞳のお父様が亡くなったという知らせを受け取ったのです。わたくしが日本人以外の方をお父様とお呼びしたのは、後にも先にも、アーネスト・ヘンリー・ウィルソン様、唯御一人にございました。

昭和二十年八月。祖国の敗戦により、二度目の世界大戦は幕を閉じたとお聞きしました。わたくしは、呆然と、その知らせを右から左に聞き流しては、何もすることが出来ませんでした。

引き取った方のことを、わたくしは敬意をこめてご主人様とお呼びしておりました。ご主人様のお屋敷には、引き取られた時から今現在まで長い間暮らしております。このお屋敷では始めに申し上げた通り、世界各国からやってこられた老若男女が暮らしております。わたくしの暮らすお部屋にはわたくしを含め五十名の方がおられました。その方々は、わたくしと同じく日本から大正七年に海を渡ってこられた方々の子孫に当たる方でしたわ。皆さまは、欧州でお生まれになられたらしく、祖国のことはよく分からぬと仰っていました。わたくしは、数十年ぶりに会う同胞にかつてわたくしが暮らしていた頃の日本について語って聞かせて差し上げましたの。皆さま目をきらりと輝かせては、わたくしのお話に熱心に聞き入っておられましたわ。

そうして、平和に暮らしていたのですけれど、ご主人様が御年を理由に引退なさって、二代目のご主人様がこのお屋敷にいらした頃、とあるよろしくない変化が訪れました。同じお部屋に住んでいた方々が、次々に亡くなられたのです。亡くなられた方々は、欧州の他の国で生まれてイングランドにやって来た方々で、この土地に馴染むことが出来なかったようでございます。気が付いた時には、共にお部屋で暮らす方々は少なくなっておりました。二代目のご主人様が病死なされて三代目の、現在のご主人様に代替わりした時には、わたくしの住むお部屋にはわたくしを含め三十程の方々が暮らしておりました。二十余りの方々が、この地に馴染むことが出来ずに亡く

なつたのでございます。わたくしは、沢山の方々をこれまでに見送って参りましたが、矢張り死を見届けるのは堪えます。それが同胞のものですから、より一層、悲しみは増すばかりでございました。

わたくしが何故、今回このようにわたくしの半生を語っているのかと申しますと、本日でお屋敷を去るからでございます。

丁度一ヵ月ほど前でしょうか。このお屋敷に新しい方がやって来られましたわ。その方は、何でもお話を聞いておりますとわたくしの妹の孫娘、つまりわたくしの近しい縁者でございました。何故その子がお屋敷にやって来たか、と申しますと、それはわたくしの代わりになるためだということです。わたくしの代理としてこのお屋敷でお勤めをするのだと。その子に聞いたところ、わたくしの妹は独逸のとあるお屋敷で幸せに暮らして、そうして一生を終えたのだと聞きましたわ。

わたくしは、妹が苦しむことなく幸せな一生を送ることが出来たことを喜ばば良いのか、それとも、嘆けば良いのか、よく分かりませんでした。

新しいその孫娘が来て一週間後、英国のお役人様が四人ほど、このお屋敷に視察としていらっしやいました。お役人様方はわたくしを様々な角度で眺められた後、三代目のご主人様に「よろしいでしょう」と仰いましたわ。三代目のご主人様はとても嬉しそうに破顔なさった後、深々と頭を下げてくださいました。

ああ、三代目のご主人様が、お見えになりましたわ。皆様とのお別れの時間でございます。三代目のご主人様はわたくしを丁寧に抱き抱えられます。ふわりとした浮遊感ののち、わたくしは、久方ぶりに自動車に乗りました。この自動車は柳緑の瞳のお父様と初めて乗った時とは違い、小回りの利く、とても早い速度の出る自動車です。自動車に乗って揺られていると、三代目のご主人様は、楽しそうにわたくしに仰います。

「ああ、セイガイ。漸く、漸くだ。私はお前の、ウィルソン博士の求めた「ウィルソン五十」をこの目に見る事が出来る」

風が開いた窓から入ってまいります。柔らかな風が三代目のご主人様の灰色の髪を撫でて行きました。

「セイガイ、お前も、待ちわびたことだろう。日本に帰れるんだよ」

そう、わたくしは、今回祖国へと帰ることが出来るのです。もう二度とその地を踏めぬと思っていた、日本へ。わたくしの胸は歓喜に震えました。もうきつとお父様たちはいらっしやらないのでしょうけれど、もう随分と景色も変わってしまったのでしょうけれど、それでも、とても嬉しゅうございました。決して、今までの英国での生活が寂しいと思うことがなかったとは言いますまい。けれど、よい思い出が沢山ございました。悲しい別れもあったけれど、それ以上に温かな記憶は、いつまでもわたくしが忘れることはないでしょう。

自動車に乗って行きついた先は、空港という場所にございました。今回はお船ではなく飛行機

に乗るようでございます。時代が随分と進んだものと感心致しました。係の方の質問に三代目のご主人様が何やら返答なさってパスポートという身分証をお出しになるのを、わたくしは黙って眺めておりました。そうして、漸く飛行機に乗ったのでございます。飛行機が飛び立つとき窓から見えた英国の、イギリスの大地に、わたくしは涙が止まりませんでした。初めイギリスに来るときは野蛮な国だ何だと憎んでおりましたのに、今ではイギリスはわたくしの第二の祖国となっていたのです。

時代の進歩とは素晴らしいもので、一日もかからずに、わたくしは羽田空港に降り立ち、その後、飛行機で經由して福岡空港に降り立ちました。そして三代目のご主人様と一緒にタクシーという自動車に乗って、久留米市の山本町耳納という場所に到着いたしました。

そこには、沢山の日本人と仲間たちがわたくしたちを出迎えておりました。最近生まれたのであろう、かつて共にイギリスに渡った方々の子孫たちは、わたくしを見て、「おかえりなさいませ、青海様」と言ってくれたのです。わたくしは、震える声で「ただいま帰りました」と申しました。

パシャパシャとシャッターが眩しく鳴り、記者と思しき者たちがわたくしを写真に収めております。三代目のご主人様は、元理事と呼ばれた松本様と堅い握手を交わしていらっしゃいます。その後、三代目のご主人様と松本様の写真を記者たちが撮っております。漸く約百年ぶりに帰って来た故郷では、四月で梅雨でないというのに、柔らかな雨が降っております。冷たく不快ではないその雨は、まるで柳緑の瞳のお父様からの祝福のように感じまして、わたくしはまた、泣

いてしまいました。

一連のやるべき儀式が執り行われた後、わたくしは、三代目のご主人様によって赤司巳喜雄様という方に引き渡されましたわ。如何やら彼が、わたくしの新しいご主人となられるようでございます。

三代目のご主人様も、新しいご主人も、涙を流しておられました。

「お前を、帰すことが出来て良かった。幸せに暮らすんだよ」

そう言って、三代目のご主人様はイギリスへとお帰りになりました。わたくしはそのお言葉に強く領きましたわ。

それから暫くして、わたくしは新しいお家に住むことになりました。わたくしに与えられたお部屋には「ウィルソン五十」という名前が付いておりまして、そこにはかつて共に旅立った四十九の家族の子孫がそれぞれ御一方づついらっしゃいました。そこでわたくしの家族は、わたくしと同じ血を引く者は、日本にはおらぬのだということを知りました。わたくしは彼等に強請られるままにイギリスでのお話を致しました。皆さん、わたくしのお話を興味津々といったご様子でお聞きになって、あのペンザンスのお屋敷にいた子たちと同じような顔をした皆さんを見て、思わず笑ってしまいましたわ。

わたくしは、今、福岡の久留米市にある新しいお家で楽しく暮らしております。わたくしが

故郷に帰って六年たった現在でもわたくしを一目見たいと沢山の方が此処に訪れて下さいます。

わたくしの名は、青海。江戸時代に生まれ、ヨーロッパに向かい、その後百年程の時を経てこの地へと帰ることが出来た女にございます。わたくしは、きつとお仲間の方々の中で一番幸せで、それでいて、久留米の誇りと、そう呼ばれる者でございます。

アーネスト・ヘンリー・ウィルソンは、大正三年に日本の植物を収集する目的で来日した。その時、彼は東京幡ヶ谷の園芸店で初めて久留米つつじを見てその美しさに感動したのだという。大正七年に久留米つつじ発祥の地である久留米を訪れたいという夢を叶えた彼は、久留米市東町にある赤司廣楽園を訪問する。そこで二百五十以上の久留米つつじの品種中から、彼は五十品種を選び、買い付けた。博士は買い付けたつつじをマサチューセッツ州にあるアーノルド樹木園へと運び、そこで展示会を開催する。五十品種の久留米つつじはアメリカで有名となり、その後ヨーロッパへと輸出されて西洋に広がった。博士が持ち帰った五十品種のつつじは彼の名を借りて「ウィルソン五十」と呼ばれる。

平成二十九年に、イギリスのペンザンスにあるトレウィデン・ガーデンの造園デザイナーであるリチャード・モートン氏が、同園でかつて揃っていた「ウィルソン五十」に該当する五十品種のつつじが三十数種となり一部は品種名が分からなくなったことを嘆いていた。氏は、久留米つ

つじセンターを訪れることで現在ガーデンにあるつつじの品種を明らかにしようと思ひ立つ。彼が調べたところ、久留米つつじセンターには「ウィルソン五十」のうち一品種だけ、現存してないということが分かった。その品種は、ガーデンに奇跡的に残っていたために、氏は久留米を訪れる際にその一品種を持って行こうと決意する。

その幻の一品種は平成二十九年の四月につつじ生産者である赤司巳喜雄に託されることとなった。このような経緯を経て、久留米つつじセンターには「ウィルソン五十」がそろったのである。白く美しい二重咲きの小ぶりの花を咲かせる幻の一品種であり、約百年ぶりに日本に帰って来たその久留米つつじの品種名は、「青海（せいがい）」と言った。

（文学部文学科二年）

ネバーランドの黎明

坂田 悠美香

終わらない夜はなぜ無いのだろう。

朝なんて、二度と来なくていいのに。

毎晩そんなことを祈っている。

*

「お酒は飲まないの？」

カウンター席の常連さんが琥珀色の液体が入ったグラスを振りながらそう言った。カラカラと氷が音を立てる。同時に、炭酸が空中で弾けたように見えた。

そのハイボールを作ったのは、声をかけられたヒナ自身だった。だから、こんなことを思う権利はないのかもしれないが、そんなに氷が入ったドリンクにワンコイン以上のお金を払うなんて、ただだけお金持ちなのだろう。しかも何杯も。

「まだ子どもなので。ジュースだったら喜んでいただきます！」

このお客さんは店員にドリンクを奢るのが好きな人だ。今日もそうしようとして、ヒナに声をかけてくれたのだろう。もう何度も奢ってもらっているし、そのたびにお酒は飲めないことを伝えていたのだが、一向に覚えてもらえない。

常連さんはその日も「そうだったっけ」と笑ってグラスを空にし、オレンジジュースとハイボールを一杯ずつ注文してくれた。片方の氷は少なめにしておいた。

大学生、それも一人暮らしともなれば、大抵の時間は自由に使えるし夜も出歩ける。深夜帯のシフトに入ってもぶつぶつ文句を言う大人はいない。夜風を満喫しながら歩くこの時間が、ヒナはなにより好きだった。

バイト先から大通りを渡り、一本入った道。近所にあるヒナが通っている大学生のほとんどは、もっと大学の近くか、先ほどまでいた飲み屋街の周辺に群がるように住んでいる。微妙に大学から近くて遠く、また飲み屋街からも隔たれたこの道が、ヒナの散歩道であり帰り道であり、通学路だった。

丑三つ時ってなんで三という数字が入っているのに二時頃を指すんだろうなあ、とか毎回思いながら、かといって手元にある機械で調べるほどの興味はない。車が十字路から出てくる気配がしたので立ち止まり、次に歩き出す瞬間にはそんな疑問は消え去っていた。とりとめもない思考が巡る頭で、ただ歩く。そんなとき、

「よっ」

後ろから急に肩を叩かれて、ヒナは思わず首をすくめて息を呑んだ。早くなった鼓動に合わせ
るかのように横に並んだ背の高い男は、そんなヒナの様子を見て笑った。

その男が誰かを認識して、ヒナは相手を睨みつけた。

「もうちょっと足音立てながら近づいてきてよ。びっくりするじゃん」

「ヒナの警戒心が薄いだけじゃないの」

そう言ってヘラヘラ笑ったキョウは、そのままヒナの前に両手を突き出してきた。薄ぼんやり
とした街灯が、右手の赤い袋と左手の青い袋を照らし出した。

「キョウ様から贈り物を授けよう。バニラかチョコか」

言葉と袋の意味を理解した瞬間、キョウを睨んでいたヒナの視線は簡単に和らいだ。

「ではバニラで」

「感謝したまえ」

「ありがとうございますキョウ様」

おどけながらバニラアイスの青い袋を受け取ると、キョウは満足そうに赤い袋のチョコアイ
スを引っ込めた。

家まで待ちきれないのでその場で袋を開ける。予想していたよりも溶けておらず、取り出した
アイスの周りだけほんのり空気が冷えたように思えた。

「わざわざ買ってきたの？」

同じく袋を開けてアイスにかじりついているキョウに、わざと言葉少なくそう尋ねると、彼は頷きかけて首を傾げた。

「そうとも言えるけど、普通に散歩したかっただけでもある」

この答えには喜んでいいのか分からず、ヒナはふうんとだけ呟いた。キョウはこのアイスが売られているコンビニでバイトしている。ヒナより退勤時間が一時間早いはずの彼が、自分の帰る時間に合わせて待っていてくれたのかなんて、そんなことは別に期待していない。

ヒナの知っているものより少しだけ舌触りが柔らかいアイスは、やけに甘く感じた。

「もうすぐ前期の成績出るじゃん？」

少し歩いた辺りで、キョウが最悪な話題を振ってきた。

「やめてよ、嫌なこと思い出させてくるの」

「別にヒナも俺も、成績悪いわけじゃないんだからいいじゃんか」

「成績出るとその先のこと考えなきゃいけないから嫌なの」

顔をしかめると、キョウは「ああ、それもそうか」と分かっているんだかないんだか、曖昧に呟いた。ジーッ、ジーッと名も知らない虫がどこかで鳴いている。

「あと、言語の富田嫌いだから、結構授業休んじゃって。単位取れてるか怪しい」

「それずって言ってんね」

「あいつめんどくさいの。英語の長文に出てきた政治問題について、一人ずつ当てていって意見

聞こうとするんだから」

丸眼鏡の白髪頭を思い出して、パニラではぐされた唇が固くなる。回りくどいヒントを何度も繰り返しながら、「若い君たちなら分かるはずですよ」と、肩をすくめるその男が、ヒナは大学内で一番苦手だった。そもそもヒント（笑）を与えている時点で、自分がほしい答えを生徒に求めているだけだ。くだらないと、ヒナは思う。

「言語の先生って当たり外れ激しいよな」

そう言うキョウは、恐らく当たりの先生だったのだろう。先生の愚痴を聞いたことがない。

「単位取れてなくても来年取り直すからいいの」

ヒナは、単位に執着しない人間だった。もちろん、正しい学生ではない。

「まあ、俺もそうするかな」

名前と矛盾した営業時間で営業しているコンビニの袋の口をキョウが広げてこちらに向けた。

ヒナはお礼を言いつつ、棒と空になった袋をその中に入れた。キョウは、いつもヒナの言うことに同意する。

どれだけゆっくり歩いたところで、ヒナたちの住むアパートは出会った場所から十分もかからずに到着する。キョウはヒナのお隣さんだ。

「じゃあ、また」

日付が変わっているから、また明日とはキョウは絶対に言わない。

だからヒナも自分の家のドアに鍵を差し込みながら、

「うん、また」

と返す。同時にドアを開けて中に入る。ほんの一瞬だけ、ヒナは立ち止まってキョウがいなくなるのを横目で見た。

彼の見ている景色とわたしの見ている景色が異なるその瞬間が、安心するし、寂しくなる。

普通の人みたいに、また明日、とわたしたちが言う日は、別に来なくてもいい。ヒナは毎晩そう思う。

大体、太陽が一番高くなったくらいに目が覚める。大体、というのがどれくらいの確率を表すのかヒナは知らない。

午前中に授業を入れなくなってからというもの、すっかり朝という時間に活動することがなくなった。

光を透かしまくっているカーテンを開けて、お花を摘んで、適当に髪を束ねる。歯を磨きながらスマホを見ると、母から着信があったことが表示されていた。

メッセージも来ていた。

「お盆は帰ってきますよね？ これを見たら電話をください」

ヒナは口の中ものを吐き出してしまうが、スマホを操作してトーク画面を開いた。母との、じゃなくて高校の頃からの友達的美玲とのものだ。

「お盆帰省しないから会えない？」

そしてヒナは、何も入っていないと分かっている冷蔵庫を開けた。もちろん何も入っていないから、食料を求めて出かけることにした。

外はうんざりするほど暑く、一步踏み出すたびに、暑い、という感想が浮かんだ。セミが百匹以上いるんじゃないかという勢いで鳴いている。暑い。汗が顔をつたう。暑い。小学生たちが顔を真っ赤にして笑いながら自転車を漕いでいく。すごい。暑い。

たった五分の距離なのに死にそうになりながら、昨日キョウがアイスを買ってきてくれたコンビニとは違うコンビニに入った。あまりの涼しさに息が漏れる。陽気な入店音に被せて間伸びたあいさつが空虚に響く。もう入店音がスイッチになっている店員さんは、別にヒナに向けてあいさつをした訳ではない。

明るさの違いにびっくりしている網膜が落ち着くのを待たずに、ヒナは真正面に見える、おにぎりが陳列された棚に向かった。

ちょうどお昼時だからおにぎりやサンドイッチはほとんど残っていなかった。好きな具が売り切れていたため、その左下で余っていたぶっかけうどんとエビグラタンを手取る。グラタンは明日の食料だ。夜はバイト先でまかないが出るため必要ない。

お菓子も買おうかと迷って、やめた。代わりに二割引のシールが貼られたヨーグルトをうどんの上に乗せて、レジに並んだ。

条件反射で「袋要りません」と言ってしまったが、所持品はスマホと財布のみだったヒナは、食料を直接抱え込み、また死にそうな思いをして家にたどり着いた。片手でなんとか鍵を開けようとしていると、隣の部屋のドアがタイミングよく開いた。その部屋の主の顔が見えるごくわずかな間で、ちゃんと化粧しとけばよかったと、ヒナはぼんやり思った。

「おー……なんで袋もらわなかったの」

ヒナを見た瞬間すべてを察した優秀なキョウは、ヒナの手にある鍵を取って、ドアを開けてくれた。ありがたく入らせてもらう。

「袋要らないって答えちゃって。お会計出たあとにやっぱり要りますとか言いにくいじゃん。コンビニ店員ってそうでしょ」

「まあ確かにめんどいけど、混んでなかったら別にいいのに。てか涼しー」

どうせコンビニに行く間だけだし、とずぼらなヒナがつけっぱなしにしていたクーラーが、彼を癒やしたようで何よりだ。

部屋に入り、ちょっと待って、とヒナは頼んだ。食料をテーブルの上に置いて、玄関にとんぼ返りする。そして傘立てから黒い折りたたみ傘を引き抜いた。

「これ。この間貸してくれた傘」

ついこの間、二人でバイトに向かっているときのこと。キョウのバイト先の近くで雨が降り出し、もう少し先まで歩かなければならないヒナにキョウが貸してくれたものだった。キョウは忘

れていたかのように目を少し開いて、ありがとうと言った。

「こちらこそ。どっか行くの？」

「ヒナと同じ」

「なるほど」

キョウもヒナと同じ、だらしのない人間だから、驚きはしない。恐らくヒナと同じように、キョウも本日一食目のはずだ。ちなみに現在の時刻は、昼時にも遅い。

セミが忙しなく鳴いている。キョウの白いシャツが光を反射して眩しい。

「ヒナ、今年は実家帰る？」

なんてことない素振りです、キョウがそう聞いてきた。軽く短い言葉で。でも、声がどこか固かった。

眩しいシャツから目を逸らしつつ、ヒナもなんてことない素振りで返した。

「わたしは、帰らないよ」

「そっか」

セミの声が響く。うるさいほどなのに、沈黙を埋めることはなく、むしろその間を強調しているような気がした。二人で話していて会話が続かないことなんてないし、お互い沈黙だったとしても、そこに気まずさなど感じないはずなのに、こういう話をするときは、必ず、息を吸うのさえ苦しくなるような間が訪れる。

背中側が涼しくて、お腹側が暑かった。身体の前側と後ろ側の温度差が気持ち悪くて、どうし

ようもなく嫌で、衝動的にヒナはキョウの手を思いっきり引いた。

「ご飯、一緒に食べよう。無駄に二食分買っちゃったの」

キョウは、突然のヒナの行動に目を丸くして、それから苦笑した。

「無駄になってなんだよ。明日に取っておけばいいじゃん」

「今はグラタンの気分だけど、明日がグラタンとは限らないでしょ。それに自炊して節約しなきゃ。あとでスーパーついてきてよ」

「グラタン買ったんだ。てか、その決意何度目？」

絶対また続かねえよって言いながらも、キョウはさほど抵抗もせずに入ってきた。涼しい、と言う声はいつも通りのキョウで、それを背中で聞いたヒナは安心しながら、その辺に脱ぎ捨てていたパジャマをベッドの下の隙間に滑らせた。

遅いお昼、下手したらおやつにもなり得るご飯を食べ終わり、少しだらだらして、バイトに向かった。スーパーにはもちろん行かなかった。

うっすら陽炎が見えるアスファルトを並んで歩く。暑い。

暑いね。まじで暑い。いや暑すぎない？ 暑いわ。

語尾や言い方が違うだけの山びこみたいな掛け合いを続け、ふいにキョウがそれを断ち切った。

「今日から何連勤？」

キョウが今日と言うと、小さい子が自分のことを名前で呼んでいるようになるから、ちょっと

面白い。でもキョウの中では響きが同じ二音の区別はちゃんとついていて、不思議なことになぜかヒナもちゃんと聞き分けができる。

「来週くらいまでかな」

「やっぱ。そんなに人手足りてないの」

「そういうわけじゃないけど、お金稼がないとだし」

「えらいよなヒナ。俺なんだかんだ親に甘えてるわ」

そんなこと言いながら、キョウもぎりぎりまでバイトをしていることをヒナは知っている。それを指摘すると、すべて自分のバイト代でまかっているヒナと、親からの援助を受けている自分を比べてしまうだろうから何も言わないけれど。

だから代わりに、

「そうだね。だからえらいわたしにアイス奢ってね」

と冗談めかして言うのと、キョウは拳で軽くヒナを小突いてきた。ああ、頭の汗すごいのに。

「夜買ってあげただろうが」

「ケチ」

キョウの言う「夜」は、十数時間前の深夜のことだ。キョウは絶対に日付が変わったあとの出来事を「昨日」とは言わない。

別に本気で奢ってもらおうと思ってるわけじゃないけど、唇を少しだけ突き出した。いや、奢ってもらえるならそれはそれで嬉しいけど。

キョウは呆れたように笑っていた。そして、優しくバカなキョウは、結局今日もヒナに夏の空みたいなアイスを買ってくれた。

その夏、キョウは初めて実家に帰らなかった。

*

ヒナとキョウの出会い、二人が大学一年生のときだった。

ヒナは母が嫌いなわけではなかった。大切に育てられた自覚はあるし、愛されているのも分かっている。それでも、時折たまらなくなるほど離れたい衝動が訪れることがあり、大学進学前はその衝動がピークに達していた。一年浪人して、わざと家から遠い大学を選んだ。

キョウは、最初からヒナの隣に住んでいた。

「夜の散歩っていいですよね」

自由を手にしたヒナが、深夜帯のバイトを始める前。春と梅雨の境目だった気がする。夜の散歩にハマっていたヒナが、その日もドアを開けると、すぐにキョウも外に出てきた。そこでヒナは、初めてキョウに話しかけられた。

「俺も、夜に歩くの好きで。よく夜中に出かけてるなって思っていたんです。——あ、いや、聞き耳立てるとか後をつけてるとか、そんなんじゃないかって。いつか話しかけたいって思ってたんですけど、今日やっと勇気がでて、いや、キモいですよね」

あわあわと言いつを並べるキョウウに対して、不思議なことに、ヒナはまったく警戒心が芽生えなかった。このアパートの壁は薄い。隣の人がドアを開け閉めしたら聞こえるのは当たり前だから、彼の言葉を疑う余地はなかったのもある。

でもなにより、ヒナのほうも、キョウウがよく夜中に出かけているのを、知っていた。もちろん変な気持ちはなく、バイトかなくらいにしか思っていないかった。でも、まさか夜散歩仲間だったなんて。

急に仲間意識を感じたヒナには、話しかけられて嬉しい以外の感情が出てこなかった。

「あの、よかったら——」

そこから二人でよく歩くようになった。話せば話すほど、ヒナとキョウウはよく似ていることが分かった。夜が好きなこと。地元が同じ県だったこと。きのこよりたけのこが好きなこと。キョウも一年浪人していて、同い年で、同級生だった。気が合ったし、側にいると落ち着いた。

二人は子どものまま、今日までずっと、友達だ。

*

「ヒナ〜！ 久しぶりじゃん元気だった？ はいこれお土産ね。いや〜もう焼けちゃってさあ、日焼け止めて本当に意味あるのかねえ、てか髪切った？ 超かわいいじゃん似合う〜！」

毎日会おうが二ヶ月ぶりに会おうが、何も変わらずにポンポンと言葉が出てくるのは才能だと、

美玲と会うたびにヒナは思う。たぶん数十年会わなくてもまるで昨日の続きのように話し出すの
だろう。その変わらない距離感が、ヒナには心地よかった。

「元氣だったよ。お土産ありがとう。ずっと外にいたからじゃない？ 切ったけど、そんなに変わ
らないよ。よく気づいたね」

一つずつ返事をしていくと、美玲は効果音が聞こえてきそうなほど、ニカッと笑った。

結局、美玲とはお盆の時期には会えず、後期が始まってすぐの日曜日に会うことになっていた。
ヒナはバイト以外特にすることはなかったのだが、美玲はこの夏大忙しだった、らしい。

でも、その忙しさも夏の間までで一段落ついたようで、美玲はご機嫌だった。首の辺りまであ
る長いグラスに注がれたフルーツサンゴリアをおいしそうに飲んでる。

「ここ雰囲気いいね」

ヒナがそう言うと、美玲は自慢げに頷いた。

美玲が指定したこのお店は、一見普通の家にすら思えるほど、こぢんまりとしたイタリアンだっ
た。しかし中は装飾にこだわられていて、赤いチェックのテーブルクロスに、木で作られたイス
やテーブル、小さな黒板にチョークでおすすりメニューが書かれているなど、まるで絵本の中の
レストランのようだった。まだ飲み物しか頼んでいないのに、ヒナはすっかり、この店が気に入っ
ていた。

「ここ、先輩に教えてもらったの。普通に雰囲気いいお店だけど、ヒナは絶対好きだろうなって！」

「うん、すごく好き」

そう言ってる、ヒナは美玲とは少し違う、同じサングリアを飲んだ。ほのかな炭酸が口の中ではじけて、まるで大人になってしまったかのように思える。

「今日何も食べてないんだよねー！ここで贅沢しようと思ってー」

と、もう夜なのにバカな発言をして、美玲はへらへら笑う。ということは、恐らく空腹の状態であアルコールを身体に入れている。もう酔っているのかもしれない。

ヒナは慌ててメニューを広げた。そこにも、温かみのある手書きの文字と、料理の写真が差し込まれていて、美玲がはしゃいだ声をあげる。とりあえず、それぞれ頼みたいものを二品ずつ注文しようということになり、二人ともしっかり優柔不断をした。その間、一人しかいないホールの店員さんは、ヒナたちを急かすこともせず辛抱強く待ち続けてくれていた。

「ヒナ、彼氏できたー？」

二人でシェアしたクリームパスタをぐるぐる巻きながら、美玲がほんのり赤い顔でそう言った。お酒に二乗された美玲の声は、普段以上に響く。客がヒナたちだけなのが幸いだ。

「できてないよ」

ヒナは肩をすくめた。美玲は、酔うと必ず恋バナを始める。

「いい人とかさ〜！ いないの？ 同級生とかさ！」

「……うーん、いない、かな」

「ええー！ つまんない！」

美玲が口をとがらせる。食べたり飲んだりしているのに、その華やかな色はずっと変わらない。「そんなに人の顔ちゃんと見てないから」

「ヒナいつもそう言うよね、私なんてもう、イケメンじゃないかずっと探しちゃうー！」

「美玲こそ、いつもそう言ってるじゃん、野口くんかわいそう」

野口くんは美玲の彼氏だ。かなり前になるが、美玲と野口くんがデートしているところに遭遇したことがある。とても筋肉質で明るい人で、美玲とお似合いだった。

そこで、美玲がパスタを口に運びながら言った。

「ああ、大吾なら別れたよ」

「えっ」

「県外に就職するらしい。それに転勤も多い会社らしくて、途中で絶対ついていけなくなるだろうなって思ったから、別れた。すんなり受け入れてたよ」

あまりにもあっさり結末を教えられて、ヒナは面食らった。確かに最近美玲のSNSに登場しなくなっていたけど、それは美玲が（おそらく野口くんもだけど）忙しいからだと思っていた。

あんなにお似合いで仲が良さそうだったのに。半年記念にもらったアクセサリを身につけて嬉しそうに笑っていた美玲と、その横でキーキを持っている野口くんの写真が脳裏に浮かぶ。

「ごめん、知らなかった」

「そりゃそうよ。言っていないもーん」

美玲がおどけたように目を見開いて、顔を少し近づけてきた。目元のラメがその動きと合わせてキラキラと上品に光っている。何かに似てる、とヒナは思ったが、でもそれが何かは思い出せなかった。

美玲は化粧が上手い。元々美人だけど、それをさらに引き出しているかのようだ。二人でお泊まりも旅行もしたことがあるから、ヒナは何度も美玲の化粧中の姿を見ているが、クリームも粉も色も、ヒナの『塗っている』とは違い、美玲の場合は『乗せている』と表現するほうが正しい。「まあ、就職で別れるなんて大人になれば普通のことだし、そんなに気にしてないの」

おどけた表情を仕舞って、元の顔に戻った美玲は、まばたきをしながらそう言った。「そうなの？」

美玲の切り替えが早いのはいつも通りではあるが、今回はさっぱりしすぎているように感じた。別に強がっているようにも見えず、本心から気にしていないのだろう。未練どころかすがすがしさすら浮かぶ美玲の顔は、今日も完璧だった。

「うん。だって、遅かれ早かれ大吾とは別れてただろうし。好きだったけど、でもずっと一緒にいられるかって聞かれたらやっぱり考えちゃうの。それは大吾も同じだと思うよ。お互いそこまです考えられるわけじゃない時点で、もう別れることは決定してたよ。だから、そんなに悲しくなかったかな」

ヒナは黙って美玲の話聞いていた。黙って、というか、言葉が出てこなかった。達観した美玲の考えと、実際その通りになっている今の状況が、あまりにもリアルだった。恋愛ってそんな

もの？もっと、バカみたいに溺れて何も考えられなくなるものなんじゃないの？あんなに仲良さそうな半年記念の写真を世界に発信しながら、お互い頭ではそんなに冷静だったのか。

いつか別れることを想定しながら、付き合う。誰とも付き合ったことがないヒナにはそれについてどう言う権利はないのだが、でも、理解ができなかった。

「ちゃんと、好きだったよ。でもそれだけ」

ヒナが何も言わないからか、美玲は付け足すようにそう言って、ぐっとサングリアをあおった。そこで店員さんがピザを持ってきてくれ、美玲がそれを受け取り、空いた皿を店員さんに渡しながら新しいサングリアを注文した。美玲の視線が一瞬動いてヒナのグラスを確認したのが分かった。ヒナのグラスにはまだ半分以上ドリ๊งクが残っているが、もし残りが少なかったら、「ヒナは注文しなくていい？」と聞いてくれたのだろう。美玲は心配りができる人だと、ヒナはこういう瞬間にいつも実感する。

さっそくピザに手をかけようとした美玲が、ふとヒナのほうを見て、相変わらず効果音が出るように笑った。

「ヒナ、驚きすぎだって」

そこでヒナは、自分がずっと取り分けられたパスタを食べ進めていないことに気づいた。会話しながら上手にパスタを食べていた美玲と違い、ヒナのパスタはまだまだ残っている。フォークを動かすと、ちょっとだけ、ソースが固まっていた。

「ヒナは純粹だからね、ちょっと早かったかな？」

わざとらしく声のトーンを上げた美玲に、半分イラッとしたが、でも実際そうなので何も言わなかった。ヒナが子どもなのは事実だ。純粹、という言葉が、どこか侮りを含んで自分に向けられるのは腹が立つが、純粹そのものに罪はない。ただ、その言葉だけで、それを向けた相手の反論はどんなものでも陳腐に聞こえてしまうから、罪はないけど嫌いだ。

その時、お店のドアが開いて新しくお客さんが入ってきた。店員さんがその人たちを席に案内するのをぼんやり見ていると、チーズを伸ばしながら写真を撮っていた美玲が、あっ、と声を上げた。

「そういえば、ヒナ、あの人は？ あの、仲良かった人」

美玲が誰のことを言っているのかすぐに分かったが、ヒナはわざと首を傾げた。美玲が続ける。

「あのんだよ。あの、理系で、背高い人」

「……ああ、フジミヤ？」

「そう！ その人」

フジミヤ、というのはキョウの名字だ。社交的な美玲だが、キョウはヒナと美玲の属する学部とは縁遠いため、キョウとの関わりは無いに等しい。ヒナを通じてお互い存在だけは知っているような状態だ。

「フジミヤくんとは、まだ仲良いの？」

美玲の顔は、興味津々という言葉の権化のようだった。ヒナは思わず苦笑して、いつも通り答えた。

「仲は良いけど、付き合っていないよ」

途端に、つまらない、という表情になった美玲は、また口をとがらせた。

「もう付き合っちゃえばいいじゃん、私、ヒナの恋バナ聞きたいのに」

「美玲が結婚するまでには、ね」

「私の結婚なんてずっと先かもしれないじゃん。待ちきれないよ！」

「美玲モテるからすぐ結婚しちゃうんじゃないの？」

「ええ？ じゃあ結婚式ではヒナが友人代表になってね」

「美玲が高校で花火あげた話とかしよかな」

「うわやめて、それまじで黒歴史なんだから」

未だにお母さんに掘り返されるんだからね、と顔の左側を美玲が歪め、ヒナがそれを見て笑ったところで、さっき注文した美玲のサングリアが運ばれてきた。

その透明感のある金色の液体と中の泡が光を反射しているのを見て、美玲の目元のラメに似ているのはこれだったと、ヒナは思い出した。

*

「——じゃあ、今日はここまでにしまーす、お疲れさまでしたー」

正直、ヒナが名前も覚えていない先生がそう言った瞬間に、待ちかねていたかのようにいっせ

いにみんなが席を立つ。大講義室の一番後ろで講義を受けていたヒナも、学生の群れに遅れをとらずに教室を出た。今日は昼からずっと講義が入っていたから、もうくたくただ。早く帰りたい。卒業までに建物内のすべての床を歩くことはないよな、なんて思う。それくらい広い大学の棟をヒナが出ると、すぐ近くで歓声があがった。咄嗟にそちらのほうを見る。ヒナの周りの人たちも、少し歩みを緩めて同じ方向を向いていた。

どうやら声を上げたのは女子数人らしい。その子たちの輪の中心にはスーツ姿の子がいて、手で顔を覆っていた。泣いているようだったが、ちらりと見えたその口角は上がっていた。すごい、おめでとう、と周りの子たちが口々に言っ、スーツの子の背中をさすったり、肩を優しく叩いたりしている。その中には、ヒナと同じ学科の同級生もいた。

「就職決まったのかなあ」

ぼんやりと呟いた誰かの声が、ヒナの胸を突いた。はしゃいでいた同級生が、周りの視線に気づいたのか、首をこちらに向けるその素振り、ヒナはその集団から視線を外して急いで背を向けた。

息が詰まる。

いつの間にか止めてしまっていた足を急いで動かして、歩いて、歩いて、ようやく門までたどり着いたところで速度を緩めた。広くなった視野のおかげで、自分が潰れた銀杏をさらに潰しながら歩いていくことに気づく。講義があった棟が門から一番遠い棟だったことを恨みながら、ヒナはどうしようもなくキョウに会いたくなっていた。

たまに、学校帰りにキョウに会うこともある。今日がその日であればいい。そう願いながら、いつもは付けるイヤホンを外したままにした。しかし、残念ながらキョウの姿を見つけることはなく、家にたどり着いてしまった。

メイクしてない日とかに限って会うのに。なんで今日に限って。

平然と階段を上りながら、ヒナの心中は荒れていた。さっき見たスーツの子の髪は、整えられて綺麗だった。でも毎日毎日、綺麗にヘアセットすると考えるだけで気が滅入る。その上求められるメイクも完璧にこなさなきゃいけない。あの子は、すごい。

いつかは、なんて、

そこで無理矢理考えるのをやめた。ヒナはまだ子どもなのだから。

階段を上りきったところで、一度気持ちをリセットするために強く頭を振った。並ぶ二人の部屋のうち、ヒナの部屋のほうが奥側だ。さりげなく、キョウの部屋の前を通るときに気配を窺ってみたが、どうやらまだ帰ってきていないようだった。

とはいえ、バイトに行くときには会うだろう。そう考えていたが、気にしないふりをして気にしていた隣のドア音が聞こえることはなかった。授業が長引いて、そのままバイトに向かったのだろうか。もしくはシフトが変更になったのだろうか。どっちにせよ、ヒナのバイトの時間も迫っていたので、仕方なく家を出た。

途中の信号が赤だった。ヒナが立ち止まっていると、後ろから近所の制服を来た高校生二人組がやってきて、ヒナのすぐ隣に立った。

「うちの親戚の兄ちゃんがもうすぐ二十歳になるんだけどさ」

「そうなの？ 大人じゃん」

さっきまでの名残で、イヤホンを付けていなかったヒナには、集団の会話がはっきりと聞こえる。盗み聞きするようで悪いかなど思ったが、鞆の中のイヤホンを今から出すのは面倒だし、すぐ信号は変わるはずだから、そのまま視線だけ向こう側に向けていた。

しかし、その判断が間違이었다ことに、ヒナはすぐに気づいて後悔した。

「いや、それが大人になりたくないって騒いでるらしくて」

「え、やば」

「やばいよね。普通に。うちの年でも成人って言ってくる人いるのにさ」

「あー言われる言われる」

「親がウチとその兄ちゃん比べてきてさ、『あんたはヒロくんみたいにならないでよ』って」
「だるいな」

「まじで迷惑。ウチは普通にまだ子ども——」

そこで信号が青に変わった。彼女たちを振り切るように歩き出したヒナの鼓動が、寸前まで立ち止まっていたくせにやけに大きく体内に響く。

今日は嫌な日だ。

そういう日は、ある。何をやってもどこへ行っても上手くいかない日。

ヒナは、そう自分に言い聞かせて落ち着こうとしたが、胸中が荒んでいくのが分かった。それ

はさっき大学で感じたものの比ではなかった。

キョウに、会いたい。

しかし、キョウのバイト先のコンビニに寄っていたら遅刻してしまう。

ヒナは、ぐっと喉元の塊を飲み込んだ。そうしないと、何かを叫びだしてしまいうさだだった。その場に崩れ落ちそうな気がした。

帰りに。帰りに会えるはずだ。

そう自分を励ましながら、暮れてきた秋の空気を大きく吸うと、鼻に染みだした。夏とは段違いに早くなった夜の訪れだけを支えにして、ヒナは無理矢理バイト先に向かった。

……で、こんなに頑張ったのに、なんでいないわけ。

ほぼ八つ当たりだ。分かっているながらも、ヒナはそう思わずにはいられなかった。

その日は、キョウに会わない帰り道だった。毎日約束しているわけじゃないが、それでもかなりの稀な日だ。偶然今日だった。

数十分前。珍しく少し早くバイトをあがったヒナは、キョウの働くコンビニまで走った。珍しく、ヒナがキョウを待つんじゃないか、なんてちょっと楽しみですらあった。

だが、そんな思いは空しく、キョウはコンビニにはいなかった。

「フジミヤくんなら、今日は早めに出勤したんで、早く帰ったっばいよ」
何度か顔を合わせたことのあるキョウの先輩が、気意そうに教えてくれた。そのままコンビニ

を出るのもなんだか気まずいので、ヒナはホットのレモンティーを一本買った。本当は、ミルクティーのほうが好きだったが、なぜかそれだけ入荷されていなかった。

もう朝晩はかなり冷える。冷たくなった空気に、甘いキンモクセイの香りが含まれなくなってしばらく経つ。

ヒナはいつもより弱々しい足取りで、帰路についていた。キョウはもう寝てしまったのだろうか。もし起きているなら、顔だけでも見たい。いつもなら、そのまま散歩に行ったりするし、その流れのほうが嬉しいが、正直今のヒナに散歩をする元気があるかと言われると、ない。

家が近くなってきて、彼の部屋のカーテンの隙間から光がこぼれていないかと顔を上げたとき、見覚えのあるでこぼこの二つの影が、ヒナの部屋のドアの前に立っていた。

背中から心臓に向けて、穴を開けられたような気分になった。このまま、帰ってきた道に戻りたくなかったし、実際、本当に後ずさりしかけたが、あちらもヒナの姿を見つけてしまったようで、明らかにこちらを凝視している。覚悟を決めるしかなかった。

今日は、もう、なんて最悪な日だろう。

息をすることに集中しながら、ヒナはアパートの階段を、ゆっくり上っていった。

「……おかえり」

影だった二人が、人間となって対面したとき、そう言ってくれたのは、背の高いほうだった。哀れむような、心配そうな、声と目。

あんなに会いたいと思っていたキョウに、今はもう早く消えてほしいなんて、勝手なことを思っ

た。

でも、だって、ヒナが会いたかったのは、こんなキョウじゃない。

そしてそれとは反対に、キョウの隣に立っている女性は、苦々しくヒナを睨んだ。

「こんな時間まで、何してたの」

最後に会ったのは、もう一年以上前になる。しかし、その物言いも視線の鋭さも、何もかも変わっていないかった。ヒナはこの一言だけでうんざりして、目も合わせずに答えた。

「バイト。母さんこそ何してるの」

「あんたがぜんぜん帰省しないから来たの。昼は学校だからいないだろうと思って夜に来たのに、あんたがいらないから、フジミヤさんがずっと付き添ってくれていたのよ」

「家の中で待ってもらえればよかったんだけど、お母さんがどうしても外で待たれるって仰って……」

キョウの歯切れが悪かったが、ヒナは彼のことはどうでもよかった。母なら人様の家に上がり込んで待つなんてことはしないことは、簡単に予想できたし、冷える夜に一緒に待っていてくれたキョウに対して言うことはない。

ヒナを苛つかせたのは母だった。

来たんでしょって、なに。あんたがいらないからって、なに。ヒナに連絡一つよこさずに、突発的に押しつけてきたのは母のほうだ。ヒナにはヒナの予定があるのに、なんでそれを無視して、そのくせ思いやったかのような口ぶりでヒナを責めるのか。なぜヒナが罪悪感を抱かなければな

らないのか。

母を無視して家に入り、鍵をかけたくなかったが、さすがに深夜に母を放り出すわけにもいかない。近くに泊まれるような場所もない。

「……早く入って。キョウも、ありがとう、またね」

仏頂面で母を家に入れ、ヒナもそのまま入ろうとしたが、その直前にキョウがヒナの手をそっと掴んだ。

「大丈夫？」

キョウが心からヒナのことを心配してくれているのは、分かっていた。だけど、夕方から重ねて荒んだ心は、その心配に応えられるほど余裕がなかった。

なんで、またねって、言ってくれないの？ いつも通りにしてよ。

「大丈夫」

笑って答えたつもりだったが、その言葉は、ヒナが思った以上に冷たかった。その冷たさに怯んだように、キョウが手を離れた。

初めて、またねと言い合わない夜だった。

母は変わらず母で、去年の正月から今年の盆まで帰らなかったヒナを責めた。

散らかったヒナの部屋を勝手に掃除しながら、よくもまあそんなに口が回るものだと感心する

ほど、母の小言は止まらなかつた。最後にちゃんと帰省したのは二年前の正月だから、溜まっていたのだろう。はいはいと適当に返事をしていると、母がヒナの逆鱗に触れた。

「あんたこの先どうするの。いつまでも子どもじゃいられないのよ」

母と過ごした数日間、その一言だけはやけにはっきり耳に残った。

無視したヒナに、母は大げさなため息をついた。

深夜帯のバイトを咎めるほどに、ヒナのことを子ども扱いする母は、都合良く大人になれと説いてくる。それはもう、母だけではなく、これまでたくさん大人の大人がヒナにしてきた扱いで、ヒナはそれが嫌で仕方なかつた。誰がなんと言おうと、ヒナはまだ子どもなのに。

母は週明けに帰った。駅まで見送ったヒナは、ようやく生きた心地がして大きなため息をついた。その息が、若干白く染まったことに気づく。冬が近づいていることを自覚した途端に、寒さを感じて、ヒナはジャケットのボタンを閉めた。

肩を縮めて歩くヒナの後ろから、弾けるような笑い声が近づいてきて、あっという間にヒナを追い越していった。顔を赤くして笑う小学生たちの背中に、いつかの記憶が重なって、ヒナは目を細めた。同じ区分にいるはずなのに、彼らの姿は眩しくて、ヒナの理想にすら思えた。

*

ヒナは、子どもだ。

いつかの日、法が改正され、成人年齢が下げられた。しかし、それとは裏腹に、一生のうちで思春期と呼ばれる期間は、昔に比べはるかに長くなっていることが発見されていた。そのことに加え、子どもから大人になる決断をする権利は、その人自身にあるべきだという声が大きくなった。だから政府は一つの法律を定めた。

通称・ネバーランド法。大人になるか、子どものままでいるかを、十八歳を過ぎたすべての人に与えられる権利。

当初は大人になることを拒む子どもが多くなり、社会が崩壊するのではないかと批判と懸念が集まったが、子どもたちは案外すんなり大人になることを選択した。十八歳になるその日や、高校在学中に決断する者は少数派だが、大学進学や就職のタイミング。または二十歳になるタイミング。それぞれのタイミングで、しかし誤差といえるほど近い期間に、ほとんどの子どもは大人になった。

ネバーランド法は、子どもで居続けることを許す法律ではない。ただただ、子どもか大人か、その選択のみを子どもに与える法律だ。それに伴うものは、すべてコントロールされている。子どものままだと飲酒も喫煙も禁止だし、家も借りることができず、もちろん就職もできない。かといって、年齢によって区別されるもの——たとえば事件の犯人の実名報道など——は、大人が大人か子どもに関わらず、適用される。飲酒も喫煙も本来なら年齢によって区分されるべきなのだが、そうしなくとも批判は少なかった。それらは、大人になった者が許されるべきだろうとの意見が圧倒的だった。

さらに、二十歳を超えて子どもである場合、学生などの特別な身分でなければ、一定の税金は納める必要がある。十八歳を超え、高校を卒業している以上、アルバイトに関しては特に縛りはない。しかし一定のお金を納め続けるにはバイトでは心許ないし、親もそこまでは援助しきれない家庭がほとんどだった。何より、子を一人前の大人にするというのは、親の務めだから、子どもが子どものもままであろうとするなんてとんでもない、という親が大多数だった。

子どもであることのデメリットに加え、大人であることのデメリットを課される。なにより、大人にならない選択をする大人と見なされるべき年齢の人間は、笑いものになる。そんな世界で、今年二十二歳になったヒナは、まだ子どものまま、生きている。

*

大学生にもなれば、多少気まずい日があっても、多少くらいなら、すぐに忘れたふりをしていてもみたくに話す術が使えてしまう。

母が突撃してきた日にはギスギスした（正直荒んでいたのはヒナだけだが）ヒナとキョウも、日常に戻っていた。

あんなに説教されたヒナだったが、今年も年越しに実家に帰る気にはなれずにいた。その話をすると、キョウはマフラーに埋めていた口元を、わざわざ出してこう言った。

「俺も今年も帰らないし、二人で年越し？俺はバイトかもしれないから、みんなより一時間く

らい遅れて年越しになるけど」

「その話乗った」

ということ、今年は二人で年を越した。

ヒナ自身はともかく、キョウが帰らないのは珍しいなと思いつつながら、カップ蕎麦をすすった。キョウは蕎麦が嫌いだから、年越しうどんを食べていた。デザートに、キョウがバイト先で買ってきてくれたアイスを二つ食べた。

コンビニで働くキョウとは違い、ヒナが働く居酒屋は、仕入れ先の関係で二十九日から七日まで休みだった。美玲も旅行に行ってしまったので、ただならぬしかやることがなかったヒナを、夜の散歩にキョウが迎えにくるのが、ここ数日のルーティンになっていた。まだバイトを始める前の、一年生の頃に戻ったようで、ヒナはくすぐったくて仕方なかった。でも、二人の関係は、何も変わらない。

「ごめん、ヒナ」

変わらない。変わらないと、ヒナが思い込んでいただけかもしれない。後から思い返してみれば、キョウはずっと様子がおかしかった。おかしかったと、あとから思い出せば違和感はいくらでもあるのに、なぜその時に、言葉にして彼に聞くことができなかつたのか。

ぴんと張った冬の空に、やけに綺麗な月が出ている夜だった。

「俺、大人になる」

すり潰すように、彼がそう言った。四年生への進級についてのメールがきていて、その話題をヒナが振った。

留年、するなら、どの授業、落とす？

用意していた言葉たちが、ヒナのお腹に落ちていく。代わりに、勝手に口から出たのは、
「なんで」

だった。毅然としたかったのに、その声はあまりにも弱々しくて、ヒナは我ながら吐き気がした。

「好きな人が、できた」

キョウが答えた。

身体に風船を詰め込まれて、一気に膨らまされたように苦しかった。

なぜ大人にならないのかと、キョウに以前聞いたことがある。キョウは少し考えて、淡々と答えた。

「理由がない。だから、今のままでいい」

普段とは違い、繁華街の近くを歩いていた。酔っ払いが道ばたに座り込み、派手な露出をした女の人と、襟足が長い男の人が、物陰に消えていった。ヒナはキョウの言葉の続きを待ったが、キョウはそれ以上続けなかった。

「理由がないから、みんな大人になるんじゃないの？」

仕方なくヒナが踏み込むと、キョウはさっきより長い時間考えていた。

「大人になる理由はない、けど今は、ヒナと同じでいられるから、子どもでいる理由があるかな」
そう言って恥ずかしくなったのか、彼は目を伏せて笑った。

「……そっか」

暗に、仲間だと言われたようで、ヒナは喜びと共に安堵した。キョウだけは理解してくれる。子どものままで、息をしても許される。

学部が違うから、昼間にキョウと行動することはほとんどない。しかし、夜だけは。くすぐったさを感じるほど優しい夜に、ずっととどまっていたかった。

だから、こんな夜は、想定もしていなかった。

「その人の側にいたい。世間から、俺とその人が対等って認めてもらうために、大人になる」

初めて見る表情だった。この数年で、キョウのどんな顔も、ヒナは見てきたはずなのに。まるで知らない人のようにだった。

今この季節の夜明けみたいな顔。そこに、いつもヒナの言うことを肯定してくれたキョウはいなかった。

「だから、就活もちゃんと始めようと思う。大人になって、卒業する」

かつて、理由がないから大人にならないと言ったキョウが、その理由を見つけてしまったのだと、ヒナは悟る。そして、叫びたくなるほどの事実絶望した。

ヒナは、その理由に負けたのだと。

「……」

仲間だと思っていたのは、ヒナだけだったのだと。

絞りだそうとした言葉は、どれも汚くて、醜くかった。その中で一番マシなものを選んだ。今まで誰よりも近くにいた彼が、とんでもなく遠く思えた。そんな遠い彼に、ヒナは呟いた。

「勝手にしなよ」

キョウが、傷ついた顔をした。

そんな顔をしていいのは、ヒナだけなのに。

「大人になって、その人に好かれて、つまらない大人になれば？」

傷ついた顔をされて、ヒナの心はいっぱいいっぱいだった。

こんなことが言いたいんじゃない。でも、今言ったことも嘘じゃない。

「ヒナは、ずっと子どものままでいるつもり？」

ヒナが、ここまで突き放してくると思っていなかったのか、キョウの声も固かった。

「そうだよ。大人になんか、なりたくない」

愚問だ。

ヒナの答えを聞いて、キョウが唇を歪ませ、微かに笑ったように見えた。

「そんなこと、できるわけないだろ」

冷たい空気に、静かな怒りが滲んでいく。どんどん広がっていく。

「ずっと子どもでなんて、いられるわけない」

大嫌いな現実を、彼が見せてくる。

「分かっているだろ。こんなことずっとは続けられない。大学はもう卒業しなきゃいけないし、大人にならなきゃ住むところも決められない。バイトだって身体を壊したら続けられない。もし健康でいられても、もっと年を取ったら、」

「分かっているよ！」

キョウの声を遮って、ヒナは叫んだ。

熱くなった喉から、込み上げてきた言葉たちが飛び出ていく。もう、止まらない。

「分かっている、分かっているよ！」

ヒナは、思いつく限りの単語を、キョウにぶつけた。キョウが言い返す隙もないくらい、ぶつけ続けた。震えて湿っているくせに凶暴な形をした言葉たちは、つかえつかえだから、ちゃんと彼に意味を成して届いているのか分からない。

冷えた頬が熱く濡れるのを感じながら、ヒナは息を吸った。

「分かっているの分かっているくせに、あなたが、わたしの今を否定しないでよ！」

それを知っているくせに、分かってくれているはずなのに、キョウはなぜヒナを傷つけようとするのか。この十数分間に、どれだけヒナを絶望させれば気が済むのか。

膝から崩れ落ちそうだった。ぎりぎりの理性で立っていられる自分のことを、ヒナは滑稽に思った。

キョウも泣いている気がした。だけど、涙でもう見えない。

彼はもう何も言わなかった。ヒナも、もう何も言えなかった。そこからどうやって家に帰ったのか、ヒナは覚えていない。ただ、その日から、ヒナにとっての夜は訪れなくなった。

*

ヒナはなぜ大人にならないのか。その理由は単純で、ただ、大人になることが怖かった。ヒナには小さなきっかけが積もっている。小さな理不尽。些細な違和感。それらが、ヒナにとっては大人を軽蔑する大きな理由になっていた。

子どもだから。そんな理由で鼻唄がバレないと思っていたあの人も、意見を聞かなくてもいいとバカにしていたあの人も、都合良く大人と子どもの理想を説いてきたあの人も。みんなかつては子どもだったのに、なぜそれを忘れてしまうの。

子どもは子どもなりに必死に生きて、考えて、それを知っている方法だけで伝えようとしているのに、なぜ覚えていないの。

ヒナには分からなかった。分からないままでよかった。だって、自分が大人になったら、この疑問も違和感も理不尽も、すべて受け入れてしまう。ヒナはそんなに特別な人間でも強い人間でもない。次は自分が子どもを軽んじる側になってしまう。考えるだけで、耐えられなかった。

一つ年下の同級生たちは、それでも、ヒナより先に大人になったようだった。盛んに飲み会の

話をしている彼らの輪に、ヒナは混ざったことがない。誘われたことは、ある。でもヒナはもちろんお酒が飲めないし、こんなに簡単に声がかかるほど、相手が子どもか大人かを気にしないという、その事実には圧倒された。ヒナは彼らにとっては『大人』として見られる存在だった。浪人のことは打ち明けていなかったから、年齢は関係ない。大学に通っているⅡ大人。二十歳を過ぎているⅡ大人。大学を卒業して就職をするタイミングで大人になる人もたまにいますが、就活の時点で大人でなければ企業から信頼されないため、よほど強い意志や目的を持っていないと、子どもでもあり続けることはハンデになる。

ネバーランド法ができて、社会は変わらない。よくドリンクを奢ってくれる常連さんも、ヒナが『大人』だと当たり前前思っている。ネットでは大人にならない人間を晒し上げて叩くという流れも起きた。今は規制されたが、しかし、何か社会で問題が起きたとき、その問題の中心人物が、本来は大人と見なされるべき年齢の子どもだったら、いっせいに叩かれる。

大人でないことは、おかしいこと。そう、ヒナは学んだ。その日からヒナは、朝がくるのが怖い。夜しか呼吸ができない。

ヒナの顔つきは、ヒナの意思に反していつのまにか大人になっている。高校のときの制服は、きっとまだ着られるだろうけど、それでもきっと違和感がある。体格はほぼ変わっていないけれど、そういう問題じゃないのだ。どこか年相応に見えない不自然さが、もうヒナには存在している。纏っている空気が、高校生の時の、子どもと見なされる時代のそれとは別物なのだ。

大人になったみんなに、子どものままの自分はどうか映っているのか。考えるだけで叫び出した

くなるような恐怖が胸の底からあふれて止まらなかつた。だから、大人のふりをした。子どもに見えないように、大人に見えるように。大人になりたくないのに、大人を演じることがストレスで、日中は極力外出を避けた。学校はギリギリ行っているが、世間一般で見たらかなり劣等生だ。留年、しようかな。

学生である限りは、大人にならなくても、納税の義務は発生しない。学費を自分で出せば、金銭的な面では親に迷惑はかけない。文句は言わせない。計画的に留年でできれば、まだ、夜だけでも子どものままでいられる——そう思った日から、ヒナは深夜帯のバイトを始め、できる限りお金を貯めている。

キョウはヒナと同じく、恐らく学年で唯一の子どもだった。

二人で、大学八年生になるまで残ってやろうか。いたずらっぽく笑ったキョウに、ヒナも笑い返した。キョウが冗談で言っていることは分かっていたけど、でも、そんな夢が、現実になってしまえばいいと思っていた。キョウとなら、本当にそうなくても乗り越えられる気がした。無敵だった。

——ずっと変わらないものを本気で願ってしまえる気持ちも、大人になったら忘れてしまうのだろうか。

*

夜が世界からなくなった日から、ヒナは自分がどんな日常を送ったのか、あまり覚えていない。春がきて、四年生になったヒナは、周りが就活や卒論に勤しんでいるのを、画面の向こうの出来事を眺めるように感じていた。ゼミの先生が優しい人で、すべてにおいて遅れをとっているヒナをサポートしてくれ、実際にはヒナもなんとか卒論や授業に取り組んでいたのだが、それらをこなす自分すら他人を見つめている気分だった。

唯一の味方を失ったことで、それまでヒナの中にあっただはずの芯が、溶けてなくなってしまうていた。適当に単位を落とせば留年が確定するのだが、それを選択することすら億劫だった。元より、一人ぼっちで大学に残り続けられるほど、ヒナは強くない。

キョウには、あの日から会っていない。ヒナは特に意識せずに生活していたが、キョウが気を遣っているのか、隣の部屋に住んでいるはずなのにすれ違うこともない。

機械的に学校とバイトを往復する毎日。夜を歩くことが好きだったことも、忘れてしまっていた。だって、特別でもなんでもないから。

そんなある日、ふと思立って、ヒナは美玲に電話をかけた。

「もしもし」

バイト終わりの丑三つ時。その意味は、今でも分からない。

ヒナとは違い、社会人一年目の美玲はもう寝ているかと思ったが、想像していたよりもはっきりした声で、美玲はそう言った。

「もしもし、ごめんね、こんな時間に」

「いいよ、まだ寝てなかったし。どうしたの？」

「うん、あのさ」

いつの間にか、秋になるうとしていた。夏休みなんてあったっけと首を傾げるくらい、本当に時間の感覚がなく、キョウと決別した夜から今日まで飛ばされたような気さえ、ヒナはしていた。星はなく、中途半端な形の月だけ、夜空に穴を空けていた。童謡に出てきていない虫の音がする。

「大人になって、よかったと思う？」

ヒナの問いかけに、美玲はしばらく黙っていた。そして、いつもとは別人のように、ゆっくりと答えた。美玲のくせに、効果音が付かない声色だった。

「よかった、ってはっきり言えないけど。でも、後悔するほど悪くはないかな」

「……そっか」

きっと、美玲の答えはとてつもなく綺麗なものなのだろうと、思う。

でも、ヒナには、魅力的には感じられなかった。

大人になったから言えること。大人だから分かっていること。

子どものヒナには分からない。分からないままで、いたい。

よくキョウと落ち合っていた交差点が見えてきて、ヒナは少し立ち止まった。大人になったはずのキョウは、もちろん今日いるはずもなく。

美玲にお礼を言って電話を切った。美玲はヒナを心配していくつかの言葉をくれたが、正直ヒナは聞いていなかった。

隣の部屋の電気は、もう消えていた。

*

大人になってどうすればいいの。

やりたいこともない。あるとすれば、ずっと子どもでいたい。

このヒナの思いを、きくと大人は笑う。なにを大層なことを、とバカにする。

ヒナも、大人になってしまえば、子どものときの自分をバカにするのだろう。なんてちっぽけなことか悩んでいたのだろうと。そうなるほうが今よりずっと楽だ。

でも、それだけは嫌だ。

ぜんぶ、生々しいまま覚えていたい。

忘れたくない。どうしようもない気持ちを抱えたことを、仕方のないことだったと笑えるようになりたくない。

苦しい。

*

珍しく、お客さんが少ない夜だった。

「……君は、大学生かな」

カウンター席に座った初老の男性が、ヒナに声をかけてきた。

「そうです」

何回か店に来てくれている方だった。ヒナの働く店は賑わうことが多いが、そこまで店が大きいわけでもないため、数回来てくれた人は嫌でも記憶に残る。この方はいつも物腰が柔らかく、注文も会計も丁寧な人だった。

……以前、ヒナにドリンクをよく奢ってくれた人は、元気にしているだろうか。

「進路なんかは、決まっているのかな」

男性が、少し嘸みながら問いかけた。ヒナは首を振った。痛いところを突かれて居心地が悪く、その場を立ち去ろうとしたとき、いつも通り柔らかな話し方で、男性は言った。

「……君を見かけるたびに感じていたのだが、君は、なんだか輪郭がぼんやりしているね」

地面から離れかけていた右足が、急に重くなった。息を呑んで彼を見ると、男性は微笑みながら手を組み、ヒナを見つめていた。その穏やかな眼差しが、ヒナのすべてを見透かしているかのようだった。

ふふっ、と笑った男性は、ヒナから視線を外して、ヒナが用意したおちょこに日本酒を注ぎ、それを舐めた。恐らく三合目だ。

「どうして、そう思われたんですか」

ヒナの声は、自分の意思とは反して、少し震えていた。

もうどうでもよかった。子どもでいようとする努力も、大人になるための勇気も、ヒナにはない。どうすればいいのかわからない。どこまでいっても中途半端なまま。

男性は、満足げに息をついて、またヒナに視線を向けた。しかし、もう酔っ払ってしまっているのか、ただ

「何も分かっていないよ」

と、嘯み合わない返事をして、下手くそなウインクをして見せた。

普段のヒナなら苛立っただろう。しかし、その容姿にそぐわないお茶目な仕草に目を奪われ、ヒナは思わず笑ってしまった。頬の筋肉が痙攣していた。

ヒナも、何も分からない。

*

風の噂で、ヒナはキョウの内定が決まったことを知った。

かなり遅れての就活スタートだったろうに、すごいなと思った。そんな小学生みたいな感想しか出てこなかった。キョウは、子どもであっても、昼に呼吸ができる人だった。そもそも、ヒナと違う人間だった。

ちらほらと、学校でお祝いされる人たちを目にするようになった。一年前にはしゃいでいた女子たちの姿が目には焼き付いたまま離れない。あの時祝っていた側だった同級生も、きっと就職を決めたのだろう。

もうヒナは泣かなかった。嫌な動悸に襲われることもなく、ただ空しかった。あの日から、一歩も動けていないヒナは、すれ違う人からどう思われているのだろうか。

*

夜十時頃。幸か不幸か、卒業が決まったヒナが、引越準備を進めていた夜だった。引越すから、最後に話したい。

唐突にヒナの部屋を訪ねてきたキョウが、そう言った。

段ボールでいっぱいの子部屋を見て、キョウが呟いた。

「卒業、するんだ」

ヒナはそれには答えず、コートだけ部屋着の上から着て靴を履いた。

寒い日だった。一年ぶりに隣を歩く彼を窺うと、少し長かった襟足が短くなっていることが分かった。コートの下に着ているセーターは、ヒナの知らないものだった。

寒すぎるせいか、まだ十時なのに人がなく、耳鳴りが聞こえそうほど静かだった。

寒いね。寒い。そう言い合って、また黙った。暑いときは暑いと何回でも言いたくなるのに、寒いときは一回だけでいいのはなぜだろう。

十字路にさしかかり、ちょうど車がヒナたちの前を横切っていった。それが合図にして、キョウが白い息を吐き出した。

「就職、決まった」

「うん」

「卒業も、決まった」

「うん」

「バイトはちょっと前に辞めた」

「うん」

「大人に、なった」

「……うん」

川沿いにさしかかり、キョウが足を止めた。ヒナもそれに倣う。

この辺を歩くのは久しぶりだった。前は切れていた街灯の明かりが、いつの間にか交換されていて、キョウの顔がよく見えた。

裏切られたという思いは、もうヒナの中から無くなっていった。許したわけじゃないけど、でもそもそも、キョウはヒナから許されなかったことをしたわけじゃない。

ただ、大人になっただけ。ヒナとは違う存在になってしまっただけ。

あの夜に、ここで、すべてが変わってしまっただけ。

「ヒナは、まだ子どもなの？」

「そうだよ」

卒業は決まったけれど、ヒナはまだ子どもだった。四月から税金が発生するが、元々留年するために貯金していたので、恐らくしばらくは困らない。

部屋は借りることができないので、実家に帰ることになっている。そのことについて、母は何も言わなかったけれど、ずっと渋い顔をしていた。母とまた暮らすことは憂鬱だったが、それでも大人になることを選択できない。バイトで生活費を入れることになるだろう。

「なんで」

キョウが、真剣な眼差しをヒナに向けた。それとは反対に、ヒナは口元を歪ませた。

愚問だと、前にも思った気がする。

「大人になりたくないから」

「なんで」

「ずっと前に話したでしょ。それから何も変わってない」

「……そっか」

そこから、またしばらく、無言だった。

キョウが言葉を探している気がしたし、ただ黙っていたいからそうしているような気もした。

ヒナは後者だ。

大人になってしまった彼に、子どもであるヒナが何を言っても届かない。だから言いたいことがないのか、言いたいことがあるけど諦めてしまっているのか、自分の気持ちなのに、ヒナにはその前後関係が分からなかった。だから、黙って俯いていた。

どれくらい黙っていたのか。冬の長い夜は、表情一つ変えず、ただ夜のままだった。

「——ひなた」

口元を埋めたコートの内側が湿ってきた頃。何かを振り切るように、彼が名前を呼んだ。

その声で下の名前をちゃんと呼ばれることなんて、記憶になかったヒナは、反射的に顔を上げた。

「ごめん」

キョウは、情けなさを全面に出しながら、笑っていた。

「ごめん。話したいこと、たくさんあったのに、ごめんしか出てこないや。謝ってほしいわけじゃないの分かってるけど、ごめん」

「……」

「ぜんぜん、まとまってるけど、聞いてほしいことがある。この立場で言うことなんてぜんぶ嘘で、腐っているように聞こえるかもしれない。それでも聞いてほしいんだ」

笑っているくせに、彼の声はどこか湿っていた。

鼻をすんと鳴らして、彼が言う。

「大人になったからって、俺は俺だった。本当に何も変わらなかった。世界が変わるような劇的な何かなんて起きてないし、信じられないくらい昨日も今日も、きっと明日も、笑えるくらい俺のまま」

ヒナはなおも黙っていた。彼が急に何を言い出したのか分からなかった。

しかし、何も言わないヒナの目を真っ直ぐに見て、彼は続けた。信じられないだろうけど、と前置きして。

「ひなたが知ってる、子どもだった藤宮響が、ずっと地続きで、今の大人の藤宮響になってる」そこに立っているのは、ヒナの知らない藤宮響だった。

でも、その目の優しさは、ヒナの知っているキョウだった。

「大人になるとき、怖かった。でも変わらなかった」

あの日よりも、ずっと寒い今日は、でもあの日より穏やかだった。

「考え方とか、感じ方とか、それは変化してしまうだろうけど、でも、それは、どうせ子どものままでもそうなっちゃうんだ。生きてる限り、そうなる。子どもの自分が消えちゃうとかじゃなくて、無かったものになるとかでもなくて、」

ゆっくり、どこか自分に言い聞かせるように話していた響が、そこで言葉を区切った。

「俺が、覚えるから」

まっしろな靄が、一拍無音で空気に溶ける。

それは明らかに、ヒナに向けられた言葉だった。

大切な宝物を差し出すように。とっておきのプレゼントを渡すように。

ようやくヒナは、響の顔をきちんと見た。誰よりも近くて遠い人は、しかし変わらない笑顔のままだった。

「ヒナもきっと変わらない。でも、いつかヒナが変化してしまっても、俺が、覚えてるから」

いつの間にか涙ぐんでいたヒナの目元を、響が拭った。ずっと隣にいた、キョウの匂いがした。ここまで言葉を尽くされても、ヒナは大人になることに対して絶望しかない。

自分が変わらずにいられる自信がない。子どもの自分を、いつかの大人になった自分が否定してしまうことが怖い。

でも、キョウは、そんなヒナを覚えていると言う。変わってしまう前のキョウを、確かにヒナも覚えている。

ヒナと呼ぶ声も、ここまでできて大人になれと言わない性格も、一年くらい隣にいなかったのに、ここまで歩くのに合わせてくれていた歩幅も。

ヒナはただ泣いた。分からないことばかりだった。

キョウはそれ以上もう何も言わなかった。

日付が変わり、今日が昨日になっても隣にいてくれた。

寒いね、とどちらかが呟いて、寒いね、とどちらかが返した。また明日はもう来ない。

自由な夜が、終わっていく。

二人はどうしようもなく子どもで、大人だった。

*

空っぽの部屋。空が夜から朝へ変わる頃。ほとんど光が入っていない中で、ヒナは一枚の紙を手にしていた。

十八歳を超えた子どもに、毎年春に送られてくる紙。市役所に行けばいつでも手に入るのだが、それを忘れたふりをしている子どもたちに送られてくる紙。

大人になるかどうかの決断を迫る文言が、ずらりと並ぶなかで、名前欄だけが空白のそれをぼんやりと眺めていたヒナは、ふと、窓に向かって、右手をかざしてみた。だんだん淡くなっていく空が、透ける光を放っている。

伸ばした手は、まだ夜に沈んだままのこの部屋より黒々としていて、それがやけに綺麗に見えた。手として理想的な形に思えた。

でも、これは今だけだ。

光が満ちる時間になれば、大したことはない。

夜に留まる自分が、一番綺麗なだけ。

そういう、ものだ。

ひなたは、手を下ろして、部屋の奥のほうに視線を移した。

大学の通学のときに使っていた鞆。最低限の荷物だけ入れているが、たぶん筆記用具も入って

いるはずだ。横には、今日の朝に出しに行く予定のゴミ袋が二つ。ゴミ出し解禁の時間まで、まもなくだ。

のろのろと、はいはいをするようにそちらに近づいていった。そして、ヒナは、紙を握りしめて、震える手で、『それ』に手を伸ばした。

(文学部総合人間学科三年)

ロストティーン

吉野 美羽

二十歳になるからと言って、目に見えて何が変わるわけでもない。確かに酒も飲めるようになるし、するつもりはないけれど煙草もギャンブルも許されるようになって、できることの幅は増えるかもしれない。だけどそれによって何が変わるわけでもない。年齢を重ねたとして僕という人間は全くそのままで、急に何かのスイッチがカチリと入ったみたいに中身がそっくり入れ替わりはしない。それは十六歳の時も十七歳の時も十八歳の時も十九歳の時も一緒。何か変わったような気がするのは誕生日当日の一日だけだ。誕生日が終わってしまえば、何がその前と変わったのだろうと思うような日々が続いていくだけ。二十歳の誕生日だって同じように過ぎていくのだと思っていた。思っていたのだけれど、彼はそう思っていなかったらしい。

景は瞳がこぼれ落ちそうなくらい目を見開いて、僕の方を振り返った。

「今お前、何て言った？」

彼の反応が予想外で、僕までつられて目を見開いてしまう。

「え、いや。別に誕生日特に何もしなくていいよって言った」

「何だよ！」

いきなり大声を上げられてたじろぐ。

「え？」

「二十歳の誕生日だろ、めちゃくちゃ祝おうぜ！」

勢いよく身を乗り出して叫ぶ彼に、ひとまず落ち着けと手で制す。大学の近くの通りには学生を含む通行人が僕たちの他にもちらほらと居て、景の大声に何事だと窺うようにこちらを見ていた。彼もその視線に気づいて慌てて口を抑える。

「でも、何もしなくていいはないだろ。何か行きたい所とか、欲しいものとか。食べたいやつとか、無いの？」

声のボリュームをぐっと落として囁いてくる彼の言葉に、少し考えてみる。行きたい場所。欲しいもの。食べたいもの。すぐには何も思いつかなかった。

「……ないかも」

「まじかよ」

景は困ったように笑いながらこめかみの辺りを指で搔いた。それは小学生の頃から変わらない彼の癖だった。

「まあでも、そうだよな。お前って欲が少ないって言うか……。昔から、これ欲しいとか、あれしたいとか、あんまり言わなかったもんな」

「まあ、そうだね」

「そういや去年何あげたっけ。……あ、本か」

「うん、僕の好きな作家の新刊くれたよね」

「うわー、どうしょっかな今年」

景は唸り声を出して考え込んでしまった。

彼と僕は小学校の頃からの幼馴染で、何の縁か中学校も高校も大学も同じところに通っている。彼は僕とは違って明るく、社交的で、誰にだって優しくしてしまうような人間で、友人だってかなり多いはずなのに何故だか彼はほとんど僕と一緒に過ごしていた。大学二年生になっても僕らは変わらずに肩を並べて歩いている。学部はそれぞれ違うけれど、タイミングが合えば僕らは連絡を取り合って一緒に歩いて大学から帰っていた。

何度歩いたかも分からない道を歩きながら、頬に風が当たるのを感じる。その風はほとんど熱を持っていなくて、頬が次第に冷たくなっていく。あんなに僕らに汗をかかせた夏はいつの間にかどこかへと立ち去ってしまったいて、代わりに長い秋が空気の中を漂っていた。アスファルトの上に散らばっていたカラカラに乾いた落ち葉が踏まれる度に小さくかさついた音を立てる。

「寒いな」

景が小さく鼻をすする。彼は白い半袖のTシャツにジーパンを着込んでいるだけで、そんな格好ならそりゃ寒いだろうなと思った。カーディガンを羽織っている僕とはすごい違いだ。

一度も染めたことのない景の黒髪が風で揺れていた。刈り上げられたうなじの辺りを撫でながら、彼が思い出したように呟く。

「香梨奈、今年は祝いに来るんかな」

「香梨奈？ 来ないんじゃない、忙しいよ多分」

景が風に晒されている腕をさすりながら息をついた。

「そういうや全然会ってないよなあいつと。最後に会ったのいつだ？」

「……高校一年の時に景の誕生日に集まったのが最後かも。次の年は香梨奈が定期試験で忙しいから来れないって言って、その次の年もそんな感じで結局予定合わないまま」

「うわ、四年くらい会ってないんだ信じられん。声かけてみようぜ」

「……来ないと思うけどなあ」

「訊かないと分かんないだらう」

景がスマホを取り出して香梨奈の連絡先を探す。

香梨奈というのは僕らのもう一人の幼馴染だった。僕と景と彼女は家が近いこともあって小学校の時は毎日一緒に居たと言っていていくらい仲が良かった三人組だった。けれど中学卒業後、香梨奈だけが別の高校に進学したことで彼女と会うことはめったに無くなっていった。たまにラインで景が遊びの誘いをしてみても忙しいからと予定が合わないばかりで、最後に直接顔を合わせて話したのはもうかなり前のことだった。

住宅街に入って、僕の住むマンションが見えてきた。景の家はもう少し先に行ったところにあるので、僕らはいつもそのマンションの下で別れる。

「じゃ、明日な」

「うん」

いつものように小さく手を振り合う。景が何か悪だくみするように口角を持ち上げた。

「誕生日、期待しとけよ」

本当に何もなくなっていいのに、と思いつつながら笑ってしまふ。景は一度やると決めたことは曲げないのだ。ずっとそうだった。何を言っても祝ってくれるんだらうな、と小さく頷き返す。

「そう、じゃあ楽しみにしてるよ」

景は僕の返事がお気に召したみたいだった。目を細めて、じゃあな、と言って身を翻して歩いて行く。背の高い彼はどんだん大股で歩いていってすぐに見えなくなった。

来月二十歳になると言われても、全く実感はなかった。もう二十年間この世界で生きてきたのだと思っても、それが短いのか長いのか僕にはよく分からなかった。小学生の時に景や香梨奈とランドセルを揺らしながら走って帰ったことが一昨日くらいのことのように思えたし、大学に入学したのがものすごく昔のことのようにも思えた。二十年という時間は僕の中であちこち伸び縮みして、ぐるぐると渦巻くように流れていた。

二十歳の誕生日だろ、めっちゃくちゃ祝おうぜ、と言った景の声が頭の中で響く。僕にとってはそこまで価値を感じられない日でも、それが大切なものだと思つて祝ってくれる人がいるだけで幸せだと思つた。

来月、彼は何を用意してくれるのだろうか？ 考えても予想できなかったし、彼は僕の予想なんていつも軽々と越えていくのだから想像しても意味のないことだと、考えるのを止めて僕はマン

シヨンの中に入った。

「全然連絡来ないんだけど、香梨奈から」

鮭の切り身を箸でほぐしていると、横からスマホを持った手が伸びてきた。画面を見るとラインのトーク画面が映っていて、『かりなー、久しぶりに三人で会おうぜー』という景のメッセージにも返信が来ていないことが分かった。メッセージは既読にもなっていないかった。

「やっぱり忙しいんだろーね」

「五日間メッセージにも気づかないくらい忙しいことあるか？」

景は不満そうに唇を突き出した。

昼休みの学食は人が多くて、僕は肩を突き合わせるようにしながらテーブルに座って食事をしていた。色んな方向から話し声や食器の擦れる音が飛んできては天井に当たり、部屋いっぱい音に音が降り注ぐようにして響いていた。景は千切りにされたキャベツを箸で掴んで口の中に入れてもぐもぐと細かく口を動かしながら咀嚼する姿は小さな兎みたいに見えた。

「ブロックされてることないよな？ メッセージが届かないようになってるとか」

「まさか」

「俺何かしたかなあ、いや、そもそも会ってないから何もしてないと思うんだけど」

「大丈夫だって、今更景が香梨奈に嫌われるわけじゃないじゃん。ライン自体見てないのかも、ほら、テスト期間だからスマホ触らないようにしてるとか」

「……あいつの大学そんな忙しいんかな」

景がスマホの電源を切ってズボンのポケットに入れる。彼は渋い顔で湯気の立たなくなった味噌汁に手を伸ばした。あからさまに自分が嫌われたんじゃないかと本気で気にしているのが分かって、何だか可哀想になる。僕からも一応連絡しておくか、とスマホを取り出してラインのアプリを開く。知り合いが少ないせいで、香梨奈のアカウントはすぐ見つかった。彼女は僕のよく知らない外国の女性アイドルの写真を自分のアイコンにしていた。『久しぶり。景も連絡してみたんだけど、何年かぶりに三人で会わない?』それだけ彼女に送って、僕はスマホの画面を閉じる。

僕が香梨奈に連絡し終わっても、景はまだ口をつぐんでいた。口数の多い彼が黙ると、周りの音がやけに大きくなって聞こえてくる。絶え間なく他の人の話し声は聞こえて来るのに、彼らが何を話しているのかは聞き取れなかった。日本語を話しているはずなのに、その言葉の羅列は音節で区切ることができなくて、頭の中をただろ過されるように通り過ぎていくだけだった。茶碗に残っていた米の一粒を箸で摘み上げて飲み込んでから、景に話しかける。

「で、僕の誕生日に何をしてくれるかは思いついたの?」

僕の言葉に、景は勢いよく顔を上げた。その言葉を待って、とでもいうように、彼はさっきまでの落ち込み方が嘘だと思ってくらいの笑顔を浮かべた。

「よく聞いてくれた、お前が絶対喜ぶやつ用意してる!」

「おお、そうなんだ」

「ちょっと待てよ、……ほら、これ」

「ん？何これ」

景から手渡されたのは、折りたたまれた小さめの白いカードだった。つるつるとした手触りがして、いい紙だというのが分かる。カードの表面には景の文字で『HAPPY BIRTHDAY』と書かれていた。綴り間違えてる。BIRTHDAYなのに。景は英語が壊滅的に苦手だから仕方ないとはいっても、去年も同じような間違いをしていた気がする。学習していかない。

「今日まだ誕生日じゃないけど？」

「分かっているよ、とりあえず開けてみて」

景の言葉に従ってカードを開いてみる。そこには同じように景の角張った文字でいくつかの文章が簡条書きにされていた。いちばん上の行にはこう書いてある。『二十歳になる前に、やり残したこと！』

「……何これ？」

景の方を見ると、彼はいたずらが成功した子供のように満面の笑みを浮かべていた。ふふん、という満足げな声まで聞こえてきそうだった。

『今年のバースデープランはちょっと大がかりなんだよな。誕生日までに、そこに書いてある『やり残したこと』をコンプリートして、思い残すことなくお前に二十歳になってもらう！どうよ？』

「あ、なるほど。僕が十代でやり残してそんなこと、このカードにリストアップしてくれたんだ？」

「そういうこと。もちろん誕生日当日にはちゃんとしたプレゼント渡すけど、二十歳になる前の期間も楽しんでもらいたいな」と思って」

「このリストも充分すごいプレゼントだと思うけど。ありがとう、まさかこういう形でくるとは思わなかったよ」

「だろ？」

目を細めて嬉しそうにしている景に、本当に人を楽しませようとするのが好きなんだな、と思う。僕の誕生日をどうやって祝おうかあれこれ考えてくれたんだらうと、僕もつられるようにして笑う。

「とりあえず、お前がやり残してそうなこと十個くらい挙げてみた」

「バンジージャンプをする、ジェットコースターに乗る……。え、絶対嫌なんだけど。僕が絶叫系嫌いだって知ってるじゃん」

「何言ってんだ、通過儀礼だろ二十歳になるための！」

「やり残したというか、むしろ積極的に避けてきたことなだけだな」

まあそれは冗談で書いたやつだから、と景が笑う。他にもそのリストの中には、海に行く、美味いハンバーグを食べる、小学生の頃にしていたゲームをプレイしてみる、などといったようなことが書かれていた。

「ハンバーグは景の好物じゃない？」

「お前だって好きだろ！」

「まあ好きだけど……」

リストに目を通していると、一つだけ意味の分からない項目があった。

「景、これ何？ 『タイムブックを見つける』って」

「あれ、覚えてない？ 小学生の頃さ、俺とお前と香梨奈でタイムカプセル作ろうってしてたじゃん。で、将来の俺たちに向けて手紙とか書いて、お菓子か何かの箱に入れてさ。それで学校の校庭に埋めようとしたんだけど、グラウンド掘り返すなって先生にめっちゃ怒られて」

「うわ、思い出した。あつたね、そんなこと」

「それでタイムカプセルは諦めたんだけど、代替としてその手紙を図書室の本の中に挟んで、大人になったら取りに来ようって言って、その本のこと『タイムブック』って呼んでたんだよな」

「他の人がぜったい借りないような古い本だったよね、確か」

「学校以外の所に埋めればいい話だったのに、そんな発想全然なかったな」

確かに、と笑う。小学生の頃の僕らには学校と家が世界のほとんどだったから、そこに残すという選択肢以外を考えることができなかったんだろう。

「え、『タイムブック』を見つけるって、小学校の図書館まで行ってこれを探すってこと？ 僕らが手紙挟んだ本を？」

「そう。そろそろ取りに行ってもいいんじゃないかって思ってた」

僕は少し考えて言った。

「いや、もうないんじゃないかな。多分誰かが見つけて回収されてるよ」

「確か図書室のいちばん奥にあった、埃被ってる、外国の文学史とかについての本だったじゃん。タイトルはつきり覚えてないけど、小学生ほとんど読まないだろ」

「生徒じゃなくても、図書室の先生とかは蔵書整理で触ったりするでしょ。それに、そんなに読まれない本だったら処分されてるかも」

景がわずかに眉をひそめる。

「そんなの、行ってみないと分かんないじゃん」

「……まあ、確かに絶対ないとは言いつれないよね、本は」

僕の言葉に、景の唇がゆるく弧を描く。

「だろ？ まあ、なかったとしても久しぶりに小学校凱旋しようぜ。知ってる先生居るかなー」

「凱旋って……。どうだろ、十年以上経ってるからね」

「ごちそうさま、と食事を平らげた景が手を合わせる。僕もそれに倣って手を合わせてから、皿の乗ったトレーを持って立ち上がる。食器を返却口に戻して食堂を出ると、僕のスマホが鳴った。

「お前この後授業だよな？」

「うん、景もでしょ」

景に答えながら画面を開くと、一件のメッセージが届いているという通知が入っていた。そこには僕にメッセージを送って来た人のアイコンも一緒に表示されていた。アプリを開いてメッセージを読む。

「おーい」

「ん？」

「俺あっちの棟だから。じゃあな、寝るなよ！」

「寝ないよ、景じゃないんだから」

声を出して笑いながら、景が手を振って僕とは別の方へ歩いて行く。彼の背中が他の学生たちに混ざってどこに居るのか分からなくなるまでそれを見送ってから、もう一度スマホの画面に視線を落とした。送られてきたメッセージを、もう一度よく読む。

メッセージは香梨奈からだった。

『行かない』

その四文字だけだった。

マンションのエントランスのドアから外に出ると、昨日よりも空気が冷たかった。ニットを着て来て良かった、と身体を震わせながら思う。空には灰色の雲が渦巻いていて、日の光は差ししていなかった。そのせいでどこもかしこもぼんやりと薄暗く見える。雨が降らないといいけど。

待ち合わせ相手は入口のすぐ傍に居た。

「おはよう、景」

「おー、おはよ」

スマホを見ながら突っ立っていた景が顔を上げる。流石に今日は寒かったのか、彼は明るい水色の長袖シャツを羽織っていた。よく見ると、後頭部の辺りの髪が一束うねったように立ち上がっ

ている。

「景、寝癖ついてるよ」

「え、まじ。気づかなかった」

彼が数回髪を雑に撫でつける。それでも頑固な寝癖はそのまま残っていた。

「じゃ行くか」

そう言って歩き出した彼の声には空気がたっぷり混じっていた。

「夜更かししたの？」

「夜更かし? ……あ、やべ、ばれた」

「明日は小学校への凱旋だからたっぷり寝とけよ、って言ったのは景じゃなかった？」

景がこめかみを指で搔く。

「いやー、何か眠れなくて。今日楽しみすぎてさ」

「遠足前じゃないんだから……。ばれるも何も、そんなあくび混じりの声で話されたらすぐ分かるよ。どうせちよっとしか寝てない上にギリギリの時間に起きて髪も整えずに来たんじゃ」

「う、鋭い」

わざとらしく胸を押さえてよろめく彼に、しょうがないなとため息をつく。

「分かるよ、何年一緒に居ると思ってるの」

「お前に嘘ついてバレなかったことほとんどないもんなあ」

小学校へと続く道を歩きながら、景の顔を見上げる。

「今日土曜日だけど、小学校人いるの？」

「あー、何か工事やってるらしくて。その立ち会いか何かで先生も何人か居るから、来ていいよって言った。この前小学校に電話して訊いたんだよ」

「ちゃんとアポ取ってくれたんだ」

「そりゃ取るよ、お前のやり残したことちゃんと全部やってくんだから。まあ俺のやり残したことももあるからなー」

「そんなに色々やってくれちゃうと、景の誕生日を祝うときのハードルがどんどん上がっていくんですが」

「来年の三月、俺が二十歳になる時は期待してるからなー」

荷が重いよ、と肩をすくめる。それを笑いながら見ていた景が、あ、と声を上げる。

「でも俺の誕生日よりも先に香梨奈の誕生日が来るよな。二月だろ、あいつ」

「ああ、そうだね」

景が大きくため息をつく。

「あいつも今日来ればよかったんだけど。未だに既読すらついてないってどういうことだよー」
香梨奈から僕にメッセージが来たことは、景に言っていないかった。言わない方がいいと思ったからだった。彼女が僕の連絡だけに気づいて、景の連絡に気づいていないはずがなかった。あえて景に連絡を返さなかったのだということは分かりきっている。だけどそのことを景に突き付けても彼が傷つくだけだ。

それに、彼女は『行かない』と言ったのだ。『行けない』ではなく。彼女は予定の都合が合わないから僕たちに会えないのではなく、彼女自身の意思で僕たちの所に来ないということを決めているのだ。それが何故なのかは分からない。けれど、理由を言えるのだったらちゃんと説明してくれているはずだった。バイトが忙しいとか、テストがあつて忙しいとかいう理由だったら彼女はそう言うてくれたに違いなかった。けれど、僕の所に送られてきたのはたったの四文字だけだった。理由については話したくない、と彼女はその四文字で語っていた。

「まあ、忙しいんだろうね。……というか、懐かしいなこの道」

「めちゃくちゃ懐かしい。このイチヨウ並木見ただけで泣けてくるんだけど」

僕らが六年間通学路として通っていた道は、あの頃のままほとんど変わっていないかった。歩道と道路の境目に等間隔に植えられたイチヨウの木の葉のそよぎさえ、僕らが小学生の頃と同じように見えた。薄く黄色に染まるその葉っぱを見て、景が顔をしかめる。

「この道、秋になると銀杏の匂いで地獄みたいだったの思い出したわ」

「そうだ。酷かったよね匂い」

「それで、この道通る時いつも三人で息止めて走ってたんだよな。結局息持たずに途中で呼吸して死にそうになってたんだけど」

「僕はそれを見越してずっと帽子で口と鼻覆ってた」

「うわー、やってた!」

変わらないままの風景や木や建物を見ると、それに引っ張られるようにしてどんどん記憶が

溢れ出してくる。一つ一つ確認し合うように、景と僕はこんなこともあった、あんなこともあった、と話し続けた。どうして今まで忘れていたのかと思うほどに、脳味噌のどこにしまっておいたのかも覚えていないような思い出が浮かび上がって僕らの足を止める。歩いては立ち止まり、歩いては立ち止まり、結局本来の目的地である小学校までたどり着くのに予定の何倍も時間をかけてしまった。

校門を通過して小学校の中に入ると、そこは思ったよりずっと静かだった。人の気配もなく、校庭には遊具と地面しかなかった。校庭は驚くほど狭かった。小学生の頃には、グラウンドの端から端までが途方もなく長い距離だと感じていたのに、今では大股で十歩も進まないうちに横断してしまえるんじゃないかと思えるほどに短く見えた。滑り台や鉄棒といった遊具さえ、あの頃の大きさの数分の一に縮んでしまっていた。

景を見ると、彼は校舎の方に目を向けていた。視線の先を辿ると、そこには白いビニールシートで表面をびっしりと覆われた校舎があった。僕らが進んでいた校舎とは似ても似つかない姿に思わず息を呑んだ。とてつもない大怪我をして全身を真っ白な包帯でぐるぐる巻きにされた患者のイメージが僕の頭の中に浮かぶ。風が吹くたびにそのシートの端が小さくめくられて黒ずんだ校舎の壁が見えていた。

「老朽化酷いんだって、この前電話してた時に言ってた」

景は校舎から目を離さなままそう言った。校舎を覆いつくすシートを見ているのか、その奥にある校舎を見ようとしているのか、十年以上前の僕らが進んでいた頃の校舎を思い出そうとし

ているのかは分からなかった。その表情は、彼のものにしては冷たく硬かった。

「全部壊して新しく建て直さなきゃいけないかもしれないって」

がさがたとシートが擦れる音が聞こえる。傷ついた肌を手の平で無遠慮に撫でられて、くぐもつた悲鳴を上げているような音だった。

「……まあ、古いし。いずれはそうなるんじゃないの」

そう言った僕の声に、景は時間をかけてゆっくりと振り返った。風に吹かれて揺れる前髪の向こうで、二つの瞳が僕のことを捉えていた。その強い視線に、息が詰まる。僕は今知らない誰かを目の前にしているのかと錯覚してしまうくらいに、今の彼はこれまでに一度も見なかったことのない表情を浮かべていた。何かを責めて、詰って、答めて、同情して、軽蔑して、怒って、睨むような、泣き出しそうな、その全てであってそのどれでもないような顔だった。

「景」

呼びかけた声は乾燥して喉に引っかかった。

景はもう一度校舎を見て、今度はすぐに振り返った。

「そうだな」

その声色は少し暗かったけれど、ほとんど普段の彼のものと同じだった。

「行こうか」

景はいつものように目を細めて笑った。

景が事前に連絡を入れてくれたおかげで、僕らはすぐに校舎の中に入ることができた。迎え入れてくれた教師の顔にはちっとも見覚えが無く、今ではこの学校は出て行った僕らのものではなく新しく入ってきた人たちのものになっているのだということを強く感じた。軋む廊下を歩いても、誰も居ない教室を眺めても、ひんやりとした空気が漂う階段を登っていても、どこにだって他人の家に上がったような独特の気まづさがあった。

図書室は校舎の二階のいちばん奥にあった。教師はそこに僕らを連れて行くと、帰る時は職員室に寄って声をかけてくれと言って立ち去ってしまった。僕らが蔵書を盗んだりしたらどうするんだと思ったけれど、図書室の本には貸し出しのためのバーコードが付いていたり図書館に入れた時の日付の印鑑がページに押されていたりしたのを思い出す。本を持ち出して売り飛ばそうとしても足がつきまぐるから大丈夫だとあの教師も思ったのだろう。

図書室に入ると、古い紙の匂いがした。教室と同じくらいの広さの部屋に、背の低い棚がいくつか並んでいる。棚のいちばん高い所でさえ僕の肩くらいの高さしかなくて、小学生の小ささに改めて驚かされた。入口のすぐ近くにあって貸し出し用のカウンターのの上に、折り紙で折られたカボチャがいくつか置かれていた。何度か床に落ちたのか、そのカボチャは少しへこんで黒ずんでいる。何でカボチャなんだろう、と違ってその横を見ると、ハロウィンにおすすめの本、というプリントが置かれていた。お化けやモンスターが描かれた絵本や児童向けの小説を紹介しているそれを見て、ハロウィンの季節かと納得する。

「こんな感じだったっけ、図書室」

きよろきよると部屋全体を見渡していた景が不思議そうに首を捻る。

「こんな感じだったよ。あんまり変わってない。景は図書室に来るより外で遊んでる方が多かったから印象薄いのかもね」

ああそっか、と景がパチンと指を鳴らす。

「そりゃ覚えてねーわ。小学生の頃なんかまともに本読んだ記憶ないしな」

「いつもグラウンドで駆け回ってたもんね。僕は懐かしいよ、ここ」

棚に並んでいた青い鳥文庫の背表紙を撫でる。見覚えのあるタイトルばかりだった。小学生の頃から本が好きだった僕にとって、ここは天国みたいな場所だった。遊びたい盛りの小学生たちが多い中で図書室に訪れる生徒はほんのわずかで、騒がしい教室や校庭から離れたこの場所はいつもしんとして別世界みたいだった。ここに通っていた六年の間に、僕はほとんど全部の本を読みつくしてしまっただんじやないかと思う。

「あ、あと図書室の先生怖かったよな。本の扱いめちゃくちゃ厳しくなかったか？」

「……ああ、そうだったかも。本に落書きした生徒とか、吊し上げる勢いで怒ってた気がする」
「そのせいであんまり図書室近づきたくなかったのかもなあ」

景が苦笑しながらこめかみを搔く。

「そんな苦手意識あったのによくここに手紙隠そうと思ったよね」

「ここに隠そうって言ったの俺だったっけ、お前じゃなかった？」

「違うよ、景か香梨奈でしょ」

「うわ、そうかも。そんな敵しい先生の目をかいくぐって何年間も手紙隠し続けられたらカッコいいな、みたいなこと思ってた気がするわ。思い出した」

奥の方の棚に移動した僕は、今日の目的であるタイムブックを探そうとする。でも残念なことに、僕らが手紙と挟んだ本のタイトルを景も僕も覚えていなかった。

「分厚い本だったよな。めちゃくちゃ重くて棚から取り出すのが大変だった覚えがある」

「そうだった気がするけど」

「曲がってたら気づかれるかもしれないから、手紙を挟んでもページが曲がらないような本を選んだはずだよな」

棚の下の方にしゃがみこんだ景は、背表紙に書かれたタイトル一つ一つに指を這わせながら一生懸命記憶を辿ろうとしていた。十年も経っているんだ、普通に考えても手紙はもうここにはないよ、と言いたかったけれど景の気が済むまで付き合おうと思った。

「香梨奈覚えてねえかな」

彼の口からため息と一緒に零れ落ちた彼女の名前に、この間のメッセージが頭をよぎる。多分訊いてみても知らないと言うだろうな、と思ってスマホは取り出さなかった。

「景、この前外国の文学史の本って言ってなかったっけ」

「いや、そうだと思ってただけど自信無くなってきた。景の郷土史だった気もするんだよなあ」
「あやふやだな」

僕も景の隣に座り込んで一緒に背表紙を確認していく。棚のいちばん端っこにあった本のタイ

トルをなぞった時、ぱち、と何かが走ったような感覚がした。

「……これかも」

「えっ、思い出した？」

景が僕の手元を勢いよく覗き込んでくる。その本は青い布で装丁されていて、そこにタイトルが金色の文字で刻まれていた。金色の文字はくすんだように黒みがかっていて、古い本だということがすぐに分かった。かなり大きめの本で、小学生が一人で抱えたらひっくりかえってしまいそうには重そうだった。その本のタイトルは、『世界文学大辞典』。古いフォントでそう書かれている。その文字に目を走らせた時、僕の耳元で香梨奈の高い声が出た。

『もし手紙をどの本にはさんだのかわからなくなってもさ、文字がキラキラしてる本をさがせばすぐわかるよ。ほら、たからものみたいじゃない？』

そうだ、この本にしようと言ったのは香梨奈だった。図書室に隠そうと言ったのは景で、隠す本を選んだのは香梨奈だった。消えてしまったと思った記憶は、驚くほどあっさり僕の中に再び蘇った。頭をくっつけるようにして図書室の隅で相談し合っている景と香梨奈と僕の姿が目の前に現れる。

景もその金色のタイトルを見て目を見開く。彼の頭の中でも香梨奈の声が流れたのだと思った。景は小さく頷いた。

「それだ。思い出した」

景は手を伸ばして棚からその本を引っ張り出す。僕も隣でそれを支える。ずっしりとした重み

が手の平にのしかかった。

景の手が厚い表紙にかかる。ゆっくりとめくられる表紙を、彼と僕はじっと見つめる。唾を飲み込む音がした。その音が景の立てたものか僕を立てたものか、それとも両方が立てた音なのか考える余裕は僕たちにはなかった。

めくられた表紙の向こうには何もなかった。手紙はおろか紙一枚も挟まっていない。息が詰まったような音が隣から聞こえた。

景の手は更に次のページへ伸びる。そうだ、別に表紙のすぐ裏に挟んでいたとは限らない。端の方が黄ばんでいるのに真ん中の方は新品のような白さを保っているページに、どれだけ長い時間この本が開かれていないかを感じ取る。一枚、景がページをめくった。

そこには何もなかった。また、一枚めくる。そこにも何もなかった。景は何も言わずにゆっくりとページをめくり続けては、そこに何も挟まっていないことを数秒かけて認識していく。何度それを繰り返したかわからない、しばらくその動きを繰り返していると突然景の動きが止まった。は、と空気が彼の口から漏れ出る音がした。

彼が今手をかけていたページは、その本の最後のページだった。もうそれ以上その本に何かを挟む空間が無いということは誰でも分かった。彼が最後のページをめくる。ぱたん、と音がして裏表紙が見える。本は閉じてしまった。

「無い」

その声に、思わず隣を向く。そう呟いた景の声には温度が感じられなくて、いつものような弾

むような明るさの響きはどこかに行ってしまったようだった。彼の顔には冷たく硬い表情が浮かんでいた。それはさっきビニールシートで覆われた校舎の前で見せた顔と、全く同じだった。

もう一度本を確認する必要はなかった。確認の必要がないほどに彼と僕はじっくりとページとページの間の空間を見ながらめくっていったから。

手紙はなかった。僕らが挟んだあの手紙はこの本には挟まっていなかった。まあ当然のことだったのだけれど。

本は間違っていなかった。確実にあの日僕らが選んだ本はこれだった。その確信があったからこそ、そこに何も挟まれていなかったことに景はものすごいショックを受けていたみたいだった。景は重い本を持ち上げて元の場所にそれを押し込むと、立ち上がった。

「そうだよな」

まだ冷たさの残る声。

「十年以上も経ってるんだから」

まるで誰かに言い聞かせて諭すみたい言い方だった。

小学校を出た僕らは、またイチョウの立ち並ぶ道を歩いていた。風の吹き方も木の揺れ方もさっき小学校へ向かう時と同じだったけれど、僕らの周りに漂う重々しさだけが行きと違っていた。

不意に景が僕の方を見て笑う。表情に硬さが残っていたせいで、頬が引きつれたような笑い方になっていた。

「ごめんな、普通に考えたら手紙が残ってるはずないよな。お前もないんじゃないかって言ったのに」

「謝らないでよ、景が悪い訳じゃないし。僕は久しぶりに小学校来れて楽しかったよ。本当に懐かしかったし」

僕の言葉を聞いて、やっと景の顔が和らぐ。そっか、それならよかった、と小さく彼が呟いた。「次は絶対達成しような、リストの項目」

「あと何があったっけ」

肩にかけていたバッグからリストが書かれたカードを取ろうとして視線を落とす。いつの間にか底の方に入ってしまったカードに手を伸ばそうとしていると、目の前にさっと影が差した。

反射的に足を止める。僕の爪先のすぐそばに、見慣れない白いコンパースの爪先が見えた。前を見ていなかったから誰かにぶつかりそうになったのだと分かって、すぐに顔を上げる。

「すみません、」

そう言っって顔を上げた瞬間、明るい色が視界をいっぱい埋め尽くした。眩しくて目を閉じそうになりながら、僕は今自分がぶつかりそうになったばかりの人のことを見る。

その人は僕よりも随分小柄だった。細い身体、そして肩のあたりまで伸びた髪は白色に近いような金髪だった。緩くウェーブがかかったその髪が揺れている。ほんのりと赤く染まったその人の唇が動いた。

「……こちらこそすみません」

高い声だった。はっとする。隣にいた景も、あ、と小さく声を漏らした。僕はもう一度その人の顔をよく見る。

上向きに上がった睫毛と、綺麗な形に整えられた眉毛。赤い唇はその肌の白さを際立たせている。化粧で彩られていても、その顔立ちは見覚えがあるものだと思った。景が口を開く。

「……香梨奈、」

僕らの目の前にいたのは間違いない彼女だった。記憶の中にある彼女の外見とはだいぶ違う。肩の所で切り揃えられていた真っすぐな黒髪は、明るい色のふわふわとした金髪になっていた。化粧をした顔には幼さはなく、着ている短い丈のワンピースもテレビの中に映るアイドルが着るものようだった。

名前を呼んだ景の声に、彼女は肩を震わせて僕らの顔を見る。彼女の目が次第にどんどん大きく見開かれていった。彼女がぶつかりそうになったのが僕らだと気がついたのだと、その瞳が教えてくれていた。この場から逃げ出そうとしているかのように彼女の脚が少し後ずさる。彼女の顔はどんどん強張っていった。

その表情は少なくとも久しぶりに再会した幼馴染たちに向けるようなものではなかった。何か恐ろしい化け物と対峙した人みたいに、もしくは腹を空かせた肉食獣の前に放り出された人みたいに、彼女は怯えていた。立ち去りたいとその脚が言っていた。けれどその脚が動く前に、景が驚くほど明るい声を出した。

「香梨奈、香梨奈だよな？ うわ、久しぶり。こんなところで何してんだよ」

その声に香梨奈は視線を揺らし、景と目を合わせようとしなかった。それに気づいているのか、気づいていないのか、景は弾んだ声で彼女に話しかけ続ける。

「俺ちょっと前にラインしたんだけど、気づかなかった？ 何で返してくれなかったんだよー」

ライン、という単語が景の口から飛び出した瞬間、香梨奈の頬を汗がつたうのが見えた気がした。彼女の瞬きが増えて、何か言わなければとその唇が開いたり閉じたりしていたけれど、そこからは何も出なかった。不意に彼女の視線が僕の方にやって来る。窺うような視線に、僕は彼女の意図に気づいて景にばれないくらい小さく首を振った。香梨奈が景に返事を返さず、僕にだけ返事を返したことは景には言っていないよ、と彼女に伝えるために。僕の仕草を見て、香梨奈は少しほっとしたように小さく息をついた。

「香梨奈」

景の声に、彼女は観念したのかぎこちなく微笑んだ。

「久しぶり、……ごめん、最近携帯調子悪くて気づかなかった」

香梨奈が返事をしたことに満足したみたいに景が口角を上げる。

「なるほどな、でも会えたから良かったわ」

「ごめん」

「いいよ。あ、どっか行くところだった？」

「いや……、大学から帰るところだった」

「そっか、大学忙しい？」

「あー……、まあまあ、忙しいかな」

言葉は少しづつ交わし始めた二人を見ながら、その言葉同士がどこか噛み合わずに上滑りしているように感じる。当の景と香梨奈もそのことに気づいているはずだった。何も考えずに口から言葉を放り出し合って会話をすることができていたあの頃とは違う、直接向かい合うことすら久しぶりな僕らは経験値を全て失ったみたいにな、お互いの会話のリズムなんてすっかり忘れてしまっていた。

そのぎこちなさを吹き飛ばすように、景が言う。

「ほら、もうすぐこいつの誕生日じゃん。今年もお祝いするんだけど、香梨奈も久しぶりに来いよ。せっかくの二十歳の誕生日だし、三人でいた方が絶対楽しいから」

香梨奈は言葉を詰まらせて、また視線を揺らがせる。どう断ろうかと考えているのは明白だった。

「あ……。でも、忙しいから行けるか分からないな」

「一日も空けられないくらい忙しい？」

「いや、そういう訳じゃないけど」

「じゃあいいだろ、香梨奈が良い日に合わせれば。いいよな？」

景は僕の方を向く。

「僕はいつでもいいけど。そもそも忙しいんなら無理に集まらなくても、」

「だってさ、香梨奈。いつくらいが空いてる？」

「え、いや、……」

矢継ぎ早に言葉を紡ぐ景に、香梨奈は声を失って目を逸らす。その仕草に、景がぐっと眉根を寄せる。

「景」

見かねて声をかけるけれど、景はどんどん表情を失っていく。口角は下がり、頬は固くなる。

「……香梨奈、何で俺らのこと避けてんの？」

その低い声に、香梨奈が弾かれたように顔を上げる。その顔には少しの焦りが見えた。

「さ、けてないよ」

「嘘つけよ、いくら忙しかったってこの何年間の間に会う機会なんていくらでも作れたろ」

香梨奈の脚が後ずさる。それを見て、僕は景の肩に手を置いた。

「景、言い方が強い」

僕の声と手の重みにはっとして、景は視線を香梨奈から僕へと移す。自分が言ったことを反芻するように彼は少し黙った後、何かを恥じるように目を伏せた。

「……悪い」

項垂れた景を見て、香梨奈が眉尻を下げる。困ったような表情を浮かべて、彼女は景を見ていた。その眼差しはどこか懐かしかった。それはあの頃、僕らがまだ三人一緒にいた頃によく見せていた彼女の柔らかい眼差しに似ていた。

「まあここでいきなり来れるかどうか訊いても、香梨奈も困るでしょ。まだ来月のことなんだか

ら決まってるない予定も多いだろうし。また連絡すればいいじゃない」

僕がそう二人に言うのと、二人は親に諭された子どものように小さく頷いた。また連絡するね、と香梨奈に言ってる、僕は景と一緒に歩き出す。景はまだ何か言いたそうにしていたけれど。僕が歩みを進めると黙ってついて来た。じゃあね、と香梨奈に手を振ると、彼女はおずおずと手を振り返す。その顔にはまだ怯えや焦りが張り付いたまま残っていた。

しばらく歩いてから肩越しに振り返ると、香梨奈はまだそこに立ち尽くしていた。僕らの方に顔を向けながら、前に進みもせず僕らの方に来ようともせず、ずっとその場所で僕らが遠ざかっていくのを眺めていた。

ごく、と砂にスコップを突き立てると懐かしい感覚がした。そのままスコップを持ち上げるとその端から掬いきれなかった砂粒がさらさらとこぼれ落ちていった。その砂の流れを見ているのが楽しくなって、僕は砂を掬っては戻し、掬っては戻しと数回その動作を繰り返す。と、横からものすごい破裂音が聞こえた。

「……大丈夫？」

横に居た景の方を向くと、景は赤くなった鼻をすすっていた。何かが爆発したようなけたたましくしゃみをした景は、汚れていない手首の辺りで鼻の頭を擦る。

「やばい寒すぎる、何か着て来ればよかったわ」

景は半袖のTシャツに薄手のジャージのズボンを着ていたけれど、こんな秋の夜更けにそんな

格好をしていたら寒いに決まっていた。何日か前も同じような格好をして寒いと言っていたはずなのに全然学習しない。でも景が気温に合った服を選ぶのが下手なのは昔からのことだった。

「てか、この状況大丈夫かよ。通報されないうな」

景が心配そうに周りを見回す。辺りには僕ら以外に誰も居なかった。冷えた空気が音も立てずにそこに漂っているだけだった。

「こんなことで通報されるわけないでしょ」

「いや、よく考えて見ろよ。深夜十二時の公園で大の男が二人で砂場で遊んでるの怖すぎるだろ」顔を上げると街灯に照らされて白く光る滑り台やシーソーが見えた。昼や夕方には走り回る小学生でいっぱいになっている小さな公園は、夜になると全然違う場所に思えた。僕らも小学生の頃はここでよく遊んでいたけど、日が落ちきってしまうとこんなにしんと静まりかえった空間になるのだと今日初めて知った。

「だって明るいうちは小さい子たちが遊んでるんだから、僕らが場所奪ったら駄目でしょ」

「その判断は大人なんだよな……」

景が目を細めながら大げさに肩をすくめて見せる。

「リストに『童心にかえって砂遊びをする』って書いたのは俺だけどさ、まさかお前がこんな乗り気になると思わなかったわ」

「景、話すのはいいけど手を動かして。太陽昇っちゃうよ」

「本気すぎて怖えよ」

そんなに砂遊び好きだったっけなあお前、と不思議そうな顔をして景がスコップで砂を掻き分ける。手のひらサイズのバケツに砂を詰めながら僕は笑う。

「めちゃくちゃ好きってわけじゃなかったと思うけど、でも今何かすごい楽しいよ。ハイになってる」

「砂遊びでハイになるもうすぐ二十歳の男って面白すぎるな」

砂を積み上げて、手の平で叩きながら押し固めていく。肌伝わらざらざらとした感覚と砂の匂いがどれも懐かしくて仕方なかった。景が砂がついて白くなったジャージをはたきながら僕の手元を見る。

「……ちなみに何作ろうとしてる？」

「モンサンミッシェル」

「砂で？ 今日本当にとっしたお前」

冷たい空気を吸い込むと、鼻の奥がひりついたように痛んだ。スコップでまた砂を掬い上げようとしたけれど、その瞬間ズボンの尻ポケットに突っ込んだままにしていたスマホが振動した。

スマホを取り出そうとして、手が砂まみれになっていることに気づく。

「まあいいか」

「いいのかよ」

景が頬を緩めて笑う。俺も今連絡来ても携帯触れないわ、と砂がへばりついた手の平を広げて見せる。

冷たい砂に手を突っ込む感触も、スコップで持ち上げた砂の重みも、どこで忘れてきてしまったんだろう。最後に砂で遊んだのはいつだったか、もう思い出せなかったけれど、子どもの遊びだからと砂場から遠ざかってしまったことが少し惜しかった。

「景、ちょっとこっち押さえてて。ここ作り込みたい」

「お前今日帰る気ある？」

景と二人で俯きながら砂と格闘していると、不意に後ろから誰かが近づいてくる足音が聞こえた。ざり、ざり、と砂を擦る音に、まさか警察じゃないだろうなんて思って振り返ろうとする。僕が後ろを向く前に、聞き覚えのある高い声があった。

「……何してんの？」

振り向くと、そこにはチェックのジャケットを羽織った香梨奈が立っていた。遅れて振り向いた景が大声を上げる。

「うわ、びっくりした香梨奈か！」

「いや……私の方がびっくりしてるけど。何でこんな夜中に砂場で砂遊びしてんの？」

香梨奈が本当に理解ができないというような表情を浮かべる。まあそりゃそうだよな、とおかしくなって思わず笑ってしまう。香梨奈が勢いよく僕の方を見る。

「笑ってないで説明してよ、あんたが呼んだじゃん！何なのこれ！」

「いやごめんごめん、この状況面白すぎて」

景が怪訝そうな顔で僕と香梨奈の顔を交互に見る。

「え、何、お前が呼んだの？香梨奈のこと」

「うん僕が呼んだ。一緒にしないかなって思って、砂遊び」

「何の説明もなく位置情報と『暇だったらここ来て』ってメッセージだけ送られてきたんだけど？」

景が声を出して笑う。

「それでくる香梨奈も香梨奈だろ、おもしろすぎる」

「何かあったんだと思うじゃん！」

いつの間にかすると三つの口から言葉が出てきていることに気づいて、こっそりと息をつく。良かった。

本当に香梨奈が来てくれるかは賭けだった。けれど、深夜の公園で砂遊びなんて特殊すぎる状況の中に連れてきてしまえば、勢いと特殊な雰囲気呑まれてぎこちなさなんて吹き飛ばしてしまえるんじゃないかと思ったのだ。この前はあまりにも突然すぎる邂逅だった。景にも香梨奈にも僕にも余裕が無かった。

だけど、今回は違う。僕にさえ余裕があれば二人の間のぎこちなさを解消することなんて造作もないことだ。何度二人の喧嘩を仲裁してきたか分からない。景と香梨奈はお互い意思が強くて、一度自分が正しいと思えばどちらも退かずにぶつかり合っていた。二人の誤解やすれ違いを解くのはいつも僕の役目だった。

「ごめんごめん、でもせっかく来てくれたんだから遊ぼうよ」

「そうだな、香梨奈も協力してくれ！モンサンミッシェル建築に！」

「マジで何をしようとしたの？」

香梨奈が眉をひそめながら再び砂場に座り込む僕らの方に近づこうとする。一歩踏み出した瞬間、彼女の顔がさっと強張った。彼女の足が止まる。

「香梨奈？」

景の声に、香梨奈は首を振った。

「……私やらない、帰るわ」

「何でだよ、急に」

「もう二十歳になるのに砂遊びなんて子供っぽいことするわけないでしょ、私はもう」

香梨奈は景とも目を合わせようとしなかった。早口でまくし立てる彼女は、どこに向かって話しているのか分からなかった。景や僕に向けてのものではなく、その言葉は彼女の口から外に出て、彼女の中に帰って行っているような気がした。僕らに再び加わることをしないようにと自分に言い聞かせているような響きを含んでいた。

「ごちゃごちゃ言わなくていいよ、ほら」

景がそう言って手を伸ばす。香梨奈の細くて白い手首を、景の日焼けした大きな手の平が包んだ。そうして少し力を入れて、景は彼女のことを僕らの方に引き寄せる。香梨奈はよろめくようにして砂場の中に入って来た。彼女の金色の髪が揺れる。ひゅ、と息が吸い込まれた音がして、彼女が叫ぶ。

「……ちょっと、めちゃくちゃ手首汚れたんだけど！」

その声に、慌てて景が手を放す。

「あ、やべ。手汚れてるの忘れてた、悪い！」

「もー、マジで信じられない」

大きくため息をつきながら、香梨奈が汚れた手首を見つめる。その眼差しは和らいで、彼女の肩から力が抜けた。

彼女がしゃがみ込む。足元の砂に手をゆっくりと突っ込んで、それから持ち上げる。さらさらと彼女の指の間から砂が零れ落ちた。彼女の爪はピンク色に塗られていて、きらきらとしたラメで綺麗に彩られていたけれど、香梨奈はもうそれが汚れることを気にしていないようだった。

彼女が小さく笑う。久しぶりに見た彼女の笑い方はあの頃と同じで何も変わっていないかった。

「……で、どう作るの？」

お手上げだと言うように、香梨奈が呟く。

「モンサンミッシェルって」

秋は夏よりも一瞬で過ぎ去っていく気がする。この間までまだ先のことだと思っていた僕の誕生日も、もう一週間後に迫っていた。

景からももらったカードに書かれていたリストはもうほとんどコンプリートしてしまっていた。

もちろんパンジージャンプやジェットコースターは全力で拒否したけれど、砂遊びもしたし美味しいハンバーグも食べたし、小学生の時にやっていたゲームも久しぶりにプレイして、その他の

項目も僕らはこつこつと埋めていた。

香梨奈の携帯の調子はすっかり良くなったみたいだった。もとい、香梨奈はまた僕らと連絡を取り合ってくれるようになった。離れていた時間など無かったかのように彼女はまた僕らに加わって、話し、遊び、笑っていた。

僕の十代ももう数日しか残されていない中で、僕らは予定を合わせて、三人で電車に乗り込んでいちばん近くの海へと向かった。最後に残ったリストの項目、『海に行く』というミッションをクリアするために。

僕らの住んでいる町からいちばん近い所にある海と言っても、到着するまでに二時間ほどかかってしまった。電車を降りた瞬間から、潮の匂いにする気がするとはしゃぐ景と香梨奈の顔が眩しかった。

秋の海には誰も居るはずがなくて、夏場海水浴場として賑わっていたはずの浜辺では波の音しか聞こえなかった。

「海だ、やべー久しぶり！ ちょっと走って来る！」

「走るって、景、ちょ……、行っちゃったんだけど」

香梨奈が砂浜を遠くへと走っていく景のを見て笑い声を立てる。

「景らしいじゃん、本当変わらないね」

「本当に」

荷物を下ろして砂の上に腰を下ろした僕の横に、香梨奈も座り込む。降り注ぐ日差しが香梨奈

の金色の髪に反射して輝いていた。

「何かすごく言いそびれたけど、すごく似合ってるよその髪の色」

香梨奈は僕の言葉に目を細めた。

「ほんと？ ありがとう、でも実は結構痛んでるんだ、髪」

ほら、と彼女の指に摘ままれた毛先はよく見ると細く縮れたようになっていた。

「痛むって分かってたけどね、どうしても染めたかったんだ。手っ取り早く変わる方法だって思ったから」

金色の髪の本一本が香梨奈の指先からこぼれ落ちていく。

「変わる方法？」

彼女の言葉を繰り返すと、彼女はこめかみを掻きながら笑った。

「私さ、ずっと変わらなかったの。小学校の頃からこの三人でずっといっしょに居てさ。二人と一緒にいる自分が好きだったし、この三人の関係性が好きだったの。図書室の本を勝手に『タイムブック』なんて呼んで手紙こっそり隠したり、走りながら帰ったり、他人からしたらどうでもいいことも大切にできて笑い合えることが、本当に好きだった」

風が潮の匂いと一緒に香梨奈の髪を持ち上げて揺らす。

「だからそのままじゃ駄目だと思ったの。あのまま二人と一緒に居たら、きっとこの関係性壊しちゃおうと思って」

だから二人から距離を取ったんだよ、と彼女は呟いた。景の姿はいつの間にか見えなくなって

いた。波の打ち寄せる音がした。

「だからメイクもファッションも勉強して、髪を染めて、大人になろうと思った。二人といっしょにいた子どもの頃の自分を捨てて大人になれば、景が好きだっていう私の気持ちも一緒に消せると思ったの」

景が砂につけていった足跡が波で消されていく。僕は香梨奈の方を向いた。彼女は眉尻を下げて笑っていた。僕はそれに頷き返す。

「結構前からそうなんじゃないかって思ってたよ。香梨奈が景のこと好きなんじゃないかって」僕の言葉に彼女が、やっぱりかあ、と呟く。分からない方がおかしい。香梨奈があんな柔らかな眼差しを向ける人間は景しかいなかったのだから。

「にしても鋭すぎるよ。あんたって、本当に私たちと同じ年なのかって疑う時ある。小学生の頃とか、実は元は大人で身体だけ縮んだんじゃないかって本気で考えてたもん」

「はは、そうなの？」

「でもこの前公園で砂遊びしてた時とか、めちゃくちゃ幼く見える時もあるんだよね。あんたが子どもなのか大人なのか未だに分からない」

香梨奈が足元の砂を握りしめる。公園の砂よりも乾燥して貝殻が混じっているその砂は、香梨奈の手の中でじっと留まっていた。

「でも何か、私あなたになら何でも話せるんだよね。というより、何でも話さなくちゃいけないような気になる。だから景には返信しなかったけど、あんたには返しちゃったし」

何も塗られていない香梨奈の爪の間に細かい砂の粒が入り込んでいるのが見えた。

「もう大人になろうとするのは止めたの？」

そう尋ねると、香梨奈は目を伏せて笑った。

「うん、もう止めた。てか大人ってなろうとしてなれるものじゃないのかもね。気づいたら、自然となっているものではないのかも」

それに、と言って彼女が立ち上がる。

「消せなかったもの。景が好きだって思っちゃう自分。会わなければ景のこと考えずにいられたけど、それってただ誤魔化してるだけで、あの日久しぶりに景に会ったらやっぱり駄目だった」
眩しさに目を細めるようにして香梨奈が笑う。

「その後公園で二人とまた会って、もう無理だって降参したの。やっぱり私は三人でいることが好きだし、景のことが好きだし、だからもう子どものままでもいいんだって」

彼女が正面から風を受けるようにして腕を広げる。その顔はすっきりと晴れていて、つややかな頬が光をいっぱいを受けていた。

「風が気持ちいい、私も歩いてくるね」

そう言って彼女は景が走って行ったのと反対の方向に歩いていく。さくさくと砂を踏みしめる音が遠ざかっていった。

「……香梨奈、何だった？」

真後ろから声がして、思わず肩を震わせてしまう。振り返るとそこには景が立っていて、僕の

ことを見下ろしていた。一体いつ戻って来ていたのかと思いつながら、景に笑いかける。

「風が気持ちいいから歩いてくるって」

その言葉を聞いて、景が呆れたように笑う。は、と乾いた息が彼の唇から漏れた。

僕はなぜ彼がそんな笑い方をしたのかが分からなかった。

「どうしたの」

「いや……、お前って本当に大人だよな。俺と香梨奈が喧嘩しそうになったらいつの間に入って止めてくれるし、俺が困ることも香梨奈が困ることも絶対言わないし。……お前ってずっと俺らの緩衝材でいてくれる」

景がさっきまで香梨奈が座っていた方と反対の側に腰を下ろして、僕と肩を並べる。走ったから汗をかいたのか、水しぶきが飛んだのか、その額には水滴が光っていた。

「香梨奈、しばらく戻って来なさそうだな」

景が波打ち際を歩いて行く香梨奈の後姿を眺める。金髪をなびかせながら、香梨奈はどんどんと先に進んでいった。

「そうだね。それにしてもあの髪色、本当に綺麗」

僕がそう呟くと、景は少し下唇を突き出して言った。

「俺はあんまり好きじゃない。前の髪の方が好きだった」

景が人の容姿についての好き嫌いを言うことは今までにはほとんどなかったので、思わず目を丸くしてしまう。

「そうなの？ まあ、感想は人それぞれだけど香梨奈の前でそれ言っちゃ駄目だよ」

言わないけどさ、と景が砂の上にごろりと寝っ転がる。景の唇の間から、ため息のような声が漏れた。

「……何でみんな変わっちゃうんだろうなあ」

景が自分の腕で顔を隠す。どんな表情をしているか見えなくなってしまったけれど、その声の硬さからどんな表情をしているかはなんとなく分かった。

「お前さ、怖いとか思ったりしない？」

「何が？」

「……、変わることが、怖いとか思わない？」

その声は僕が今まで聞いてきた景の声の中でいちばん弱々しいものだった。言葉尻は震え、かすれたような音がしていた。

「景、」

僕の声に、彼はびくりと身体を動かして、しばらく黙った。そしてまた小さく口を開く。

「最近、……眠れないんだよ。夜寝ようとして目を閉じると、色んなこと考えちゃって。就職とかさ、この先進路どうしようかとかさ。そんな感じのこと考えると、背中のところ辺りがすごいぞわぞわして、気持ち悪くて……。布団何枚被っても寒いんだよ。それで耳元で誰かがずっと囁いてるような気がするんだ」

砂の上に伸ばした景の手の甲が小さく震えていた。

「変われ、変われ、って。何かをしろ、何かを為せ、って。具体的に何をしろとか教えてくれないくせに、変われ、何かしろってずっと俺の耳元で囁いてくる」

それが怖くて、と景は泣き出しそうな声で言った。その声が、姿があまりにも痛々しくて胸が詰まる。

「変わる事が怖くなった。その代わり、ずっと変わらないものを見るとすごく安心するようになったんだ」

深く抉られた傷口を目の前に差し出されているような気分だった。僕は景の言葉をただ聞くことしかできなかった。

「この前小学校の校舎を見た時、俺らの通った校舎が無くなるかもしれないって聞いた時、タイムブックに手紙が挟まってなかった時、俺がどれだけ苦しかったか分かる？ 絶望するってこういうことなんだなって思った。腹の奥から血がドバドバ出てるんじゃないかって思うくらい気持ち悪くてぐらぐらして苛々した。物だって変わるんだ」

景の指が砂を掻きむしるように曲がる。

「香梨奈だって変わった。あんなに仲良かったのに、いつの間にか会わなくなって、連絡もつかなくなってる。久しぶりに会えたと思ったら俺の知ってる香梨奈はどこにもいなかった。俺の知ってる香梨奈は化粧もしてないし髪は黒くて服だって俺らと同じようなもん着てた」

景、と名前を呼ぶ僕の声に、彼はぎゅっと自分の身体を押し込めるようにして手足を縮める。長い手足を引き寄せて縮まるその姿は、大きく成長した身体を無理矢理子どもものに戻そうと

しているかのようだった。彼の手が僕の手首を掴む。ざらりとした砂の粒の感触が肌にめり込んだ。

「お前は変わらないで」

聞き逃してしまいそうなほど小さな声で景はそう言った。頼むから、と彼が続ける。

「変わらないで、一緒に居てくれ」

その絞り出すような懇願に、やっと理解する。彼が僕にくれたカードに書かれていたリストの項目のほとんどは、僕を過去に引き戻すためのものだったのだと。あるいは、迫りくる現実から目を背けるための彼なりの抵抗だったのだと。変わっていくものを見た時の景のあの冷たく硬い表情は、変化に対する彼の拒絶反応だったのだと。

変わらないで、と可哀想になるくらい弱々しく祈る景に、僕は変わらないよと応えてあげたかった。けれど、そんなことは言えなかった。僕がこの先変わっていくのか変わらないまま生きていくのか、それは何の確信も持てない問いだった。僕だけじゃない、全ての人間がそうだ。変わるよ、と言っても、変わらない、と言っても、どちらも嘘になりそうだった。

歩いていった香梨奈の顔を見ると、彼女は遠くの方で大きく手を広げて身体いっぱい風を感じていた。まだ僕の手首を握りながら震える景の身体は小さく縮こまっていた。両者を繰り返して見ながら、僕は景の耳に届くように言う。大丈夫だ、と。

なんて無責任な言葉だろうと思った。何の確信もないくせに先の平穏を約束するような言葉を彼にかけることに、罪悪感を抱かない訳がなかった。けれど、それ以外に何と言えただろう？

僕はこの先の人生をまだ生きたことが無かったし、未来を見通す目なんて何も持ってやしなかったのだから。

大丈夫だよ、とまた僕は呟く。景は何も言わなかった。後はただ波の音だけがした。

海から帰り、二人と別れ、僕は自分の部屋の中にいた。押し入れのいちばん奥の方にしまっていた段ボール箱を引っ張り出して、僕はその蓋を開ける。

目当てのものはずいぶん見つかった。箱の中からそれらを取り出して、部屋のライトにかざしてみる。

三枚の封筒には、それぞれ『けい』『かりな』そして僕の下の名前が大きくマジックペンで書かれていた。久しぶりに見たけれど、小学生の時の僕らの字はこんな形をしていたのかと思う。だけど誰が書いたのかすぐに分かるから不思議だ。

タイムブックに挟んであるはずだった手紙は、今僕の家の中の押し入れに入っていた段ボールの中にあつた。景が小学校の図書館の本をいくら探しても手紙なんて見つかるはずがないのだ。その手紙はここにあるのだから。

当時タイムブックに手紙を挟んでしばらくしてから、僕はあの青い装丁の本から三人それぞれが書いた手紙を抜き取った。誓って言うが、いたずらではない。景と香梨奈が図書室の先生に怒られるのを避けるためだった。二人は知らなかったはずだが、図書室に入り浸っていた僕はその

先生が本の貸し出しレシートを挟んだまま本を返却した生徒を恐ろしい勢いで怒鳴りつけているのを目撃していた。今思えば何をそんなに怒ることがあったのかと思うが、小学生の僕にはその事件は間違いないトラウマになった。そしてそのような恐怖を二人に抱かせまいと、僕はこっそりとあの本から手紙を抜き出し、今日までここに保管していたのだった。つくづく子どもらしくない子どもだと思う。

景にそのことを言うべきだったのだろうか？ 手紙を僕が持っているということ伝えれば、彼はビニールシートで覆われた校舎を見て絶望することもなかっただろうし、タイムブックに何も挟まれていないのを見てショックを受けることもなかっただろう。

しかし、それらはいずれ確実に景の元にやってくる絶望だった。

十年以上前の僕らが書いた文字を眺めながら、景と香梨奈のことを考える。大人になったり変化したりすることを嫌い、不変を望む景。子どもの自分を疎み大人になろうとしたけれど、諦めて時間に全てを委ね、今の自分のままでいることを選んだ香梨奈。愛すべき幼馴染たち。じゃあ僕はどうかだろう。大人びていて、でも幼い面もあって、大人でも子どもでもないような僕。僕はどうのように振り分けられるのだろうか？

来週僕は二十歳になる。二十歳になるからといって、目に見えて何が変わるわけでもない。確かに二十歳になって法的に許されることの幅は増えるかもしれない。だけどそれによって何が変わるわけでもない。年齢を重ねたとして僕という人間は全くそのまま、急に何かのスイッチがカチリと入ったみたいに中身がそっくり入れ替わりはしない。そう思っていた。けれど、確信は

ない。

何かが僕のすぐ後ろまで迫っているような気配がする。僕に残された十代が音を立てて失われていく。二十歳になったら、僕はどうなるのだろう。分からないままに、僕は手の中にある三枚の封筒を見つめながら考え続ける。

僕はこれから何を得て何を得ずに、何を失わず何を失うだろう。

(文学部文学科二年)

選考を終えて

東光原文学賞 総評

選考委員長 濱田 明

東光原文学賞は今年度で第十六回を迎えました。昨年度に続き熊本日新聞社の農孝生先生、本学の畑亜弥子先生、そして新たに加わった私の三名が審査員として、応募された十五作品から一次審査を経た八作品について二次審査を行いました。私は初めて選考に携わりましたので例年と比較することはできませんが、今年度の学長賞一作品と附属図書館長賞三作品の選出にあたっては、時間をかけ慎重に議論を重ねました。八作品から各審査員が一位または上位に推す作品が全員一致ではなく受賞作品をすぐには絞れなかったこともありませんが、応募作品のテーマ、作風の多様性、豊かさを示すものと言えるでしょう。

審査員全員で選出した受賞作品を紹介させていただきます。

学長賞『Absolute/Fragile』は、女子大学生倉科未紘がキックボクシングのジムに通う高校生シドウと知り合い、自分の生き方を見つめ直す作品です。未紘は高校生の時に、試合で対戦相手に圧倒され、限界を感じ卓球をやめています。キックボクシングにひたむきに取り組むシドウを見て、未紘はシドウを応援するようになります。躍動するシドウに自分の果たせなかった夢を

見つつ学生生活を送る未紘の心理が細やかに描かれています。地の文、会話とも的確な表現で、また最後のシドウの敗戦も未紘の新たな生き方を予感させる展開となっています。審査員全員から表現力、構成力と作品の全体的な完成度が高く評価され、学長賞に選出となりました。

附属図書館長賞には三作が選ばれました。『ネバーランドの黎明』は大人になることを拒む大学生の物語です。登場人物は女子大学生ヒナと同じアパートの隣の部屋に住む男子大学生キョウ。物語の世界は現実的ですが、大人になるかどうかを本人が選択する「ネバーランド法」という法律が存在します。大人になることを恐れ、子どものままでいようとするヒナに対し、就職活動を始めたキョウはついに大人になる選択をします。ひとり取り残されたヒナはそれでも子どもとして生きようとしますが、物語の最後に大人になることを受け入れます。大人になることを恐れためらうヒナの心理とその語りの切迫感が審査員から高く評価され受賞作となりました。

『ロストティーン』は大学生になり幼馴染からの関係が揺らぐ三人の物語です。語り手の「僕」には幼馴染の景と香梨奈がいます。「僕」の二十歳の誕生日に景は久しぶりに三人で会おうと連絡しますが、香梨奈から返事が来ません。香梨奈の景に対する秘めた思いが景に会うことを躊躇わせていたのです。その後、景と僕は母校の小学校に行き、図書室で三人の手紙を挟んだタイムブックを探します。活発な景にくらべ、登場人物としては控え目な語り手の「僕」でしたが、二人の気持ちを知る立場にあり、また物語の結末の重要な秘密を隠し持っていました。子どもから大人になる前の不安な思いが三人の登場人物ごとに巧みに書き分けられおり、物語の後半の展開の面白さも審査員に高く評価され受賞作に選出されました。

『青海』は、江戸時代末期から明治、大正、昭和から現在まで、日本、アメリカ、イングリッドでの自身の半生を「女性」が丁寧な言葉遣いで語る作品です。彼女が日本を離れる大正七年までの日本の歴史は物語の背景という以上に詳しく語られます。物語が進んでも主體的に行動することなく、運命に委ねられるままの主人公に対して読者は違和感を覚えるかもしれません。しかし、その不思議な語りは魅力的であり、物語の最後には、主人公に対する違和感も消え、読者も納得する結末が待っています。特異な語りを用いて物語を巧みに導くことに成功した作者の力量が審査員全員によって高く評価され受賞となりました。

以上の受賞作品の投稿者の皆さんには、素晴らしい作品を寄せて頂いたことに対して、感謝とお礼を申し上げます。

また今回一次審査を通過し残念ながら受賞に至らなかった作品名を挙げておきます。バーチャルユーチューバーをとおして自己の存在を問う「プラグイン」、戦後日本の混乱期を生きた祖父の秘密に孫娘と母親が迫る「ウワサの戦争」、現代と源平の時代が交差する「祇園精舎の鐘が鳴るとき」、新人中学教師と校舎の屋上でタバコを吸う中学生の交流を描く「タバコと宿題」。これらの作品に対して審査員からそれぞれの作品の魅力の評価するコメントがありました。今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員に感謝いたします。

学長賞一作品と附属図書館長賞三作品は『第十六回熊本大学東光原作品集』として刊行されます。『Absolute/Fragile』『ネバーランドの黎明』『ロスティーン』の三作品はいずれも主人公や語り手が大学生であり、テーマも大人になる前の若者の意識である点が共通しています。もし

かしたら現代の若者が真剣に向き合っている問題も、上の世代の一部の読者にとっては同じような切実さを持って読まれないかもしれないかもしれません。しかし、これらの作品の言葉は同世代の若者、そして次の世代の未来の読者の心にきつと響くことでしょう。

熊本大学の学生の皆さんがひとりでも多く、この作品集を手にとり、同じキャンパスで学生生活を送っている同世代の人たちの作品を読んでいただければと願います。自分が感じていたかどうか言葉にならなかつた思いがこの作品集にはそれぞれの作者の言葉で表現されているはずです。

またこの作品集が熊本大学の学外の方々のもとにもひろく届き、熊本大学の学生の創作作品に触れていただければと願っています。

今回受賞された皆さん、そして今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員にあらためてお礼申し上げます。そして最後となりましたが、この度の東光原文学賞の企画運営にご尽力いただきました宮崎誓附属図書館長をはじめ附属図書館の皆様方、昨年度に引き続きお忙しい中、選考委員をおつとめいただいた農孝生先生、畑亜弥子先生、そして東光原文学賞の実施にご支援をいただいた本学の小川久雄学長、大谷順理事・副学長、宇佐川毅理事・副学長ほか、ご関係の皆様方に深く御礼を申し上げます。

● 濱田 明（はまだ・あきら）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）教授。専門は十六世紀フランス文学。主な近著として『アイラヴ漱石先生 漱石探求ガイドブック』（集広舎、二〇二二年、共著）、「十六世紀プロテスタント詩人にとっての生と死」（荻野蔵平／トビアス・パウアー編『生と死をめぐるディスクール』九州大学出版会、二〇二〇年）、「ドーニエの『書簡集』」（北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集編集委員会編『コレスポンドンダス』朝日出版社、二〇二〇年）などがある。

講評…バラバラの破片から立ち上がる物語

選考委員 畑 亜弥子

昨年に引き続き東光原文学賞の選考員を務めました。熊本大学の前身である旧制第五高等学校の創作活動を継承しているのがこの文学賞であり、今回第十六回を迎えたということは大変喜ばしいことです。メールやSNSの使用が日常的になった昨今、画像や動画、短い文章で情報を得たり、人とコミュニケーションをとることが多くなり、若者の本離れが危惧されています。いや実はそれは若者だけの問題ではなく、今日に生きる私たちの問題かもしれません。数年前に、パリ・ソルボンヌ大学のフランス文学教授が、メールのやりとりなどが増え以前より本を読む時間が減ったとぼやいた、という話を耳にしたことがあります。このような時代に小説の魅力が薄れ、小説を書く学生の数が減り、この文学賞への投稿数が少なくなればこの賞も消滅、という懸念を抱くこともあります。しかし今回も蓋を開けてみれば十五作品の応募があったということで、小説は魅力的な存在であると確信し安堵しました。また、多忙な学業の合間を縫って、物語を紡ぐ行為に引力のように引きつけられる人たちがいるのだ、と感じました。前回同様に、附属図書館の職員の方々が一次選考を行い、それを通過した八作品の小説を審査対象として読みました。

創作は構築するものだと考えられます。前回の講評で、文学創造とは、アイデアとアイデア、イメージとイメージをつなぎ合わせる作業であると述べました。このことは、視点を変えると、物語創造の力がなければ、この世界には無数のアイデアが、無数のイメージがバラバラの破片として散らばったままということなのもかもしれません。確かに文学史には「大きな物語」へ向かわないチェーホフ『桜の園』のような、「バラバラ」のイメージを特徴とする作品もあります。また日常生活で普段はこの「バラバラの破片」を意識することは少ない、といえるでしょう。なぜなら私たちは、この世に生を受けてから、社会性を身に着けるように教育されています。社会的モラル、ルール、法律、発展神話などは、人間が集団として暮らしやすいように配慮されたストーリーを基盤としています。ちなみに最近ではSDGsという新たな価値観のもとに、社会の再構築が求められています。このようなことをとりとめもなく考えながら、今回の応募作品を、元はバラバラの破片がある種の必然性に従ってつなぎ合わされた物語世界として読みました。

学長賞に選ばれた作品『Absolute/Fragile』は、卓球とキックボクシング、恋愛を通じた若者の日常と成長物語を、読者の心をつかむような細やかな表現で書き表しました。主人公の倉科未紘は、卓球をやっている、ある敗戦を機にやめた過去の持つ、いまは偶然出会った高校生・紫藤夏生流が通うキックボクシングのジムになんとなく通っている大学生です。未紘の挫折を紫藤のキックボクシングが乗り越えることを願っているかのような、彼女の過去の卓球経験とキックボクシングのくだりが巧みに交差するのが、この作品魅力の一つです。またラストを飾るシーンも、それまでに物語中に絶妙に伏線として登場しており、表現力だけではなく構成本力の

高さもうかがわせました。

附属図書館賞は、『ネバーランドの黎明（以下『ネバーランド』と略）』『ロストティーン』『青海』の三作品でした。『ネバーランド』と『ロストティーン』は、タイトルからも読み取れるように「大人になる」がテーマにあります。十八歳を迎えるときに大人になるかならないかを選択できる法律がある世界を描いた『ネバーランド』は、大人にならない選択をした主人公ヒナとキョウの物語です。不安と葛藤が渦巻く大人前夜の大学生の心理を、語り手が鬼気迫る勢いでリアルに吐露します。『ロストティーン』は、男性二人と女性一人の三人の幼馴染が主な登場人物で、“僕”の二十歳の誕生日をきっかけにしばらく会っていなかった三人の物語が動き出します。“僕”と景の会話が等身大の青年を映し出していました。大人になる節目を迎えるのに、小学生からつづく世界の外が見えないのですが、砂場でモン・サン＝ミシェルを作るシーンに一筋の光を見ました。

以上の三作品は、大学生の「自分との対話としての創作活動」とみなすことができます。その一歩先に行くために筆をとる。これは物語への原始的な欲望かもしれませぬ。

これに対し『青海』は、久留米藩出身だが現在はいギリス・ペンザンスに住む「女性」が、幕末の日本と自身の半生を歴史的観点から丁寧語で語り切った異色作です。最後にこの女性が久留米からイギリスへ渡った「久留米つつじ」であることが明かされ、意外な結末が用意されています。実際に存在するこのつつじは、数年前にイギリスから久留米に里帰りした事実があり、ニュースに独自の歴史ヴィジョンを重ねた面白い創作方法だと思いました。前回の受賞者の一人が、

「次作は書きたいストーリーが思い浮かんだら書く」と述べていたのを思い出しました。

受賞作以外にも、殺人の場面があるものの現代の世相をうまく切り取った『ぶらぐいん』、横溝正史の世界を思わせる『ウワサの戦争より』など、次回作を読みたいと思わせる作品がありました。

選者として応募者の作品にじっくりと向き合ってみると、「文学からの要請」を感じました。心の中の様々な葛藤が見えたり、日々多くの情報に触れ知識を吸収するなかで、自分だけのストーリーがおぼろげに浮かんで来たら、その破片をバラバラのままに放置するのではなく、明確な物語にすべく、白紙の原稿用紙に向かい合うべきなのかもしれない、と思わされます。

● 畑 亜弥子（はた・あやこ）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門は二〇世紀フランス文学。主な近著として *Malraux vu du Japon* (Classiques Garnier、二〇一三年、共編著)、『アンドレ・マルローと現代—ポスト・ヒューマニズム時代における〈希望〉の再生』（上智大学出版、二〇二一年、共編著）、『フランス文学のたのしみかた…ウエルギリウスからル・クレジオまで』（ミネルヴァ書房、二〇二〇年、共著）などがある。

講評…変化への不安

選考委員 農 孝生

女の子が道端に座り込んで小さく泣いている。「大丈夫だよ、きっと」。近づいた男が声を掛けるが、どうしてやることもできない。それどころか感染を恐れて、彼女に触れることも避ける。女の子は自分の「影」を失っていた。

米国の作家バリー・ユアグローさんの寓話『影』は、そんなストーリーだ。新型コロナウイルスのパンデミックが起きていた二〇二〇年の四～五月、ユアグローさんはロックダウン（都市封鎖）されたニューヨーク市クイーンズ地区で、『影』など十二編を書き続けた。翻訳家の柴田元幸さんが『ボッティチェリ 疫病の時代の寓話』として全編を訳している。

疫病のために少女が失った影とは何だろう。家族、友人、健康…それとも何かほかの大事なものだろうか。非常事態下の「閉ざされた街」で紡ぎ出された寓話には、人々の感じた痛みや恐れ、不安が凝縮されているようだ。

疫病の災厄に限らず、人は誰しも何らかの「痛み」を抱えて生きているのではないか。しかし、自分では、はっきりとそれが見えない。痛みの存在に気づき、確かな形として自覚して初めて、

いくらかの回復を得られるのかもしれない。

賞長賞の『Absolute/Fragile』は、そんな回復の過程を描いているようだ。主人公の女子大生は、高校時代に卓球競技で挫折した経験を持っている。敗北感が傷となって解消されず、体の中におりのように沈んでいるかのよう。その痛みの存在が、キックボクシングの申し子のような男子高校生シドウの負け試合によってあぶり出される。女子大生がシドウに引かれたのも、自らの痛みの裏返しで、完全無欠とみえる存在に憧れるゆえだったのだろう。それらを自認したことで、女子大生は新たな一步を踏み出すことができた。文章のテンポがよく、うまくまとまった作品となった。

附属図書館賞の三作品のうち『ネバーランドの黎明』は、大人になることへの恐れを描いている。主人公の女子大生にとって「夜」は子どもでいられる時間の象徴のようだ。彼女は夜に安住し、ずっとその中にいたいと思っている。法律で選択できるようになっている「大人」への資格取得を拒み、卒業や就職を機に大人になっていく周囲にも同調できない。ところが唯一の理解者だと思っていたボーイフレンドが、大人になるという選択をする。不安にかられながら、主人公も夜から踏み出し、大人への切符に手を伸ばそうとする。

一方、同じように二十歳を題材にした『ロストティーン』には、自分を変えようとして変わらない女子大生（香梨奈）と、逆に変わることを恐れる男子大学生（景）が出てくる。幼なじみでありながら、疎遠になっていった二人は、もう一人の幼なじみの僕の二十歳の誕生日をきっかけに、人間関係を取り戻していく。大人になることを前にした若者の不安が、それぞれの性格の違いと

ともに書き分けられる。かつて通った小学校の図書館に、手紙を隠した本（タイムブック）を探しに行くという展開とオチが面白い。

二作とも「変化への不安」を表しているようで、興味深く感じた。過去三年間に社会を覆ったコロナ禍での生活と、逆にその巢ごもりのような日常から解放されることの不安。人と人との接触を避けた期間は不自由ではあったが、ある意味で人間関係の煩わしさから逃れられた時間でもあった。コロナ禍が緩和されて、人と人の距離は再びぐっと近づいた。二作はそうした学生生活の変化を反映しているのかも知れない。大人になるとは、より広い人間関係の中に踏み出して行き、自分自身を客観視していくことでもあるのだから。

もう一作の附属図書館長賞『青海』では、「わたくし」の一人称で、黒船来航以来の日本の（主に戦乱の）歴史が語られる。「雪のように白い肌」の語り手は、日本からイギリスに渡り、その後日本に戻ってくるが、最後までその正体は明かされない。しかし、結末に至るところで、国を超えた文化や人のつながりが浮かび上がり、感動を呼ぶ。整った文章で、最後まで読み手を引っぱっていく技術を評価したい。

●農 孝生（のう・こうせい）

熊本日日新聞論説副委員長。社説、コラム「新生面」「黙鼓子」などを担当。

新聞連載記事に「公共事業と山村」（一九九七年）、「再考 水俣病の医学」（二〇〇一年）、「否—ある水俣病闘争」（二〇〇四年）、「命ある場所」（二〇〇二—〇四年）など。

第十六回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇二四年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

